新ブストサル　第二巻

勝田圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新ブストサル　第二巻

【Ｎコード】
Ｎ７３７７Ｖ

【作者名】
勝田圭

【あらすじ】
三年生になったフットサル部部長の山野裕子。個性的な新入部員が続々入ってきて、今年も大変そう。部活の帰りに、バスケットボールをしているある一年生のプレーに、興味を持つのだが、しかし彼女は……

プロローグ（前書き）

新ブストサルの続編、シリーズ通産四巻目。佐原南高校編もこれで完結です。

プロローグ

裕子(ゆうこ)は膝を立て、膝に手を置き、ゆっくりと、立ち上がった。
全身を襲う疲労に息を切らせ、関節をへらでほじくられるような激痛に、顔を歪めている。
自分は、一体なんだって、こんなことをしているのだろう。決まっている。好きだからだ。みんなと、喜び合いたいからだ。
ひょこひょこと、片足を庇うようにして、裕子は歩いている。
ただ立っていることすら辛い。限界を越えて酷使しているそんな肉体を、気力が支えている。ともすれば萎えかけるその気力を、執念が支えている。
きりきりと、錆びたブリキ人形のように首を動かし、周囲を見回した。
みんな、へとへとだ。
この連戦だ。当然だろう。
自分たちだけではない。境東学館の選手たちも、息があがってきている。
辛い時には相手だって自分と同じくらい辛い。こういう時に、よく使われる台詞である。
しかし……
仲間たちの顔を見る。
武田直子(たけだなおこ)、
久慈要(くじかなめ)、
生山里子(いくやまさとこ)、
武田晶(たけだあきら)、
ここに立つ仲間たちの表情、誰一人として諦めていない。既に限界まで肉体を酷使しているというのに。リードを許している状況だというのに。もう、時間が残り少ないというのに。誰も、諦めていない。

嬉しくなってくる。
もう尽き果てたと思っていた力、まだまだ、湧き上がってくる。
ピッチの中だけではない。
「これからこれから！」
「相手もばててるよ！」
衣笠春奈や、星田育美、篠亜由美、そして梶尾花香や深山ほのかといった登録外の部員たち、思い思いに力一杯叫び、全力で応援をしている。
裕子は霞む視界にふらふらとしながらも、わずかに、目を細めた。
わずかに、口元に笑みを浮かべた。
ベンチにいる西村奈々の顔を見る。
ぽーっとした表情の奈々であったが、裕子の視線に気づくと、まるで幼児のように破顔した。
裕子は自分の胸を拳で強く叩くと、次いで小さくガッツポーズを作った。
武田晶のゴールクリアランスで試合再開。晶は、軽く助走を付け、右手に持ったボールを強く放り投げた。
ボールの落下地点へ走り寄り、腿を上げてトラップする裕子。
筋が切れそうだ。いまこの瞬間に、ぶつっと嫌な音が聞こえてきたとしても、なんら不思議ではない。
自分の身体に祈った。
足、もうちょっとだけもってくれ。これが、最後の試合なんだ。だから。
境東学館の矢島彰子が詰め寄ってくる。
彼女も相当に疲労しているはずだが、主将としての意地があるのか、表情からはまったく分からない。だが、試合開始時よりも明らかに動きが鈍くなっている。
裕子は里子へとパス、と見せかけ反対方向へちょんと蹴り、矢島彰子を抜き去った。
この連戦、向こうだって疲れている。足が止まってきている。こ

こで踏ん張らなかったら、一生後悔する。
だから、頑張れ、自分、頑張れ、足。
裕子はスペースを見つけて、大きなタッチでボールを転がす。そして、全力疾走に入った。
かつて経験したことのないような凄まじい激痛に襲われた。しかし裕子は、そんなくだらないことを気にしている暇はないと一蹴。むしろ、この痛みすらも前への推進力へと変換し、走る、走る。
連動し、里子たちもぐんぐんと上がって行く。
「逆転するぞ！」
裕子は吼えた。

第一章　今日から三年生

1

山野裕子の朝の様子を一言で表すならば、多忙。
ただ、何故に多忙かを客観的冷淡に一言で表すならば、自業自得。
今日もそんな、裕子にとっての普段通りの朝を迎えていた。
「やべ、遅刻する。あのクソ目覚まし！」
母である静江（しずえ）の目の前を、ほとんど裸に近いような格好で、ブラウスに袖を通しながら走り過ぎる。
「走りながら着替えるんじゃないよ！　はしたない。お前は女の子なんだよ！　それに目覚ましはちゃんと鳴っていたし、お母さんだって起こしたよ」
「起きなきゃ意味ねえ！」
洗面所から、裕子の叫び声。
「クソガキが」
静江は両手にフライパンと鍋のフタをそれぞれ持ったまま、いかり肩で洗面所の方へと小走りで向かって行く。数秒後、洗面所から、ガン、と金属でなにかをぶん殴ったような音が聞こえてきた。
ちょっとスッキリしたような顔で静江が戻ってきた。
「お父さんも注意してよね。本当にあの子、お行儀が悪いんだから」
父は一番に食卓に着いており、新聞に隠れるように顔をぴったりくっつけている。近眼のため普段からこんな読み方だが、妻の怖いところを見てしまうと、このようにより顔と新聞の距離が狭まる。
「ああ、忙しい忙しい」
裕子は洗面所から戻ってくると、朝食の並べられている食卓へと着いた。
「あと十分早く起きればいいところを、自分で勝手に忙しくしてんでしょ」
「はいはい。以後気をつけまーす」

「今夜は早く寝んだよ」
裕子は毎夜毎夜、母からは早く寝なさいと小言をいわれているのだが、早く寝ようが遅く寝ようがどうせ朝は眠いのだからと、いう事を聞いたためしがない。
「今日も朝から騒々しいなあ」
あくびを噛み殺しながら、裕子の兄、孝（たかし）がやって来た。
「兄貴オッス」
「はい。オッス」
二人は手の平を打ち合わせた。
せかせかしている裕子と比べて、口調からも態度からもいかにものんびりとした様子の孝である。
裕子に続いて孝も席に着いた。
「そんじゃ、いただきまーす」
裕子は食卓に並べられたご飯に手をつける。朝は米。母のポリシーにより山野家の朝は平日休日問わず、ご飯が必ず出る。
今日は和食。ご飯に味噌汁、焼き魚、玉子焼き、海苔、筑前煮、納豆、お新香。
裕子は驚異的な速度で食べ進めていく。ろくに咀嚼をせずに、次から次へと飲み込んでいく。
ぐおっ、と唸り、苦しそうな表情で、ジュースと味噌汁を口に流し込み、胸をどんどんと叩く。と、もう、速度全開で食事を再開している。
「朝ご飯食べてかないほうが、よっぽど健康的なんじゃないの？」
寝起きに凄まじい光景を見せられて、げんなり顔の兄貴。
「兄貴、知らないの？　朝はちゃんと食べたほうが成績がいいんだよ」
「あんたは、これ以上悪くなりようないでしょ！」
静江が横槍を入れる。
「三者面談では、お母さん思ってることきっちりと先生に相談して、びしびしやってもらうようお願いしますからね。日にちが決まった

ら教えなさいよ。この間みたく内緒にして、ウチの親来られなくなりましたなんて先生にも嘘ついてたりしたら承知しないよ」
「ごちそうさまでしたあ。おいしかったでーす。ババうるせっ。もう行かないと電車間に合わないや。よいしょっと」
裕子は立ち上がると、足元のカバンを手に取った。
「歯磨きは？　あと、どさくさに紛れてなんかいわなかった？」
「別になんも。ほんとに時間ないから、歯磨きパス。それに、裕子ちゃんはまだ食い足りないのでーす」
と、電子レンジの上に置いてある平たいバスケットから、食パン一枚を抜き取った。
「だから早く起こしたのに。もう。あんたは今日から三年生なんだからね」
「はーい」
玄関に行き、靴を履く裕子。
「最上級生があんなんでいいのかしらねえ」
「髪の毛伸ばし始めて、見た目が随分かわいらしくなったと思ったけど、やっぱり裕子は裕子か。まあ、パンが二枚でパンツーなんて下品な駄洒落をあまりいわなくなっただけ、進歩か」
ダイニングから、母と兄の会話が聞こえて来る。
好き勝手いいやがって。
「そんなセンスのない駄洒落いったこと一度もねーよ！　それじゃ、行ってきまーす！」
裕子は玄関のドアを開けた。
風が吹き抜ける。
青い稲穂の海が、視界一杯に広がる。
ここは、千葉県香取市にある四階建てマンションの四階。周辺は今後発展予定とのことだが、現在のところ、全方位広大な田園地帯に囲まれている。
見晴らしは抜群によいけれど、田んぼばかりなのはどうにも味気ない。

電車が一時間に一本か二本という、辺鄙なところなのでどうしようもないのであるが。
階段を降り始める。
マンションにエレベーターはあるが、呼んで待っている時間諸々を考えると階段を駆け降りたほうがよっぽど早い。
一階エントランスに到着。オートロックのドアを通り抜け、外へと出る。
パンを口にくわえると、走り出した。
ショートカットにしたさらさらの髪の毛が風になびく。
つい最近までは、男子の野球部員か柔道部員かというくらいに髪の毛を短くしていたのだが、「就職面接に響くかもよ」と兄貴にいわれて、ちょっと試しに伸ばしているのである。
もうちょっと伸ばしてみる予定だけど、それがしっくりこなかったら、採用試験を待たずして元に戻す。元どころか、スキンヘッドにしてもいいくらいだ。と、裕子は考えている。長い髪の毛は、どうにも鬱陶しいばかりで好きじゃないのだ。最近学校のトイレに入っても女子が驚かなくなったというのは嬉しいけど。
裕子は、高校を卒業したらすぐに就職するつもりでいる。勉強するつもりがなくても高校は出ておくべきだと思うけど、勉強するつもりがないなら大学は意味がない、と考えているから。大学で勉強以外の色々を学ぶことも大切かも知れないけど、そのためだけに親から学費を出してもらうのは忍びないし、自分で払うくらいなら、そもそも興味がないのだから行く必要はないだろう、というわけだ。
広大な田んぼを突っ切り終え、小さな住宅街へと入った。ここを抜ければ、もう香取駅が見えてくる。
非常に見晴らしのよい道なので、裕子はいささかもスローダウンすることなく爆走を続けている。見晴らし云々よりなにより、目を見張るべきは裕子の驚異的な体力。カバンとバッグをそれぞれ手にして、十分近くも速度を落とさず走り続けているのだから。しかも器用なことに、手をまったく使わずに、口にしたパンを食べている。

駅までの、いつもの道を走り抜けていく裕子。
いつもとなんの変化もない通学風景。
変わったのは、わたしの方。
裕子は思った。
今日から、高校三年生になったのだから。
春、
桜、
クラス替え、
そして、素敵な出会い。あると、いいな。恋愛の出会いだけでなくさ。
といいつつも、恋愛比重の方が圧倒的に高いけど。いいじゃん、単なる願望だ。
食パンをかじりながら全力疾走の裕子。妄想に、顔がちょっとニヤけた。
あと二度ほど角を曲がると、住宅街を抜けて、ロータリーや駅舎が見えてくる。
野生味たっぷりなフォームで爆走しながらも、裕子はまだ乙女チックな想像を続けていた。
少女漫画の一話目なんかだとさあ、こういうさあ、かわいい主人公の女の子が新しい気持ちで爽やかに登校してるシーンって、角を曲がったところで素敵ななにかが起きちゃったりなんかするよね。
あたしいま第一話！
心に叫びつつ、裕子は角を曲がった。
バキュームカーが爆走してきた。ひき殺されそうになり「ぎゃー」と絶叫しつつ、なんとか横っ飛びでかわし、バレーボールの回転レシーブのように転がった。慣性の法則で自分と一緒に横っ飛びして落下する食べかけの食パンを、しっかり掴んだのはいいが、さらにそこへ老人の乗った自転車が突っ込んで来た。
老人は裕子を避けようと急ハンドルを切ったため、転倒しかける。
裕子は素早く起き上がると、カゴとハンドルを掴んで倒れかけた

自転車をなんとか支えた。
過ぎ去りてみれば、すべて事もなし。
裕子と老人、安堵のため息。
「飛び出しちゃってごめんね吉田さん、大丈夫？　じゃ、急ぐから」
吉田さんは、この辺りに夫婦二人で暮らしている老人で、この時間によく散歩をしているため、いつの間にか顔を見れば挨拶する仲である。
いきなり、ガクッと崩折れる裕子。頭に激痛。もしかしたら、さっき、車にかすったかも知れない。
いいや、あとあと。カバンを拾い、また走り出す裕子。
「元気だな裕子ちゃんは」
吉田さんが、後ろから声をかける。
「だって、それしか取り柄ないもん」
住宅街を走り抜けた。
香取駅のホームに成田方面への電車が入って来るのが見える。
「やば。加速装置！」
裕子は叫んだ。
足の回転にターボエンジンのごとき急加速がかかり、爆音が空気をつんざき、一瞬にしてロータリーを突っ切った。
もう十分早く起きればいいのに。毎日進歩のない裕子の慌てっぷりに、きっと駅員さんも、いや駅舎も電車も、空にぽっかり浮かんだ白い雲も、そう思っていることだろう。

2

始業式を終えた佐原南高校の生徒たちが、次々と体育館から出て来る。
新二年生と新三年生だ。
通路を通り、校舎へと入り、それぞれの、これから一年間を過ごすことになる新たな教室へと向う。
騒々しいが、しかし爽やかな熱気に溢れた、そんな光景。

笑顔で冗談をかわし合う者、
よい一年にしようと内面に闘志を抱く者、
なんだか新鮮さが嬉しくて、とにかく我を忘れて騒ぎまくる者。
それぞれに、思い思いのことを胸に描く生徒たち。そんな者たちでぎっちりぎっちり溢れかえっている廊下を、山野裕子は、同じ部活の仲間である武田晶と並んで歩いている。
武田晶は、真ん丸顔が印象的で、裕子にはよくジャガイモ顔などといわれてからかわれている。
「晶ちゃ～ん、一緒のクラスになれてよかったねー」
裕子は晶に肩を寄せ、可愛らしく小首を傾げた。
「どうでもいい」
晶は裕子にちらりと視線をやることすらせず、真正面。無表情のままぼそりと呟いた。
裕子の表情が、一瞬、ぴくりと変化する。
無言のまま歩き続ける二人。
数秒後、
「ネクラ女！」
裕子は叫び声をあげると、晶の身体へ真横から容赦のないショルダータックルを食らわせていた。
まったく予想もしていなかった事態に、受け身すら取れずに、ぶざまに壁に激突する晶。顔面、強打した。
「なにすんだよ、王子！」
こういうわけの分からないことしてくるから、一緒のクラスになるの嫌だったんだ。
さすがにムカムカとした晶は、裕子にまったく同じことをやり返す。
いや、攻撃失敗。
反撃を予期していた裕子は、闘牛士よろしくひらりとかわすと、晶の肩に両手を置いて、攻撃の勢いを利用して弾き飛ばした。
晶は斜め前方を歩いていた教頭先生の背中に体当たりしてしまっ

た。
「こら！　武田、ふざけてるんじゃない！」
「すみません……」
って、なんでわたしが謝らないといけないんだよ。
晶は、裕子を睨みつけた。
「そこの君ぃ、先生に乱暴はいけないよ」
しらじらしい真顔で注意をしてくる裕子。
晶は諦めた。
なにもしないのが一番いい。
仲の良いのか悪いのか分からない二人だが、たとえ晶が嫌がろうとも、当面は縁の切れることはない。何故なら二人は、同じ部の部長と副部長という関係だからだ。
晶は先ほど、裕子のことを王子と呼んだが、それは裕子のあだ名である。
以前の裕子は、とにかく髪の毛が短かった。顔立ちそのものは女の子として整っている方なので、そこから、美少年みたいということで、いつしか王子と呼ばれることになったのである。
この冬から髪の毛を伸ばし始めており、まだまだ短めな方ではあるが、スポーツをやっている女子としては特に珍しくもない長さになってきている。
伸ばし始めた理由は、前述の通り、就職を考えて兄の助言に従ったものである。
鬱陶しくて就職どうでもいいからバッサリ切ってしまいたいと思うこと度々であるが、我慢している理由がもう一つある。髪が多少伸びてメンズヘアから脱却してきた頃に、生まれて初めて男子から告白されたのである。
しかし、まったく好みでないタイプだったので、「髪伸びたら寄ってきやがって。外側しか見てないんか！」と、怒って蹴飛ばして、断ってしまったのだが。
好みの顔だったら絶対ＯＫしてたのにな。と、自分も外見でしか

判断していないことに気付いていない裕子であった。
その後、これはストライクゾーンだという男子と学校のイベントを通して、良い雰囲気になりそうという兆しがあったのだが、兆しのうちに相手に逃げられてしまった。裕子がいくら頑張ろうとも急には自分を変えられず、可愛らしい会話が出来ず、それどころか無意識にお下劣な話ばかりがお下品な口調でぽんぽん出てきてしまって、ドン引きされてしまったのである。
とにかく、髪の毛普通にしていれば、色々ときっかけが増えることは実感した。いつかはきっと良い相手と巡り会える。巡り会えたらとっとと髪の毛を切ろう、鬱陶しいから。
本来の目的は就職活動なのに、そんなことすっかり忘れてしまっていた。
「そうだ、あとで入部届、職員室に取りに行かないとな。部員、入って来るかなあ。どんな子が来るんだろうな」
裕子の頭の中は、これから一年を過ごすクラスのことよりも、部活のことのほうで一杯だ。
「さあ」
そっけない、晶の返事。
「里子みたいのばっかりだったら、困っちゃうね～」
裕子は、自分の言葉に受けて、がははと笑った。生山里子、一生意気な＞かわいい＜後輩だ。
晶は口を閉ざし、正面を向いたままだ。
いぶかしむ裕子。王子みたいなのばかりよりずっとましだよ、くらいいってきそうなものなのに。普段無口なくせに、こういうときだけちくりと刺してくるのに。
「なんだよ晶、一年が入って来るの嫌なんかよ」
その言葉に晶は、はっとしたように目を開き、
「いや、違う違う、そういうわけじゃなくて！」
「なんだよ。なにムキになってんだ？」
「別に……ムキになんか、なってない」

「変なのー」
それから教室に着くまで、晶はずっと無言のままだった。

3

「バカ部長、今日もまた遅刻みたいなんで、それまで普段通りに練習！」
「はい！」
武田晶の指示に、整列している部員のほぼ全員が元気良く返事をした。例外は三人。二年、九頭葉月（くずはづき）、おどおどしていて声が小さい。二年、梨本咲（なしもとさき）、ぶすくれたような態度で気のない返事。三年、真砂茂美（まさごしげみ）、そもそもまったく口を開いていない。
晴れ渡る気持ちの良い空の下、新三年生と新二年生は、練習を開始した。
普段は体育館を使うのだが、今日は他の部の都合により使用が出来ないため、用具をグラウンドに持ち出しての屋外練習だ。
二チームに分かれて、サッカーボールでパス回しの練習を始めた。いや、子供用なのか、よく見るとボールが少しだけ小さい。しかも、高いところから地面に落ちてもほとんど弾まない。
実は、彼女たちの行っているのは、サッカーではなく、フットサルというスポーツの練習、そもそもボールが違うのだ。
フットサルというのは、主に室内で行われる、サッカーから派生した球技だ。細かいルールは色々と異なるが、なにより目に見えて違うのがプレーヤー人数。サッカーは一チーム十一人だが、それに対してフットサルは五人。だから戦術面でも、サッカーとは根本的に理論が異なる競技なのだ。
武田晶は、佐原南高校女子フットサル部の副部長である。部長補佐が役割だが、しかし、今期の部長が部長なので、もしかしたら部長以上に忙しいかも知れない。
王子の奴、どこほっつき歩いてんだか……
晶は心の中で愚痴をこぼした。

今年度から顧問の先生が変わるのだが、部長である山野裕子が、その新たな顧問を呼びに出たっきり、戻って来ないのだ。
宿題を忘れて居残り勉強させられるなど、いつもいつも部活に遅刻してくる部長だが、今日は初日だけあって珍しくちゃんと来たと思ったら、結局この通りだ。
みんなで用具を準備して、校庭をジョギングして、ストレッチして、軽く筋トレして、それからボール使った練習を開始して、と、もうかなりの時間が経っているというのに。
部長不在のまま練習メニューは進み、続いては、三人組を作って、ボール保持と奪取の練習に入った。
ゴレイロ――サッカーでいうゴールキーパー――である武田晶と梨本咲の二人は、ここからは他の部員たちと分かれて、キーパーグローブをはめ、手を使った、専用の練習に入る。……はずであったが、しかし肝心の咲がいない。
「咲、やるよ！　どこ？」
晶は視線きょろきょろ、咲を探す。
見つけた……
「なにやってんの、咲、里子！」
集団の中に咲の姿が見えないと思ったら、端に置かれているゴール前で、梨本咲と生山里子とがＰＫ勝負をしている。咲がゴレイロ、里子がキッカーだ。
「里子！」
いつも無表情で、寡黙で、感情を表に出すことの少ない晶だが、微妙に語気が荒くなっている。大事な初日だというのに部長が行ったきり戻って来ないので、少しイラついているのだ。
「だってあたし、あぶれちゃったし」
里子は助走をつけ、ボールを蹴った。
咲が瞬間的に軌道を見切り、右手ですくい上げるように弾いた。
「ああ、惜っしい」
「惜っしいじゃないよ。あぶれたんなら、四人組になりゃいいだろ

！　ＰＫ練習が悪いとはいわないけど、好き勝手やられちゃ困るんだよ」
これから先輩になるんだという自覚はないのか、こいつらは。
しかし、注意しても、二人ともいっこうにやめる気配がない。
この二人は、ほんとに始末におえないな。
晶は感情をほとんど表情に出さないタイプである。いまだってそうだ。しかし、表情に出さないだけであり、心の中ではしっかりため息を連発している。並の速度ではない、一秒間十六連射だ。
生山里子は自分勝手で、梨本咲は集団に逆らう性格だ。これまで、二人のアウトローはいがみあっては喧嘩ばかりしていた。いわゆる犬猿の仲だ。ボールを顔面にぶつけ合ったこともあるくらいだ。最近それが改善され、少し仲が良くなってきたなと思っていたら、こんな有様である。
ゲリラを各個撃破するのと、反乱軍との紛争と、どっちが楽かという話だ。手のかかること、いささかも変化がない。
ぎすぎすとしていないだけ、現在の方がまだましだが。
いやいや、騙されてはいけない。こいつらの好き勝手を放っておいたら、他の者に示しもつかない。
「咲！　里子！」
先輩舐めるなよ。いつまでも甘い態度ばかりしていないからな。
「はいはい。じゃ、あと五本やったらね」
咲は、面倒くさそうに晶を一瞥した。
「……五本だけだよ。里子も、あぶれたなんていってないでハナたちに混ぜてもらえよ」
甘過ぎだ、わたしは。晶はまたも、心の中で十六連射。
「よっし、今度こそ絶対決める！」
悩む副部長の存在などもう完全に忘れ、里子はゆっくりと助走をつけ、ボールを蹴った。
助走速度や蹴り足を上げるゆっくりさからはとても想像の出来ない、振り下ろす速度のあるキック。上手くミートし、威力だけでな

く弾道角度もどんぴしゃり。里子は、蹴った瞬間にこれは決まったと確信を持った。先程はコロコロを狙って阻止されてしまったが、今度はタイミングを完全にずらしてやった。

見事、右上隅に決まった。

と見えたは里子の目の錯覚であったか、ボールは咲の手が弾いていた。

咲は、またもやシュートを阻止した。

晶が見ているだけでも、もう六、七本ほどこの勝負を続けているが、里子が決めたのはたったの一本だけだ。

咲、とても反応がよくなってきている。ライバルの成長を目の当たりにした晶は、素直に感心していた。

里子相手だと咲は二倍の力を発揮するので、その分は差し引かないといけないのだろうが、それでもこの読みや反射神経は素晴らしい。

もともと得意としていたハイボールの処理も最近さらに良くなってきたし（フットサルには、あまり関係ないが）、もう自分が引退しても安心して任せられる技術力を持っている。

ただ一つの問題は、咲が下級生に教えられるかだな。性格的に。

「おい、みんな、集まれ！」

ボールに乗って飛び交っていた黄色い声を、低く野太い男性の声がかき消した。

体育教師のゴリ先生こと、高村広大（たかむらこうだい）先生がゆっくりと近付いてきた。

「えー、まさかあ」

「うわあ」

篠亜由美と梶尾花香は、嫌そうなな顔を隠しもしない。

オジイ、いや北岡先生が茶道部の顧問に変わることは知っていたが、後任が誰になるかまでは聞かされてなかった。よりにもよって、熱血体育教師の高村先生だとは。

ぽっかり雲の浮かぶ空の下、集合した部員たちと、高村先生とは

向かい合った。
「山野は？　あいつがここの部長だよな」
「先生を呼びに行ったんですが、随分と前に」
副部長の武田晶が受け答えをした。
はて、と高村先生が怪訝そうな顔をしていると、
「あーーっ、ゴリ先生！　なんでここにいんの！」
山野裕子が叫びながら走ってくる。
「お前こそ、なにやってんだよ」
ゴリ先生の怒鳴り声に、空がばりばりと震えた。
「だってだって、四時半に職員室行ったのに先生いないんだもん！」
裕子は泣きそうな顔で、身体をふにゃふにゃと左右に揺すった。
「そんな遅い時間に、いるわけねーだろ。三十分遅いんだよ」
「だって、あっちのグラウンドでソフトやってて、近藤がちょっと代打やってっていうから」
「あのなあ、それ理由になると本気で思ってんか。お前、部長だという自覚はあるのか。それに、今日から三年生だろうが。もっとしっかりしろ、しっかり。バカタレが！」
「分かりました！　いわれた通りしっかりと鍛えて、ひっぱたかれても平気な体になります！」
「ひっぱたかないから……ひっぱたいたりなんか、しないから……そういうことされないように、気をつけろよ。な。お願いだから。お前さあ、部活でも、いつもいつも遅刻してるそうじゃないかよ」
高村先生、喋る言葉にどんどん力がなくなってきている。登校時に閉じた校門を乗り越えようとしたり、門を無理矢理開こうとしているところを見つけてよく叱っているため、裕子の生活態度は充分によく分かっているはずなのに、一向に慣れない。
「だってよく、ひっぱたくぞって怒鳴ってるじゃないですかあ。怒るでしかしぃ、って」
「怒るでしかしなんていってねえよ！　ひっぱたくといってるのはな、生徒のことを思えば例え自分がどうなろうと辞さない、教育者

としての覚悟の問題をいってる訳だ。おれが子供の頃と違って、現在は、ちょっとしたことですぐに親が飛んできて、ＰＴＡが騒ぎ立て、校長教頭平謝り、って、その甘さは子供をダメにする以外のなんでもない。子供にだけでなく、バカ親に対しても毅然とした態度をとれなくては、この日本という国の未来は……って、聞け！」

裕子は、生山里子と尻取リフティングを始めていた。

「り、り、りだから、リンゴ」

「没収！」

高村先生は、里子からボールを引ったくった。

「いいとこだったのに。あれ、晶、そういえばさ、新入部員は？」

裕子は、きょろきょろと周囲を見回した。

「知らないよ。ここに呼んであるからって、王子がいってたじゃん。そうそう、それさっきから気になってたんだよ」

「……体育館って、いっちゃったような気がする。癖で」

むむ、としかめっ面の王子。

「じゃ、気がするじゃなくてそうなんだよ！　なにやってんだか。だからそこは、あたしが仕切るっていったんだよ。いいからいいからなんて、全然よくないじゃん。そんな程度もちゃんと出来なくてどうすんだよ部長のくせに！　バカじゃないの」

東京大空襲並みの爆弾連続投下に、裕子はたじろいだ。

「いまここでそんなにあたしを責めたてて、この部にとってなんかいいことありますかあ？」

「開き直るなよ。もういいよ、あたしが連れてくるから」

晶が踵を返そうとすると、

「体育館ですよね。あたしが行ってきますよ」

二年生の、梶尾花香が元気良く走り出した。

「ありがとね、ハナ！　……ほんっとハナは気がきくし、親切だよなあ。愛嬌あるしさあ。ちっこくて可愛いよなあ。いいお嫁さんになるんだろうなあ」

と、これみよがしに里子にちらちらと視線を向ける裕子。花香と

里子、大親友同士なのにこうも違うものかな、と、そんなオーラをその視線に乗っけて。
「あたし、自分のこと気がきかなくて不親切むしろ意地悪って分かってますから、チクチクやられても全然気にならないんですが。一人の部員が無神経で気がきかないことよりも、一人の部長が部長として人間としてだらしないことの方が早急に対処すべきよほど重大な問題だと思いますが、あたしだけですかね、そう思っているのは」
うわあああん、と情けない泣き声をあげて逃げ出そうとする裕子。
「逃げんな山野」
高村先生が襟首を引っつかんだ。
「だって里子ちゃんがいじめるうううう」
「るううう、じゃねえよ。もうすぐ一年生が来んだから。お前がいなくてどうすんだ」
「おう、そうだった。すっかり忘れてた。今度こそ可愛い後輩ちゃんたちならいいなあ。去年は里子に咲に、最悪だったもんな」
しかし、仮に可愛い後輩ちゃんが来たとしても、まだ入部確定ではない。二週間は体験期間であり、簡単に退部して他の部を試すことが出来るのだ。
とはいえ、入部届に記述された経験の有無や中学での所属部を見たところフットサルの経験者は多いので、辞められる可能性は低そうだ。フットサルがどんなものか知っていて入部希望しているのだから、部の雰囲気が最悪ということでもない限りは……多分……
「里子、咲！　お前ら、先輩になるんだから、後輩に示しつかないようなことばっかりすんなよ。少なくとも体験期間終わるまでは変態封印！」
「封印するのはお前だ」
ゴリ先生は、裕子のほっぺたを思い切り左右に引っ張った。
などとじゃれあっていると、体育館の方から梶尾花香の声が聞こえてきた。
「こっちこっち」

彼女を先頭に、あどけない顔をしたジャージ姿の女生徒らが、ぞろぞろと歩いて来る。
「とうとう新入部員がある、キターー！」
お笑い芸人の物まねで、腕を突き上げる裕子。
あれ？
裕子の視線は、一年生の一人にフォーカスロック。
あの子の顔、なんだか……
ちらりと、隣に立つ晶の顔を見る。
「ほんとに、来ちゃったよ」
晶が、ちょっと青ざめたような顔で、ぼそりと呟いた。
花香に連れられた一年生たちが、どんどんと近付いて来る。
「あ、お姉ちゃあん、うおっす！」
晶に似た真ん丸顔の新入部員は、跳びはねながら両手をぶんぶんと振り回している。
「うわ、やっぱり晶の！」
裕子は思わず叫んでいた。妹がいることは本人から聞いたことがあるけど、この学校に入って来るとは、ましてやフットサル部に入って来るなどとは考えたこともなかった。確かに入部届に名前が書いてあったかも知れないが、苗字が武田じゃ平凡過ぎて分かるはずもない。
しかししかし、姉妹とはいえここまで顔が似ているとは。
「そう、妹の直子だよ。本当にフットサル部に入って来るとは……悪夢だ。……あたし、退部しようかな」
晶はがっくりとうなだれた。
武田直子は、集団から抜け出ると、足取り軽く晶の方へと走り寄って来た。
「はい、お姉ちゃん、忘れ物。もう遅いかも知れないけど。教室が分からなくて朝渡せなかったから」
武田直子はそういうと、姉にカードだか写真だかを手渡した。
「なにそれ？」

覗き込む裕子。
「大谷君のブロマイドです」
はきはきと、直子は答えた。
「え？　ジャミーズの？　なに、晶、疾風のファンなの？」
「そうなんですよ。一緒にコンサート行ったこともありますよ。お姉ちゃん大はしゃぎで、ほんと恥ずかしかったです。うおお、タッくーん、って両手振り回しちゃって。今朝ね、占いでてんびん座の人は運気最悪、急上昇させるラッキーアイテムは好きなアイドルの写真です、なんていってまして。それを見てたお姉ちゃんがあたしに、確か大谷君のブロマイド持ってたよね、ちょうだい、ってせがんできて。まあ、前々から大谷君アイテムを、せがまれてはいたんですけどね。あたし、興味が星野君に移っているから、あげてもいいかなって。でも、朝、渡し忘れちゃって。家を出た後に渡そうとも思ったんですが、お姉ちゃん、先に行っててやっぱりトイレ行っとくわ、なんて青ざめた恐ろしく必死な形相でお腹抱えて家に戻っちゃったから。仕方ないから学校で渡そうと探したんだけど、教室が分からなくてお姉ちゃんと会えなくて」
マシンガンの弾層がようやく空になったようで、直子は口を閉ざした。
「晶が、占い？　ラッキーアイテム？　大谷君？　コンサート？　ブロマイド？　大はしゃぎ？　ほんと、それ？　タッくんうおお、って」
裕子は真顔を保とうとするが、目が完全に笑ってしまっている。
「はい」
ぶーーっと吹き出す裕子。最初から、我慢出来るはずがなかった。
「だからって、なんでいま渡して来るんだよ！　あと、トイレがどうこうって、それ、いう必要あるか？」
晶は妹の顔を睨みつけた。
「だって……」
銀河を駆けるクールな一匹狼、武田晶の意外な趣味の判明に、堪

え切れなかったのは裕子だけではない。二年三年のみんなも、誰からとなく声が洩れ、一瞬にして大爆笑の渦となった。
「ね、ほか、ほかになんかない？　晶のこと。えっと、なにが好きなの？　どんなテレビ見てる？」
裕子は嬉々とした表情で、直子の両肩をばんばん叩き、せがんだ。
「日曜の朝にやってる少女アニメかかさず見てますね。あたしよく分からないですけど、なんとかフォルテシモーなんてキャラと一緒に叫んでますよ」
裕子、また手を打って大爆笑。
「あたしも好きだから見てるけど、晶がってのが笑える！　ノーザンライトフォルテシモー！　叫んでんのか、あおいちゃんの台詞！　晶が！　腹痛え！」
晶は、裕子のお尻をかなり本気で蹴飛ばした。以前に空手を習っていたのは、もしかしたら今日この日のためだったのかも知れない。
しかし裕子は、痛がりながらも晶の怒る姿に、さらに笑いの感情を刺激され、腹を抱えて地面をごろりごろりと転がり始めた。
「バカ王子！　ナオも、なんでそういうことペラペラ喋るんだよ！」
晶は直子から貰ったブロマイドに目をやった。疾風のメンバーである大谷恭平君が、魅力的な白い歯を見せて爽やかに笑っている。
大谷君のバカ。何がラッキーアイテムだよ。運気、最悪なままじゃん……
晶は、がくりと肩を落とした。
梨本咲は、直子の横にならぶと、肩に腕を回して引き寄せた。
「なんだか君とは、仲良くなれそうな気がするよ」

4

体験入部生も交えての、今年度の練習初日が終了した。
全員で用具の後片付けを終え、集合して終わりの挨拶。解散。
その後、山野裕子と武田晶は、体育館の裏にあるプレハブの部室で、今後数ヶ月間のおおまかな予定を打ち合わせ。

なにかあれば臨機応変に修正するとして、とりあえずは前年度の流れを踏襲、ということで、それほど時間のかかることもなく終了。
部室から出た二人。
すぐ目の前にある体育館通路の出っ張りに、武田直子が腰を下ろしているのに二人は気付いた。
「あれ、どうした？」
裕子は尋ねた。
直子はすっと立ち上がって、
「はい。お姉ちゃんと一緒に帰ろうと思いまして。……お姉ちゃん、さっきのこと、まだ怒ってる？」
直子はうつむきがちに、やや首を横に傾げた。
晶は直子へ近付くと、
「そんないつまでも、怒ってるわけないだろ。ナオがわざわざ持って来てくれたんだし」
そういうと、直子の脇腹に肘をぐりぐりと押し付けた。
「くすぐったい、やめて」
直子は笑い出した。
三人は、体育館通路を歩き出した。体育館の外周を半分ほど進んで北校舎、裏口から入り、突っ切って昇降口へ抜け、外へ、校門へ、と運動部員のほとんどが帰宅時に利用するルートだ。
「直子ちゃん、練習、きつくなかった？」
裕子が尋ねる。
「高校だから、やっぱりハードですね。中学の時にずっとやってきていたのに、筋肉痛になりそうですよ」
「すぐ慣れるから大丈夫。……しっかし今更だけど晶の妹が入ってくるとは、まさかの展開だよなあ。今年の新入部員は。他の子も、なんだか個性的なのばかり集まったしな」
「王子がいうかな。でもまあ、そうかも」
晶が面白くなさそうな表情でぼそりと呟く。面白くないからというより、普段からこんな顔をしているだけだが。

「でしょ。自己紹介からして、なんか凄かったもんなあ」
裕子は、二時間半ほど前の記憶を回想した。

梨本咲は、直子の横にならぶと、肩に腕を回して引き寄せた。
「なんだか君とは、仲良くなれそうな気がするよ」
ぽんぽん、と肩を軽く叩いた。
直子はちょっとうろたえたように、
「あ、は、はい、よろしくお願いします」
咲のなんだか不良少女みたいな顔に、どんな態度で接すればいいのか戸惑っているのだろう。
「無駄話はそこまで。集合！」
高村先生の太い声が響く。
「あれ、ゴリ先生、いつからここに」
裕子はびっくりした表情を浮かべた。
「おれとお前で、つい今さっき会話してたろうが！　鶏の頭かお前は。それじゃ、自己紹介な。まずは先生から。ああ、北岡先生に変わって今年からこの部の顧問になった高村だ」
「やっぱりそうなんだー」
「オジイの方が楽でよかったなあ」
「篠と梶尾、うるさい。では、今度は上級生から新入部員への挨拶」
山野裕子を先頭に、向き合って立つ一年生たちに次々と名乗っていく。
そして、最後、新入部員から先輩たちへ自己紹介だ。
「辻美香菜（つじみかな）です」
彼女が軽く頭を下げると、裕子を筆頭に何人かから「おーっ」と下品な声が上がった。顔立ちがかわいらしい上に、微笑の仕方、お辞儀の仕草まで、引き込まれるくらいに魅力的だったからだ。
「小五からフットサルをやってます。ここのフットサル部は強いと

聞いていて、だから、ここに入りたくて、佐原南を受験しました。
ニックネームなんですけど、中学の頃から小学生のいつからだかずっと、デンって呼ばれてます」
「何故デン？」
顔とのあまりのギャップに、裕子は漫画のいわゆるズッコケシーンのように前のめりに倒れそうになった。
「頑張りますので、よろしくご指導お願いします」
辻美香菜は、再度頭を下げた。
上級生、拍手。
「しっかり挨拶も出来て、里子とは大違いだなあ。酷かったもんな里子は。もしあたしがその時に部長だったら、往復ビンタ食らわせてたね。顔が二倍に膨れあがるくらい」
裕子は一年前を回想した。当時の部長、ぐっと堪えてはいたけど、やっぱりブチ切れそうな顔してたよな。
「しっかり挨拶するなんて、百万円積まれても嫌ですね」
里子は悪びれもせずにいった。
続いての挨拶は、辻美香菜の隣、
「岸田森（きしだもり）です。よろしくお願いします。以上」
なんだかそそくさとした態度で終らせ、一礼し、手振りで次へ譲る。
「なんかおばさんぽいっ」
裕子は無意識のうちに独り言を呟いていた。彼女、顔立ちは若いというか幼く見えるくらいなのに、声が少しかすれていて、滲み出る物腰もどことなくせかせかした庶民的な主婦のようで……
岸田森は、つかつかと足早に裕子の元へと歩み寄って来た。
「あたし、その言葉には敏感なんですよね。だらだら喋ると絶対そう思われるから、ささっと喋って終らせようとしてたのに」
唇をきゅっと噛んで、裕子を睨み付けた。
「ごめんちょ」
裕子が謝ると、岸田森は「もういわないで下さいね」といい残し

て、元の場所に戻った。
　アホじゃなかろか。もういわなかろうがなんだろうが、いまので、みんなの頭の中に完全にインプットされたぞ。わざわざ文句いいに来なきゃ、気付かない者もいたかも知れないのに。裕子はそう思ったが、口には出さなかった。また舞い戻って来られそうで怖かったから。顔だけ見ると小学生みたいなのに、なんだか貫禄が凄いんだもん。
「佐奈夏樹（さなつき）です」
　言葉や態度は非常に流暢だが、しかし……
　裕子や里子が彼女の顔をじっと見ていると、それに気付いたのか、
「ハーフではありません！　外国人でもない！　完全な日本人！」
「なんもいってないんだけど。まだ」
　しかし佐奈夏樹本人が先回りしようとするのも無理はないのかも知れない。日に焼けたような彼女の黒い顔は、堀が深く、悪くいえばくどく、とにかく中東だか北アフリカを思わせる、エキゾチックな外国人顔なのだから。
「結構この顔気にしてるんで、からかうにしてもお手柔らかにお願いします。ま、気に入ってもいるんですけどね」
　と、ちょっと笑いを誘って、本人も真っ白な歯を見せた。
「フットサルの経験は中二からです。それでは、よろしくお願いします！」
　頭を下げた。
　上級生、拍手。
「永田三水（ながたみみ）です。名前の漢字がちょっと変わってまして、三つの水と書いてみみと読みます。両親は色々意味合いを考えてつけてくれたらしいんですけど、どんなんだったかごちゃごちゃしてて忘れちゃいました。そんな話はどうでもよくて、えっと、中学に入った時からフットサルやっています。人数少なかったからＦＰもよくやってましたけど、だいたいはゴレイロでした」
　百五十センチくらいと、身長は低い。その分というべきか、非常

に俊敏そうに見える。
　ゴレイロ経験者か。いよいよ、咲のライバルが入って来たな。どれほどのレベルなのかは分からないけど、ＦＰも出来るっていうから咲ちょっと焦るだろうな。あいつ、足元てんでダメだし。競い合う、いい関係になってくれればいいけどね。と、裕子はゴレイロが入ってくれたことの効果に期待をしていた。
　現在の正ゴレイロである武田晶は、今年の夏で引退。それからは、咲に頑張ってもらわないとならないからだ。
「武田直子です。中学の時からフットサルをやってます。足を引っ張らないよう頑張ります。先輩方、それとお姉ちゃん、よろしくお願いします！」
　直子は屈託のない笑顔で、元気よく大声を出すと、深く頭を下げた。
「あたしだって先輩だ。なんで分ける」
　仏頂面の晶。周囲に軽く笑いが起きた。
「星田育美です」
　非常に野太い声。身体もそれに負けていない、いや、むしろ勝っているかも知れない。身長は、百七十半ばはあるだろう。すらりとしてはいるものの、がっちりした印象を見る者に与える。骨太なのか、筋肉質なのか、どちらかだろう。小柄な武田直子の隣に立っているため、彼女の大きさが際立っている。
　なすびのようにやたらと面長な顔立ちも特徴的だ。この体型だからしっくりくるものがあるが、そうでなかったら、違和感どころの騒ぎではないだろう。
「さて、先輩方にクイズです。わたしの中学の時のあだ名はなんでしょう。第一ヒーント！　この、肉体的特徴に関係があります」
　星田育美はそういうと、手を突き出し人差し指を立てた。
「はい」
　裕子が手を上げた。
「ジャンボ」

「違います。じゃ、第二ヒント。顔に関係があります」
「ペリカン。シャクレ。闘魂。三日月。アゴ」
裕子は思うままに連発していく。
「最後の正解！　アゴでーす」
「しゃーーっ！」
裕子、勝利のガッツポーズ。
どう考えても失礼極まりない裕子の言葉であるが、彼女は全然気にしていないどころか、当てて貰えたことを喜んでいる。
そう、星田育美の顔は面長なだけでなく、アゴがとにかく長く、そして若干しゃくれ気味。高身長という大きな特徴が霞んでしまうくらいに。
「過去を分析するに、慣れてくるとみんな絶対にこの顎をからかってくるんで、自分からネタにしてさっさと部に溶け込んでしまおうという作戦でした。チャンチャン。というわけで、先輩方、とお姉ちゃん、よろしくお願いします！」
星田育美は一同に頭を下げ、次いで武田晶に向かって頭を下げた。
「あたし、あんたのお姉ちゃんじゃないよ」
冗談を理解せず、真顔で受け応えている晶。
裕子は思わず吹き出してしまった。星田育美、面白い。
さて、次だ。
「深山ほのかです。ええと、星田さんと違って目立った特徴はなにもない、ごくごく平凡な者ですが、それにフットサルは初めてではありますが、先輩方、どうかよろしくお願いします」
どことなくのんびりしたような、甲高い声。軽く、お辞儀をした。
「特徴の塊で悪かったな！」
星田育美は低い声を一層低くして、深山ほのかの首に両手を回し、締め上げた。
「アゴ、やめて、苦しい、死ぬ、嘘、さっきの嘘、育美ちゃん可愛い！」
「この顔が可愛いわけあるか！」

ぎりぎりと、手に力を込める。
「おーいアゴ、いい加減にしないと本当に死んじゃうから」
裕子は早速、星田育美のことをあだ名で呼んでみた。
「冗談でーす」
育美とほのかは二人揃って、パーにした両手を小さく広げておどけてみせた。
「かなり真剣な顔してたけどな。締め殺すんなら学校と関係ない所でお願いします。じゃ、次。最後」
「村上史子（むらかみふみこ）です。家が成田にあり、一昨年たまたま成田の会場で佐原南の試合見て、こんなチームでプレーしてみたいなって思ってました。練習頑張って、早く役立てるようになりたいです。よろしくお願いします」
頭を下げた。
こういう雰囲気が苦手なのか、少し表情が固い。
上級生、拍手。
他、もう三名ほど一年生がいたのだが、結局、残らなかったため、紹介は割愛する。
ともかくこうして、上級生と新入部員との挨拶は無事に終了した。

「こいつね、昔からあたしの真似ばかりするんだよね。佐原南を受験するっていい出した時も、やっぱりって思ったよ」
晶。裕子に愚痴っても仕方ないのだが、他に話す相手もいないので。
「違うよ！　真似じゃない！　えっと……血が繋がってるから、たまたま同じの選んじゃうんだよ」
武田直子は、必死になって姉に抗議する。
「空手とハンドボールをやめて、中学からフットサル始めて、って、たまたまでそこまで同じなわけないだろ」

「たまたまです！　絶対！」
直子はほっぺたを膨らませた。餌をぎっちり詰め込んだハムスターみたいだ。
「分かった分かった」
こいつ、こういうのは、絶対に折れないんだからな。わたしが他の学校に転校でもしたら、絶対に、たまたま転校してくるくせに。
晶は、顎をぽりぽりと掻いた。
「どうかしました？」
直子は、王子先輩に真横からじーっと見られているのに気付いた。視線がどうにもくすぐったくて、黙っていられなかった。
「いや、顔はとっても似ているのに、妹はなんでこんな可愛いんだろ、って思ってさあ。ほんと、なにが違うんだろう」
腕組みして、しきりに首を傾げる裕子。
「悪かったな、可愛くなくて」
ぶすくれる晶。
「悪いと思ってんなら反省しろよ」
「ほんとに悪いと思ってるわけないだろ、バカ」
「お前だってあたしよかちょっといい程度の成績だろ、このデンプン顔！」
「どんな顔だよそれ！」
「家に帰ったら鏡見てくださあい」
二人のそのやりとりを聞いていて、笑い出す直子。
「お姉ちゃんって学校では無口なのかと思っていたら、意外とよく喋るね。変わったね」
「変わってない。こいつが、人を怒らせるようなことばかりいってるだけだ」
どんと裕子の肩を押す。
「え、学校では無口って？　家ではどうなの？」
裕子は、直子の言葉の細かな部分を聞き逃さなかった。学校の授業でもこれくらいの集中力があればいいのだが、と先生たちがここ

にいたならば思ったことだろう。
「お喋りってわけでもないですけど、たまに口が止まらないことがありますね。疾風の大谷君の話している時とか」
「ナオ、うるさい！」
遮ろうとする晶。しかし、裕子は追求の手を緩めない。
「晶って、お笑い番組見るの？」
「見ないよそんなの！」
「大好きですよ。一昨日も、両足をぱしぱし打って大笑いしてました」
それを聞いた裕子は堪え切れずに、ぶははーと大声で笑い出した。
「ナオ！」
「そんな、怒らないでよ」
直子は、弱々しげな視線を晶へ向けた。
「怒っては……いないよ」
晶は頭を掻いた。
なんだか甘いのか辛いのか分からないお姉ちゃんだな。と裕子は思った。
三人は、体育館通路を歩いている。
窓からは、中の様子が見えている。
男女バスケットボール部がまだ練習をしているようだ。
そう、今日はバスケットボール部が、体験入部生のための練習試合でコートを広く使いたい、ということで、フットサル部はグラウンドの片隅で練習をやることになったのだ。
体育館全体を使って練習試合が行われており、さながらバスケ大会だ。
「もうこんな時間なのに。初日だというのに頑張るなあ」
裕子はもっとよく見ようと、窓枠へと近寄った。

5

「あたしは逆に、初日だから今日は頑張れましたけど。毎日は、き

ついなあ」
直子も足を止めて、裕子の隣に立った。
晶は一分でも早く帰宅して疾風のライブＤＶＤを見たかったが、仕方なく、二人と一緒にバスケ部の練習を見るのを付き合った。
「一年生と上級生、なのかな。ビブス付けてるほうが一年っぽいな。素人目にも実力差を感じるけど、でも、結構試合になってるね」
裕子たちの見ているすぐ目の前では、女子バスケ部員が試合を行なっている。
その白熱した練習試合を、裕子は楽しそうに見ている。
「みんな、中学の時にもやってたんだろうね。連係面では当然ちぐはぐだけど、個人技ではそれほど遜色ない感じだ」
と、晶は、なんだかんだと裕子と直子の間に体を割り込ませて、しっかりと見物している。試合形式の練習だから、見れば見たでそれなりに面白いのである。
「だから、こっちに投げてっていったでしょう！」
ビブス女子の一人が声を荒らげている。
なんだろ。と、裕子は思ったが、すぐにその理由が分かった。
一人、てんでルールを知らなさそうな子が混じっているのである。
ボールを持ったと思ったら、敵である上級生にパスしてしまう。ボールを持ったと思ったら、すぐにダブルドリブルで注意を受ける。注意されたのにプレーを止めない。ボールを取り上げられても、近くに転がっている別のボールを勝手に拾って、プレーを始めてしまう。珍しくドリブルしたと思ったら、ラインを越えて隣のコートの試合に入り込んでしまう。
「ひゃあ。なんか、無茶苦茶だなあ。ひっでえわ、ありゃあ。普通、バスケ未経験だって、もう少しルール知ってるぞ」
しかし、言葉と裏腹に裕子の表情は、なんだか微笑ましい。
他人事だからというよりも、その子が、無茶苦茶ながらも笑顔でプレーしているのが、見ていて気持ちいいのだ。
とはいえ、やっぱり、酷いもんだね。わたしの方がよっぽど上手

なんじゃないか。
などと思っている裕子の、まさにドギモを抜くようなことが、目の前で起こった。
背後から二人のディフェンスにつかれたその子が、一瞬にして反転し、軽やかなステップで、二人の間を稲妻のように突破したのだ。
「すげえ！」
裕子は叫んでいた。
一瞬の集中力が、半端なく高い。でなければ、あんな抜き方は出来ない。
結局、またラインを越えて隣のコートまでドリブルしてしまい、ファールになってしまったのだが。
「ああいうのがうちにいたら面白そうだなあ。何年だろ。ビブス組だから、やっぱり一年生かな」
裕子の独り言に、直子が答えた。
「西村さん。一年生で、あたしと同じクラスです。でも、あの子……」

6

西村奈々は、今日も山田秀美（やまだひでみ）たちに取り囲まれて、からかわれている。
入学式の翌日に早速からかわれ、その翌日から授業が開始したら、案の定というべきか色々と難癖をつけられ、今日でもう三日連続だ。
「じゃあさ、この問題は分かんの？」
と、山田秀美は英語の教科書を開いて、指を差した。
一緒に取り囲む他の二人の女子が、ニヤニヤと笑みを浮かべている。
西村奈々はニコニコとした表情で、まず問題から読み始めた。
「…の…になる…えなさい。……あとの部分、難しくて分からん」
問題文は、「次の中から当てはまる英単語を選びなさい」漢字の部分が全然読めていない。

「答えるどころか、問題が読めてねえじゃん、バーカ！　脳味噌入ってんのかよ」
山田秀美は、奈々のおでこをつついた。
「うん。あたしバカだよー」
と、無邪気に顔をほころばせて笑い出した。
「脳味噌も、あんまり入ってないんだろねえ」
虚勢を張っているというより、そもそも、からかわれていることに気がついていないかのようだ。
佐原南高校が、福祉活動の一環として本年度から試験的に実施することになった、知的障害者受け入れ制度。今年はまず、二人の生徒を迎え入れることになっており、そのうちの一人が西村奈々だ。彼女は、中度の発達障害を抱えている。簡単に表現すると、脳がある年齢までしか成長しないのだ。
もちろん、周囲のサポートや、本人が経験を積むことで、色々と出来ることは増える。知識はどんどん増やすことが可能だが、知能、知性は、幼児レベルのまま、これ以上の発達は望めない。実際にそうかは神のみぞ知ることだが、とにかく医者からはそう断言されている。
「バカはさあ、勉強しなくていいんだって。ノート破り捨てちゃえだって、先生が」
「やったー」
そういうと奈々は、ノートを両手で掴んで引き裂こうとするが、厚みがあって簡単には破けない。
「あ、でも破いちゃたらお絵かき出来なくなっちゃうねえ」
奈々は渋い顔を作った。
「そんなのは、教科書に書けばいいんだよ。こうして」
山田秀美はボールペンで、奈々の教科書に悪戯書きを始めた。
取り巻きの、小出恵子（こいでけいこ）や安東正江（あんどうまさえ）も面白がって落書きに参加する。
教科書がどんどんカラフルに、ごちゃごちゃ賑やかになって行くのを見て、奈々は喜んでいる。

五時限目の授業が終わったばかり。六時限目を控えて、ほとんどの生徒が、教室内にいる。
ここにいる誰もが、いまこの教室で何が行われているのか、理解している。
正確には、被害を受けている本人だけが理解していない。
これは、明らかないじめであるということを。
いじめと知っていながら、誰もが見て見ぬふりをしている。居心地の悪さを感じながらも、やはり自分まで被害者にはなりたくないのだ。
その縮こまっている生徒の中には、武田直子もいる。
山田秀美には、ガラの悪い連中と繋がりのある兄がおり、その兄はこの学校の三年生とのことだ。真偽のほどは分からないが、入学式の日に本人が大声で喋っていたし、まず間違いはないのだろう。
普通の子に対してだって、いじめを注意することの難しい時代だというのに、ましてや……
とはいえ、やっぱり、教科書に落書きするなんて、ひど過ぎるよ……
だったら……そう思うのなら……自分が、注意すればいいんだ。
でも……
直子は胸を押さえた。
心臓、どきどきしている。
結局、直子はうつむいて葛藤しているだけで、なにもすることが出来なかった。
山田秀美らは、下品な笑い声をあげながら教室を出て行った。
教室が静まり返った。
気まずい空気が教室の中を支配していた。
その張り詰めた静寂に、耐え切ることの出来なかった直子は、自分の席を立ち、そっと奈々の座る席へと近寄った。
「大丈夫、だった？」
なんだ、この質問は？

直子は胸の中に不快な違和感を覚えた。
もっと他に、気のきいた言葉はないのか。
殴られたわけじゃない上に、本人はいじめられていると認識していないというのに。なにに対して、なにがどう大丈夫だというのか。
だいたい、気のきいた言葉を探すくらいなら、もっと前に、庇ってやればいいのではないか。そんなことも出来ないくせに、今更……
「なにが？」
やっぱり、本当にいじめられていたことに気が付いていないんだ。
「教科書、落書きされてグチャグチャになっちゃったね。授業でこの辺のページをやる時には、あたしの教科書貸してあげるから」
「ありがとう」
と、にっこり笑みを浮かべる奈々ではあるが、どうも事情をよく分かっていない様子だ。
「なにが貸してあげるだって？」
背後から、山田秀美の声。
いつの間にか、後ろのドアから戻って来ていたのだ。
直子は落雷に打たれたかのように背をぴーんと真っ直ぐ伸ばした。ぐるん、と踵を軸に百八十度回転し、振り返った。
「あ、え、えっと、違う、というか、あの、財布ないならお金貸すよー、みたいなあ」
しどろもどろ。
「ふーん。ま、調子に乗ってなきゃいいよ」
「は、はい、乗ってません断じて乗ってません！」
直子はほとんどへっぴり腰といった前傾姿勢で、ぺこぺこ頭を下げながら、自分の席へと戻った。
腰を降ろした。
周囲に聞こえないよう、小さくため息をついた。
お姉ちゃんみたいに、強くなりたい。
常々思っていることを、改めて、胸の奥で呟いた。
直子は、机に突っ伏し、両腕で頭を抱えた。

嫌われたくないから、いつも明るくふるまって、嫌われたくないから、自分もいじめられたくないから、いじめを見て見ぬふりして、自分の心が傷つかない仮面をいつもかぶっていて、人に本音をぶつける勇気もない……

高校に入ることをきっかけに、そんな上っ面だけの自分から変わろうと思っていたのに、結局、全然変われていない。

わたし、ダメだ。

第二章　ヤニクサイ

1

結果としては、庇った挙げ句に自分もいじめを受けるのと、なんら変わらないものとなった。

ただし、その過程が全く違う。

同じ辛い目に合うにしても、それが自らの意思で飛び込んだ結果であったならば、どんなによかっただろう。

武田直子は、走っている。

放課後の、校舎の廊下。西村奈々の手を引いて、二人、走っている。

なんで、こんな時に限って、先生と全然遭遇しない？

しかも走っている方向、職員室からどんどん遠ざかっているじゃないか。

「待てっつってんだろ！」

小出恵子の怒鳴り声が響く。

心底怒っているというより、おかしみをこらえているような、そんな怒鳴り声。

それはそうだ。彼女らにとって、これは狩りという遊びなのだから。

「待てよ！」

無理。待たなかったらもしかして逃げ切れるかも知れない。逃げ切れたら、明日にはほとぼりも冷めて、ひょっとして殺されないかも知れない。しかし、待ったらいま確実に殺される。仮に殺されないとしても、痛いの嫌だ。

直子と奈々は、山田秀美たち三人に、追いかけられている。

理由は、直子からすると不可解かつ理不尽極まりないのだが、山田秀美らからすると至極単純な理論で、直子たちは彼女らの判断基準からすると「調子に乗って」しまったのだ。

それが、勇気を振り絞った言動からならば、まだよかったのに。少なくとも、自分が自分を責め、傷つけることはなかっただろうからだ。

事は、単なる偶然、というより相手の一方的な思い込みから、起こった。

放課後、武田直子は部活に行く前に、と教室近くのトイレに寄った。

なんだか、タバコの臭いがする。

臭いどころじゃない。個室の一つから、狼煙のように小さな白い筋が上っている。

それどころか、メンソール美味くないだの、値上げがどうとか、完全に喫煙に関する会話が聞こえて来ている。

山田秀美らの声だ。

中で何をしているのか、これ以上会話を聞くまでもない。

一室空いてはいるけれど、こんな状況で用を足せるものではない。

こっそりと出ようとしたところ、いきなり個室の扉が開いた。

一人用に設計された狭い空間だが、そこから山田秀美と安東正江の二人が出て来た。

「なに見てんの？」

安東正江が尋ねる。

「あ、べ、別に、なにも」

直子は、つっかえつっかえで、声を絞り出した。

「ちくんなよ」

山田秀美は唇を釣り上げて、いやらしい笑みを浮かべた。

「はい、ちくりません！　絶対ちくりません！　なにがあろうとも決して絶対！」

直子は、こわばった笑みを浮かべ、ぺこぺこ頭を下げながらトイ

レを出た。
がくりと肩を落とした。
長い、ため息をついた。
安堵のため息のつもりであったが、いつの間にか、自己嫌悪のものに変わっていた。
ああもう！　だいたいなんで、あんな不良がこの学校にいんの？
しかも、二人は中学の時の友達らしいし、クラス編成した人もうちょっと考えてよ。小出さんだって、中学は違うらしいけど、あっという間に仲間になっちゃうしさ。分散させろ。というか、あんなの入学させんな！
バッグを取りに教室に戻る途中、前を歩いていた男子二人が、
「いまさあ、そこ、ヤニ臭くなかった？」
「気のせいだろ。入学早々、こんなみんながいるとこで吸う奴がいるかよ」
などと話している。
いるんだよ、それがさ。
「ね、ヤニクサイって何？　お野菜？　ね、何？」
教室のドアから半身を出した西村奈々が、楽し気な顔を、よりほころばせている。ヤニクサイがなんなのか、頭の中で色々と考えているのだろう。
でも、考えても考えても全然イメージが湧かない。
ちょっと、むず痒い表情になる。
病院の先生が、チューショー的な事を処理する能力は低いっていってた。たぶん、そのせいだ。でも、興味はあるんだ、色々なこと、知りたい。
「ヤニクサイってなんだよおおお」
開いたドアの戸当たりパッキンに頬を当たまま、ずりずりと下がっていく。
「ヤニ臭いってんだから、ヤニが臭いってこと以外ねえべ」
男子の一人が、わずらわしそうな顔で答えた。

「ということは食べ物ではない？」
「バーカ」
「ヤニってなんなの」
西村奈々は、完全に寝転がった姿勢で尋ねた。スカートがまくれてパンツが完全に見えてしまっている。
「おい、こいつあれだよ」
「ああ。そうか」
二人は気味悪そうな表情を奈々へと向け、足早に去って行った。
と、前のドアでそんなやりとりをしていたため、後ろのドアから教室に入って来た直子。教室の一番後ろにあるロッカーから、自分のバッグを取り出そうとする。これから部活に行くのだ。
放課後の教室には、まだ半数近くの生徒が残っていて、雑談をしている。始まったばかりの高校生活、まだすべてが新鮮で、教室で呼吸をしていることそのものが楽しいのだろう。
「ねえ、タケダナオコ！」
西村奈々は、直子のところへ走り寄って来た。狭い教室、走っても歩いても時間は変わらないのに。
「呼び捨てはいいけど、フルネームは違和感あるなあ」
直子は苦笑した。
タケノコみたいで、フルネームは好きじゃないし。ちなみにそれは小学生の頃のあだ名。
「イワカンって？」
「変ってこと」
「変というのはバカってこと？」
「違う違う。そうじゃなくて……」
などと話していると、前のドアが開き、山田秀美らが入って来た。廊下で合流したのか、小出恵子も一緒。三人、フルセットだ。
さっきの彼女らのいやらしい笑みを思い出し、直子はぞっとした。
そして、さらに直子をぞっとさせる出来事が発生した。
西村奈々は、楽しそうな顔を直子に近付けて、大きな声でこう叫

んだのだ。
「ねえ、ヤニクサイってなんなの？」
その瞬間、直子は、ぎゃーーーーと凄まじい絶叫を発していた。
教室にいる全員が、直子へと視線を向けている。
肩を叩かれた。
振り向くと、山田秀美がにっと薄い笑みを浮かべている。
「ちくんな、っていったよね」
安東正江は、直子の眼前に自分の顔を近づけた。ほとんど密着しそうなくらいに。
「あ、あたし、誰にも、話してなんかない」
自慢出来ることではないけど。
安東正江は西村奈々を指差して、
「じゃ、なんでこいつが知ってんだよ。こいつ、空気の読めないバカだから、いいふらしまくったらどうすんだよ」
自業自得だよ、そんなの。
そう思ったが、もちろん口には出さなかった。まだ高校生になったばかり、花の十五歳、命は惜しい。
「ね、さっきからなんの話？　それよりあたしはヤニを見たいのだ！」
「うるせえバカ！　でっけえ声出しやがって。非常識なことしてんじゃねえよ」
トイレでタバコ吸うのと、それを大きな声で喋ることと、どっちが非常識だよ。直子はそう強く思うものの、もちろん思うだけで伝わるわけもなく、しかし口に出そうものなら間違いなく半殺しなわけで。だけどもう、口に出さずとも、半殺しにされそうな気配が濃厚なわけで……
怒鳴られた当の本人は、安東正江のいう通り微塵も空気を読めておらず、にこにこと、そわそわとしているだけだ。
「ああ、そういうわけか。ちくられたんだ」
当時、現場にいなかった小出恵子だが、会話から状況を理解した

ようだ。そして、その彼女のとった行動は、胸ポケットからカッターナイフを取り出すことだった。
奈々の顔にカッターを突き付け、カチカチカチと伸ばしたり縮めたりしている。
「さっきの話、お前、なんで知ってんの？　やっぱり聞いたんだろ、こいつに」
小出恵子は、もう片方の手で直子の髪の毛を掴んだ。
「さっきって？　なんの話？」
奈々はひときわ大きな声を出した。
「ね、なんのこと？」
にこにこ笑っている。
直子の顔は青ざめた。普通に考えて、奈々の言動は彼女らへの挑発でしかない。相手が知的障害者だからって、こういう連中は簡単な常識を働かせたり、理性で自分を抑制なんか出来ない。
案の定、山田秀美の唇がひきつっている。
小出恵子が、カチカチカチカチ、とカッターナイフを伸ばしていく。
カチ。
伸びきった。
数秒の沈黙。
山田秀美が顔を上げた。
「てめえさあ、調子に乗ってんじゃねえぞ！」
奈々を睨みつけ、怒鳴った。
小出恵子が、直子から手を離すと、カッターナイフを振り上げ、もう片方の手で奈々に掴みかかろうとする。
直子は、咄嗟に西村奈々の手を引っ張り、走り出していた。
逃げたらどうなるか怖いけど、逃げなかったら、いま確実にここで殺される。絶対殺される。いや絶対かは分からないけど八割方間違いない。散々火のついたタバコやライターを背中に押し当てられて、カッターで切り刻まれて、最後にドラム缶にコンクリート詰め

されて海に沈められるんだ。
逃げ切れさえすれば、他校の番長と喧嘩でもして明日にはすっかり忘れているかも知れないし、または夜の街で補導されて明日学校に来ないかも知れないし、とにかく今は、この場を逃れる事だ。
しかし……

追い詰められた。
南校舎四階の端にある理科実習室に逃げ込もうとしたのだが、二つあるどちらのドアも鍵がかけられており、開かなかったのだ。
完全な、袋小路だ。
「手間をかけさせやがって」
「でけえ声で、タバコのこと喋りやがって」
山田秀美たち三人は、口々に文句をいいながらも、その口元には笑みを浮かべている。
「だから、それは違うんだってば」
直子は、ちょっとだけ声を荒らげた。
どうしてこんな下らないことで、こんな目にあわなければならないんだ。だいたいどちらにしたって悪いのはそっちだろう。
「違くねえだろうが。わけの分かんないこといってんじゃねえ！」
安東正江が叫ぶ。
西村奈々は、まったく状況を飲み込めておらず、ただ、これは客観的に楽しいことなのかそうでないことなのかを決めかね、きょとんとしている。
山田秀美が、すっと一歩前に出た。
「お前たちさ、調子に乗っちゃったね」
山田秀美は、直子の胸倉を掴んで引き寄せた。
「乗ってない乗ってない乗ってない！」
直子は涙目で、素早く横に何度も首を振った。

カチカチ、カチ、
小出恵子が、手にしたカッターナイフの刃を押し出していく。
「ナオ！」
第三者の声に、山田秀美はゆっくりと振り返った。

2

「お姉ちゃん！」
直子の張り詰めていた表情が、少し和らいだ。
姉の武田晶と、その友人だかよく分からないがとにかく同じ部活の山野裕子の姿がそこにあった。
「部活、行こうよ。迎えに行ったら、バッグあるのにいないんだもん。クラスの子に聞いたら、なんだか追われて逃げてったなんて聞いて、探しちゃったよ。……あのさあ、事情はよく知らないんだけど、ナオは、妹は、他人を悪くいうことは絶対にない。なんか、怒らせたんなら、勘違いだよ」
晶は普段通り落ち着いた様子で、淡々とそういった。
「へえ」
晶の言葉に、山田秀美はまったく動じることはなく、むしろ釣り上げる唇の両端が完全に上を向いて、笑みの不敵さ、不気味さが余計に強まっている。
「先輩たちも、調子に乗っちゃってるみたいですね。……三年生に、山田則夫ってのがいるの知ってます？　バカだから、暴力団に知り合いがいるなんてでかい声で喋っちゃってません？　あたしの、兄なんですけどね」
さ、なにかいってみなよ。山田秀美の顔には、明らかにそんな表情が浮かんでいた。
晶の後ろに立っている山野裕子は、少しだけ顔に疑問符を浮かべると、はっとしたように口を開いた。
「ああ、もしかして、おしっこ漏らしの山田則夫のこと？」
山野裕子の言葉に、山田秀美は微かな困惑の表情を浮かべた。

「そういや、いつもクラス違ってたから、すっかり存在自体を忘れてたけど、あいつこの高校なんだよな。今度挨拶しとこ。とりあえずさ、『兄貴』がよろしくいってたって伝えといてよ。それと、謝っといて。オムツマンなんて名前広めちゃってさ。どんより落ち込んでたから、ほんと悪いことしたなーって、死ぬほど反省したんだよね、あたし。一週間しないうちさっぱり忘れちゃったけど。三年前のことだから時効だろうけど、一応、謝ってたっていっといてよ。あ、それともいまから一緒に行く？」

裕子は、にこりと笑みを浮かべた。

「なんだよ『兄貴』って」

晶が尋ねた。裕子の過去にそれほど興味はないけれど、そこだけちょっと気になったので。

「あたしの中学の時のあだ名。失礼しちゃうよねー」

「ぴったりだよ」

「お前の中学の頃のダンゴムシよりはぴったりじゃないよ」

「あたしのあだ名のことなんか、いまどうでもいいだろ！」

などと、二人が場違いなやり取りを、まったくもって平然とした顔で行っていると、

「わけ分かんない！」

山田秀美は、荒っぽく吐き捨てると、直子の胸倉を掴んでいた手を離し、西村奈々を突き飛ばし、裕子と晶の間に強引に身体を入れて掻き分けて、階段を下りて行った。

安東正江たちは、慌てて後を追いかけた。

「おしっこ漏らしだの兄貴だの暴力団だのって、どんな中学だよ。……ナオ、大丈夫だった？」

晶は、直子の両肩に手を置いた。直子の、顔を見つめた。

直子は、喜怒哀楽その他もろもろ入り混じった恐ろしく複雑な表情で、おずおずと晶を上目遣いで見ると、ひきつったように歪んだ唇を、震わせながら開いた。

「お姉ちゃあん。……あたしが、おしっこ漏らしちゃったよおお」

本人の口から聞くまでもなく、直子の足元には、海が広がっていた。
当然、晶の足元にもだ。
「ナオ……」
晶は全く動ずることなく、ただ、直子の顔を見つめていた。
「だってだって！　怖かったんだもん！」
直子は激しく泣き出した。
晶は、直子の背中に手を回し、そっと抱きしめた。
「だってもなにも、誰も責めてないだろ。トイレでジャージに着替えよ。着替え、教室？　王子、悪いけど取って来てくれない？　歩けないからさ。あと、雑巾何枚かよろしく」
「任せとけ」
裕子は駆け出した。

3

「ご迷惑、かけました」
トイレでスカートや下着を脱ぎ、ジャージへと着替えた直子は、出てくるとまず山野裕子に深く頭を下げた。
「お姉ちゃんも、ありがとうね」
「なんにもしてないよ」
晶は少し照れて、普段以上に愛嬌の無い表情をわざわざ作った。
「あたしがなんかいったから？　あたし、悪い？」
西村奈々が、ほとんどおでことおでこがくっつきそうなくらい、直子へと顔を近付けてきた。
「全然。西村さんは、悪くないよ」
悪いのは、勇気のない、わたしなんだ。
直子は、おでこをこつんと軽くぶつけると、笑みを浮かべた。
西村奈々も、歯茎剥き出しでにっと笑った。
「あのさあ、あいつらとなにがあったの？」
裕子の質問に、直子は順を追って話していく。

なんでそんなことで追いかけ回されないとならないのか。それはもう、呆れるしかないという内容だった。
その話に続けて、直子は、今まで誰にも話したことのない悩みを打ち明けていた。
どうしていま、裕子にこんな話をしてしまっているのかは分からない。何故だか勝手に口が動いてしまったのだ。
その悩みというのは、前述した通り、自分に勇気がないということだ。
「なくはないでしょ」
裕子は、あっけらかんとした顔で答えた。
「奈々ちゃんを連れて逃げて、って、これも凄い勇気だよ。……それに、勇気なんて誰もがそんなにたくさんあるわけじゃない」
「でも、お姉ちゃんなんか、どんな時でも物怖じしなくて……あたしも、高校に入ったらそうなろうと思ってたのに」
「晶はちょっと変わり者だからなあ。でもまあ、あたしも結構物怖じせずにずけずけいうほうなんだけど、それって慣れているから平気なだけで、勇気があるからってわけじゃない。ケツ見られるのが好きな奴がケツ見せたって勇気じゃないっつうか。ちょっとたとえ悪いか。とにかく、嫌で逃げ出したくて胸が苦しくなってくるようなことに対して、我慢して、実際の行動を起こせることが勇気だよ。それだったら、さっき、そういう勇気を見せたんじゃんか。普段はさあ、別に辛いことから逃げててもいいんじゃない？　絶対に譲ってはいけない時、絶対に退いてはいけない時、そういう時だけ、ほんのちょっとの勇気を出せばいいんだ。……考え方の問題でさ、あれも出来ないこれも出来ないじゃなくて、ならばなにが出来るかなんだ。自分にやれることを探していけばいいんだよ」
いい終わると、裕子は直子の肩を叩いた。
直子は、晶の方を見ると、
「ねえ、お姉ちゃん……王子先輩って、本当に成績悪いの？」
あまりに裕子が、しっかりとした持論を述べるから、本当に、あ

の、家で姉から聞かされている王子先輩なのかと思ったのだ。
「うん。三年生になれたのが奇跡」
晶はきっぱりといい切った。
「たまに真面目な話してやりゃなんだよ！　このジャガイモ顔姉妹が！　煮っ転がすぞ！」
裕子は怒鳴った。
直子は声をあげて笑った。
今度は屈託のない、明るい笑顔で。

4

現体制になってからというもの、部活練習中に部長も副部長も共に不在であったことは、かつて一度もなかった。要は、晶が一人、遅刻も病欠もせずに真面目ということなのだが、しかし今日、その記録も途絶えた。山野裕子と武田晶の両名が揃って、一時間ほどの遅刻をしたのだ。
「練習、どうなってんかな。ま、想像つくけど」
と裕子が不安の微塵も感じられない態度で体育館に入ってみれば、案の定、里子が練習を仕切っていた。
生山里子、非常に負けん気の強い二年生である。以前は個人技を磨くことばかりで、周囲がどうなろうと無関心なところがあったが、最近、自分勝手な性格は多分にありつつも他人の事も考えられるようになってきた。
部長不在という緊急の事態を下級生に仕切られて、三年生はなにをしているんだとも思わなくもないが、あのメンバーでは性格的にしかたないのか。おっとりタイプばかりだからな。裕子は諦めた。
里子は「どうせなら今日はこのまま任せてくれてもいいのに」とちょっと不満そうだったが、諦めて指揮権を裕子に戻し、他の部員たちの中へ戻った。
いままで里子部長代行の下で行っていたのは合同の練習メニューで、入りたての一年生から三年生まで、ＦＰもゴレイロも問わず同

じものだ。いわゆる基本トレーニングだ。
入部したばかりの一年生であるが、経験者が多いため、上級生と比べてさほど遜色なく見える。
本年度が始まってまだ一週間。当分の間は体験入部期間が続くので、誰が突然いなくなってもおかしくはない。
反対にいうと、誰が今日いきなりフットサル部の練習に参加したとしてもおかしくはない。
だから、西村奈々がここでボールを蹴っていること自体、なんら不自然なことではないのだ。
「いやいや、やっぱり不自然でしょ」
事情説明を簡単に受け、奈々の相手を任された生山里子。不満とまではいかないが、ちょっと納得のいかない気持ちを、小声で呟いていた。
だって、この子……
ペアを組んでの、パス練習をしている。
里子は、西村奈々へとパスを出した。
今度こそ、きちんと蹴り返してくれ。少しくらい精度悪くてもいいから。そう願いながら。
奈々は、金切り声のような奇声をあげながら、全く違う方向に、しかも小さく助走して全力で蹴った。精度云々どころか蹴り返す気が毛頭ないようだ。
ボールはぐんと伸び、遥か向こうに立っている山野裕子の顔面を直撃した。
「てめえ、里子！」
向こうで、裕子が鼻を押さえながら怒声をあげている。
「あたしじゃない！」
普段が普段だから、そう疑われてもしょうがないけどね。と心の中で苦笑しつつ、真顔で奈々へと向き直る。
「あのさあ、この距離でのパスなんだから、そんな思い切り蹴ったら受けられるわけないでしょ」

里子は、奈々にそう指摘するが、いわれた本人は全然分かっていない様子だ。
「誰が？」
奈々は尋ねた。
「あたしが！　だって、あたしとパス練習してんでしょうよ」
「パスってこうでしょ」
奈々、両手でボールを投げる仕草。
「バスケでしょそれは。フットサルは、足でやんだよ」
「そか、ブトサルは足でやるんだ。でもそれだと、ドリウルが大変そだなあ」
なんだよドリウルって。
「だからさ、バスケと勘違いしてない？　たぶん、いま想像してる通りのドリブルしようってんなら、絶対無理だと思う。そもそもフットサルってボール弾まないし。……って、喋ってないで練習。行くよ」
どこへ？　などと聞かれるかも、と言葉選びを後悔したが、運良くなにもいわれなかった。
里子のちょんと蹴るパスに、また奈々は勢いよくキック。虹を描き、端でゴレイロの練習をしている梨本咲の後頭部にぶち当たった。
咲の身体は地に沈んだ。
「だから！　あたしにパスを出せ！　この距離で助走すんな！　強く蹴るな！　小さく蹴れ！　考えろ！　まったくもう」
里子はため息をついた。
あんな遠くに蹴ってどうすんだ。わざと当てているのなら、たいしたもんだけど。でもまあどっちにしても、咲ザマミロ。
しかし、どうしたんだろうな、王子先輩。
里子は、改めて疑問を心の中で呟いた。
西村奈々をここに連れて来たことについてだ。
簡単に話は聞いた。なんでも、他の部での練習を見てて興味を持って、うちで育ててみたいと思っていて、そしたらさっきたまたま

偶然出会ったことから誘ったのだそうな。
興味を持ってもなにも、素人でも知ってるような最低のルールも知らないじゃないか。育ててみたいって、育つのか。絶対に無理だね。まあ別にいいけど、でも……短気のわたしなんかとペア組ませるなよな。
「ああ、また変な方向に蹴る！　ここ！　ここに！　あたしの足に！　軽めに、パス！　少なくとも助走やめろ！　分かった？」
「分からん」
里子は言葉にならない呻き声をあげた。
しかし本当に、下手というよりも、ルール知らないというよりも……
でも、仕方ないのか。
受け入れ制度だかなんだか、発達障害だって話だし。
でも、健常者に混じって、出来るのか？　フットサル。
差別は勿論よくないけど、それとこれとは話が違うよ。障害があることは事実なわけだし、こういう中でやることこそ、そもそも平等じゃない。でもわざわざ受け入れて、普通の子に混じって授業受けてんだから、部活にしてもこういう中でやらせないと意味がないのだろうか。
まあ、わたしがあれこれ考えても仕方ないけどね。
それにしても……
楽しそうな顔でボール蹴るなあ、この子。

午後六時。部活練習終了時間だ。
下級生が用具の後片付けをしている中、山野裕子は、生山里子と西村奈々を呼んだ。
「どうだった？」
裕子は漠然としたいい方で、里子に尋ねる。
「へったくそでした」
本人が隣にいるというのに、里子の言葉は容赦ない。少し里子を

知る者ならば、単に事実を事実として語っているだけと分かるだろうが。
「まあそりゃあ、初めてだからな。そんだけ？」
里子はちょっと考えて、
「楽しそうにボール蹴ってるのが印象的でした」
「そうそう、そうでしょ！　羨ましいくらいに楽しそうだよねえ」
裕子は、奈々に視線を向けると、
「ねえ、面白かった？」
「うん。中学ではいつも手でやるバスケやってたけど、足でやるのも面白いね」
奈々はたどたどしい口調でそういうと、にっと笑った。
「うわ、すっごい発想だな。足でやるバスケか」
裕子はその表現に、単純に感動していた。
「そうなんですよね、この子、バスケ歴は長いみたいで、なんでもかんでもそれが基準になっちゃってるみたい」
里子は、バスケット目掛けて片手でボールを投げる仕草をした。
「ね、ハッソーってなに？」
「考えってこと。さっきまでやってたのは、バスケじゃなくてフットサルっていうんだよ」
裕子は答えた。
「ブトサル。さっきサトコから教わった」
もう知ってるよ、とばかりに笑みを浮かべる。
「フットサル」
裕子は訂正した。
「ブトサル？」
再び尋ねる奈々。
「フットサル」
再び訂正する裕子。
「ブットサル？」
「……それでいいや、ブットサルで、もう。それよりさ、面白かっ

たんなら、入部、してみない？」
「難しいことといわれても分からん」
これって、ブトサルが難しいの？　ニュウブが難しいの？　悩む裕子。まあ、どうでもいいか。
「明日も、そのまた明日も、ずっと、ボール蹴らない？」
裕子は、いい直した。
「明日も、そのまた明日も？」
「そう」
「そのまた明日は？」
「そのまた明日も」
「楽しそうだけど、でも、あたしショウガイ者だよ」
奈々が、言葉の意味を理解してそう喋っているのかは分からない。おそらくこれまでの人生で、親や施設、先生などに、知恵をつけられ、なにかにつけて「障害者だけどいいの？」と尋ねる癖が、染み付いてしまっているのだろう。ここは日本、謙虚にしておけば、よけいな恨みを買うことなく、人に親切にして貰えるだろう、という。
「だからなに？」
そう思えばこそ、裕子はあえてそう答えた。「障害者だけど」という言葉を突っぱねたかった。
「ブットサルは楽しんだもん勝ちなの。障害も何もない。一番楽しんだ者が勝者なの。だから、いっつもつまらなさそうな顔してるこいつは負け組決定」
と、里子の首を抱えて引き寄せると、ほっぺを拳でぐりぐり。
「それそっちの勝手な価値観でしょ！」
里子は「負け」という言葉に過剰に反応する。
「おばちゃん怒るとコジワが増えるよ」
横で、奈々が棒読み調にいったのを、里子は聞き逃さなかった。
「なんだこいつ。もう一回いってみろ！」
里子は、裕子に取り押さえられたまま、奈々を睨み付けた。
「おばちゃん怒るとコジワが増えるよ。もう一回いった。で、コジ

ワってなんだ？」
奈々は、いわれた通りもう一度繰り返すと、小首を傾げた。
「ひょっとして、誰かにいえっていわれなかった？」
「うん」向こうでゴレイロ練習している咲をさして、「あの姉ちゃんが、サトコ怒ったらそういえば怒るのやめるからって」
「梨本咲、今日こそ殺す」
里子は、裕子の手を振り解くと、足を激しく踏み鳴らしながら、咲へ向かって一直線。
それを見て、裕子は笑っている。
「いまのが、うちで一番怖いおばちゃん。仲良く出来そうかな？」
「ダイジョウブ、うちのお母さん怒るともっと怖い」
「じゃ、明日から、毎日ボール蹴ろう。あとで改めてみんなに挨拶してね」
裕子は手を差し出した。
「握手だ～」
奈々は、小さく柔らかな二つの手で、裕子の手をしっかりと握り、上下に振った。
うちの部員に限っては大丈夫だと思うけど、さっきのオムツマンの妹みたいなのが世の中うようよいるのかも知れないし。こうして知り合ったのも縁だし。出来る限り守ってあげないとな。そう、裕子は心に誓った。
ともかく、こうしてまた一人、フットサル部の新入部員が決まった。

午後六時半。西の空は、隠れたばかりの夕日が雲に反射して、まだまだ明るいが、東の空はすっかり群青色になって、一つ二つ、星が瞬いている。
佐原南高校の通学路である県道、その歩道を、裕子たちは歩いている。
山野裕子、武田晶、その後ろに武田直子、西村奈々。

裕子と晶は、改めて、直子から先程の件の詳細を聞いた。山田秀美たちに追い掛けられることになった経緯をだ。
「聞けば聞くほど、ほんっとくだらないなあ、あいつら。それにひきかえ、直子ちゃん、やっさしいなあ。ねえ晶ぁ、そう思わない？　えらいねえ、妹。聞いてる？　晶ぁ、直子ちゃん、優しいよねえ。えらいよねえ」
裕子は、直子への褒め言葉を並び立て、しきりに感心している。
晶は、ふんと鼻を微かに鳴らした。
王子が手放しで人を誉めるなんて珍しいけど、十中八九、いや十中十、わたしへの当て付けだ。どうせ、わたしは優しくないよ。
でもまあ、自分の妹が誉められて、悪い気は、しないかな。
「分かってる。だから、どんなに憎まれ口を叩かれようと、内緒だっていってることぺらぺらと暴露されようと……ナオは、とても純粋で優しいことを知っているから……だから、憎めないんだ」
晶は、表情こそこれっぽっちも変えていないが、しかし、いつもよりちょっとだけ幸せそうな、柔らかな口調で、そう呟いた。
ぐい、と晶と裕子の間に、直子が割って入って来た。
「え、なに？　暴露しても怒らないんだ。じゃ、お姉ちゃんのテレビ占いシリーズその二！　ラッキーアイテムの化粧品や小道具、あたしの勝手に使ってんですよね～。そのくせ、慣れない格好で恥ずかしくて外に出られないからって、家の中でずーっと姿見を見てんの。あたしのよそ行きのスカートまで勝手にはいちゃうんですよぉ。ふりっふりのとか、ミニとかあ」
裕子は、ぶーっと吹き出した。
「似合わねーー。恥ずかしい。最低人間だ！　外出なくて正解。出たら絶対に逮捕される。いやあ、晶は実に冷静な判断力を持ってる。って、持ってたらそんな格好しないか」
しかし笑える。苦しい。肺の空気、全部出ちゃいそう。窒息する。
「見たことないくせに！　最低人間はいい過ぎだろ。ナオ、余計なことというなよ！」

「ナオちゃん、余計じゃない、全然。それすっごい貴重な情報だよ。残りの高校生活を楽しく過ごすための」
裕子はそういうと、晶の顔を見た。また、ぶっと吹き出した。想像したのだろう。
「おっかしい。この話、咲に売ろうっと」
晶は、笑い転げる裕子のお尻を引っぱたいた。まったく効果はないようで、裕子はいつまでも笑い続けていた。

5

足元でトラップしつつ、身体を反転させて、ヒールで後ろへ蹴る、と同時に再び反転、俊敏なステップで一瞬にして自分の蹴ったボールに追いつくと、無駄のない綺麗な流れでドリブルに入った。
久慈要（くじかなめ）とマッチアップした佐藤千秋であるが、なにがなんだか分からないうちに、突破を許してしまっていた。
こうした、フェイントで相手を抜き去る技術の高さ、効率が見た目の美しさに直結する華麗なプレー、これが久慈要を久慈要たらしめる最大の特徴だ。
佐藤千秋は、もう素直に舌をまくしかない。同い年とはいえ、経験が違うし、素質だって人間平等ではないのだ。
ここは、トーワ成田フットサルクラブ。
ＩＮＦＩＶＥというアミューズメント関連を広く手掛けている会社が運営しているフットサル専用の施設で、屋内フットサルコートや、フットサルスクールがある。
彼女らは、スクールのトップチームの者たちである。
月謝は免除。スポーツクラブを代表して、関東リーグで戦っているのだ。
現在、試合形式での練習中である。
久慈要は、真横を並走する林英子（はやしえいこ）へとパスを出した。
普段の練習ですっかり染み付いた、素早いリターンで、ボールは再び久慈要に戻った。だがその瞬間、横から激しい体当たりを受け、

百五十センチしかない久慈要の小柄な身体は吹き飛ばされて、床に転がっていた。
椋島佳美（むくしまよしみ）は、持ち主の不在になったボールを悠々と奪い、ドリブルを開始した。
笛の音。審判役の安食詩織里（あじきしおり）が、椋島佳美のファールを取ったのだ。
椋島佳美は、自分が転ばせた相手である久慈要へと近寄ると、すっと手を伸ばした。
久慈要も、ゆっくりと手を伸した。
しかし、椋島佳美は、手の甲で久慈要の手を叩いて払いのけた。
「こんな程度で転ばないでくれるかな。弱いなあ、相変わらず」
椋島佳美は、唇の両端を釣り上げた。笑みを浮かべたつもりなのかも知れないが、目付きはまるで怒っているようで、だから微塵も笑っているようには見えなかった。
久慈要は、自力で立ち上がった。
林英子は、久慈要の横に立ち、耳打ちするように囁いた。
「大丈夫だった？　痛くない？　コーチたちがいないと、すぐ本気で身体を当ててくるんだからね。倒されたって倒されなくたってファールだよ、どっちにしろさ」
確かにそうかも知れないが、いまここでいっていても仕方ない。
久慈要は、林英子の肩を軽く叩いた。
「林！　こそこそなにいってるの！」
怒鳴りつけるような、椋島佳美の声が室内中に轟いた。
「なにも、なにもいってないよ」
林英子は、両手を細かく振りながら、ごまかし笑いを浮かべた。
練習再開だ。
しかし、ほどなくしてまた椋島佳美によって中断されることになった。彼女が、守備の連係面のことでフィクソの友田亜美（ともだあみ）をねちねちと攻撃しているところ、久慈要が友田亜美を擁護したことで口論に発展したのだ。

「でも、亜美ちゃんは元々ピヴォなんだし、しかたないよ」
久慈要は、いまさっきいったばかりの台詞を、もう一度繰り返した。
「だからこそ、強くいう必要があるんでしょ。期待していればこそ」
どこが期待しているんだ。毎日罵倒ばかりしているくせに。やる気をなくさせることばかりいってるくせに。
「がみがみ怒ればいいってもんじゃない」
「へー。カナちゃん、そういう考えになったんだ。代表に選ばれなかったからって、ころころ考えを変えないでよね」
椋島佳美は、また笑みを浮かべた。
それは優越感に満ちた。
反対に、よりどんよりと暗い表情になったのが久慈要だ。表情だけではない。両手が、唇が、微かに震えている。
「佳美ちゃん、本気で、いってるのなら、それ、最低だよ」
久慈要はおもむろに口を開くと、消え入りそうな細い声で、そういった。
「いわれて嫌なら、辞めちゃえば？」
椋島佳美は間髪入れずに言葉を返した。
「佳美ちゃん……」
久慈要は、悲しそうな表情でゆっくりと椋島佳美に近寄り、その手を取ろうとする。
しかし、伸びてきたその手を、椋島佳美は、先程よりも激しい勢いで払いのけた。
二人は、しばらくの間、視線をぶつけ合った。椋島佳美は、真っ向から睨みつけるような視線で、久慈要はただ困惑といった顔で。
「おい、お前ら、なにやってんだ！　ちょっと目を離すとこれだ。……椋島、またお前か」
大野隆行（おおのたかゆき）コーチが、どたどたと走って来て、二人の間に割って入った。
「悪いのは、いつもあたしですか」

椋島佳美は、吐き捨てるようにいった。
「いや、だってお前、今日はなにが原因だか知らないけど、いつもの自分の言動を冷静に振り返ってみろよ」
椋島佳美は、ふんと鼻を鳴らした。久慈要の視線に気付いた彼女は、
「なあに、その目は？　いいたいことがあんなら、いいなよ」
きっと睨みつけた。
久慈要は、二呼吸ほど置くと、顔付きを厳しく変化させ、きっぱりいい切るようにいった。
「あたし、ここ辞める」
口調こそはおとなしいが、しかし、はっきりとした決意を感じさせる、そんな久慈要の表情であった。
その言葉に真っ先に反応したのは大野コーチだ。
「おい、久慈、本気じゃないよな、リーグ戦もいい調子だし、これから大会だってあるんだし、お前に抜けられちゃ困るんだよ。なにか胸にかかえてるんなら相談してく……」
「レギュラーになったら絶対に優勝するっていってたよね？　なれたのに、でも、逃げちゃうんだ」
椋島佳美は、それほど声を荒らげていたわけではない。しかし、その表情と、一言一言区切るようなはっきりした口調には、なんともいえない迫力があり、大野コーチの言葉を完全に多い隠してしまった。
「でも、もう辛くて、耐えられないよ」
こんな佳美ちゃんを、見ているのが。
「根性なし！」
やっぱり、伝わっていない。
実際、伝えられるわけがないのだ。バカにされた舐められた、と彼女が発狂してしまうのは確実だから。
椋島佳美の、久慈要を責めるその舌の回転は止まらない。
いつしか、意味をなさない単なる罵詈雑言へと変わっていた。

きりがない、とばかりに、久慈要は、
「お世話に、なりました！」
大きな声を出すと、深く頭を下げた。
頭を上げると、これまで一緒に技を磨き合ってきた仲間たちを、ちょっと寂しそうな目つきで見回した。
コート脇に置いてある自分のバッグを取り、出入口へと向かう。
ドアを開けた瞬間、すぐ横の壁に、ばん、と激しくボールが投げ付けられた。
誰が投げたかなど振り返って確認するまでもない。久慈要は、そのまま部屋を出た。
更衣室で着替えを済ませると、事務室へ退会の旨を伝えた。やはりそこでも止められたが、彼女の気持ちは変わらなかった。
建物の外へ出た。
目の前には、広大な田んぼが広がっている。
建物の敷地の前を、国道のバイパスが通っている。ダンプカーなど大型車が頻繁に行き来して、地面を振動させている。
「なら辞めちゃえば、なんて自分でいっていたくせになあ」
ぼそり、と独り言。
ちょっと鼻がむずむずし、ポケットティッシュで鼻をかんだ。
久慈要は花粉症。この季節には、いつも苦労する。
目に、涙がじわりと滲んだ。
これは鼻水出た時の涙だ。
自分にそういいきかせた。
でも……
未練、あるといえばあるかな。
やっぱり、このチームで、優勝したかったよ。
わたしと佳美ちゃんとで、ばんばん点を取って。
でも、このままここにわたしがいると、ますます佳美ちゃんがおかしくなっていくみたいで。
これで、以前の佳美ちゃんに戻ってくれるといいんだけどなあ。

自転車置場から、自分の自転車を引っ張り出し、チェーンのロックを外した。
黒のクロスバイク。どこへ行くにもそこそこ距離のある、辺鄙なところに住んでいる高校生としては、自転車は必需品だ。
でももう、ここに来ることはないのかな。
多分。
クロスバイクに跨がった。
購入時に一番小さなフレームを選んだのだが、それでも小柄な彼女の身体には随分と大きい。
ゆっくりと、ペダルを踏み込んだ。

6

佐原南高校前。
停留所に、バスが停車した。
アイドリングストップでじっと静かに停まっているバスの中から、ぞろぞろと、制服姿の男女が降りて来る。停留所の名前の通り、佐原南高等学校の生徒たちだ。
その人混みに埋もれるように、小柄な体格の女子生徒が降りて来た。制服を着ていなければ、可愛らしい小学生の男の子に間違えられても不思議はない。
久慈要である。
混雑からようやく開放されたことに、ほっとため息をついた。もう入学して何週間も経つというのに、一向に慣れない。
これでもこの市営バスは増便したという話だけど、それでも物凄く混んでるよなあ。だったら、増便前の混み具合というのは一体どんなだったんだろう。想像もつかない。
些細なことのような、毎日の通学なのだからそれなりに大事なような、そんなことを考えながら、両手に持っていたバッグを遠心力で大きく回して肩に担ぐと、校門に向かって歩き出した。
「カナちん！」

あれ、なんか聞き覚えのある声……
後ろを振り返ると、久慈要と同じく佐原南高校の制服を着ている女子生徒が、こっちへと走り寄って来る。
可愛らしい真ん丸の顔。初々しい真っ赤なほっぺた。
間違いない。
「ナオ！」
久慈要は、驚き、叫んだ。
真ん丸の顔の少女、武田直子は手にしていたバッグを投げ捨て、久慈要に抱き着いた。
「やっぱりカナちんだあ！　なんでここにいるの？　どうして佐原南の制服着てるの？　成北に行くっていってたくせに」
嬉しいような、不思議で解せないような、直子はそんな表情を浮かべている。
「どこでもいいから近場でって思ってたけど、やっぱり学力に合ったところがいいのかなと思って、ぎりぎりで変えたんだ」
「じゃあそういってよ、カナちん！　なんで黙ってんだよお。あたしは前々からここに決めてたんだから、教室に会いに来てくれればよかったのに。家に泊まり合うくらい仲良しだったのに冷たいなあ」
そういえば確かに、ナオも佐原南といっていたかも知れない。自分の志望校とは違うってことくらいで、校名まで覚えてなかった。
「ごめん、ナオ」
子供をあやすように、直子の頭に手を置いた。しかし、久慈要の方が数センチほど身長が低いので、なんだか小さな妹が姉をあやしているかのようだ。
「いいよ。まあ、こうして会えたんだし」
「それにしても、ナオは、相変わらずだなあ」
久慈要は、くすりと笑った。直子の底抜けの明るさと、愛嬌とに。
「相変わらずって、中学卒業したばかりなのに、まるで久々みたいに」
「あたしが忙しいからっていって、あまり会わなくなってたから、

実際久々じゃない？」
「そういやそうかな。それで、フットサルはどうなの？」
久慈要は中学生の頃、学校の部活と地元のフットサルクラブと、両方に所属していた。一つに絞りたいから高校生になったら地元のクラブだけにしようと思う、と直子に話したことがある。
「色々とあってね。フットサル、辞めようと思っているんだ。実際、もうクラブにも退会手続きしたし」
久慈要は、淡々と答えた。
「え、どうして？　もったいないよ。色々あろうとなかろうと、フットサル自体は続けなきゃ」
「なんだか、やる気がなくなっちゃって」
「いいの？　そんなことといって。あたしみたいに、カナちんより遥かに能力低いのに続けている子たちの怨みを買うことになるんだからね。あ、そうそう、そうだ、それじゃあさ、ここのフットサル部に入ればいいじゃん。あたしも入ってんだ」
「へえ、ここフットサル部なんてあるんだ。珍しいな」
「いくら学校の部活に入らないからって、そのくらいは知ってると思ってたよ。じゃあ、今日の放課後、部長のとこに行こ。どうせ帰宅部で、クラブ辞めたんなら家帰ったってやることもないんでしょ？」
「まあ、そうだけど。でも……」
「なんか予定あんの！」
「ありません」
「決定」
直子はにんまりと笑みを浮かべた。

「久しぶりだね」
武田晶はむすっとした表情でそういった。
分かっている。機嫌が悪いわけではなく、表情の変化が少ないだけだ。ナオのお姉ちゃん、相変わらずだな。まあ、わたしも似たよ

うなものだけど。
「はい。ほんとにお久しぶりです」
久慈要は小さく頭を下げた。
友達の姉ということで、久慈要は何度も晶と顔を合わせたことがある。一昨年だか、武田家に泊まらせて貰ったこともあるくらいだ。
ここは、女子フットサル部の部室。
横に長いプレハブ建築の中を、細かく区切った一室だ。昔は男子サッカー部の部室だったためかどうか、汗とカビの臭いが酷い。
現在この室内にいるのは、武田晶、武田直子、久慈要の三人だ。
「お姉ちゃん、王子先輩は？」
武田直子が尋ねた。
「さあ。なにやってんだか知らないけど」
ばん、と部室のドアが勢いよく開いた。
「ごめん、遅くなった。いやー、里子の奴がさあ」
山野裕子が、頭をがりがりとかきながら部室に入って来た。
「毎度毎度ことごとく時間に遅れてくるの、なんとかしろよ」
いつも不機嫌そうに見えるの晶の顔だが、慣れると、色々と感情が分かるようになってくる。例えば、頬杖をついて文句をいっている時は怒っているというより呆れている、等など。ちなみに、いま晶は頬杖をついている。
「お、その子が、ナオのお友達？」
裕子は、晶のいうこと全然聞いていない。仕草も目に入っていない。空気。
「はい。久慈要といいます」
久慈要は立ち上がると、軽く頭を下げた。
「はあ、男みたいな名前～」
会ったばかりで、いきなり失礼なことをいう裕子であるが、あまりにあっけらかんとしているため、むしろ清々しいくらいである。
「よくいわれますよ」そこまで直球ぶつけられたことはないけど「両親は、どちらが生まれてもこの名前で、って決めてたみたいです」

「そっか。えと、あたし山野裕子。ここの部長。よろしく」
裕子は無造作に机の上に乗っかると、あぐらをかいた。
久慈要は、何故フットサルクラブを辞めることになったのか、経緯を簡単に説明した。
仲の良かった子が、代表選出されてからというもの性格が変わってしまった。フットサルを楽しむ気持ちを忘れて、とげとげしいだけになってしまった。特に自分（久慈要）のことを異常なまでにライバル視しているようで、自分がいると彼女が余計におかしくなってしまう。自分が好きだった彼女に戻って欲しくて、自分が好きだったチームに戻って欲しくて、クラブを辞めた。
本当はもっと色々と抱えていることはあるのだが、そこまでは話さなかった。
「ふーん。でも自分辞めちゃったら、好きだったチームには戻らないじゃん」
久慈要もそこにいてこその、自分の好きだったチームだろ。と、山野裕子はそういっているのだ。
「そうですけど、どうしようもなかった。でも……元に戻って欲しいというのは単なるいいわけで、あたし、耐えられずに逃げ出したかっただけかも知れない」
「まあ、そんな雰囲気のところでいつまでも我慢してたって苦痛だろうしね。それにしても、代表だなんだってだけで、そんなギスギスとなって、歯車、狂っちゃうものなのかな？　フットサルなんて、楽しんだもん勝ちなのに」
その言葉に、久慈要は俯きがちだった顔を上げた。
「どうして、楽しんだ者の勝ちだといい切れます？」
「勝たなきゃ意味ないでしょ」「勝てば楽しいんだよ」「ただへらへら、楽しんでたってしょうがない」クラブの仲間にかける椋島佳美の痛烈な言葉の数々、久慈要の頭の中を回っていた。
「知らないよそんなこと。……まあ、とにかく、仕事じゃないんだから、面白いと思えなきゃ意味ないじゃん。どう説明すりゃいいん

だろ。とにかく、あたしはそう思うんだよ。面白いというのが、現在の感情として存在していたり、目指すゴールであったりして、それが励みになって、辛い練習も出来るんじゃないかな。競技で、達成感を味わいたいから、なんてよくいうけど、それも結局は楽しむためだろう。楽しい、気持ちいいというのがあるから、骨を折ってまで、筋をぶっちぎってまで、とことんやりたくなるんだよ」

そう飄々と語る裕子の態度は先ほどから全く変化はない。だが、彼女を見つめる久慈要の表情に、大きな変化が現れていた。

「そうなんです。……あたしも、面白くないと意味ないって思っていて、それを、どうしてもその子に伝えたかったんですけど、上手く言葉に出来なくて。なんかいまの、説明も出来ないのに自信を持ってきっぱりいい切っている姿を見て、いいなって思いました」

久慈要は、心の奥からじんわりとこみあげてくるものの心地よさに、柔らかな笑みを浮かべていた。

「バカだからな。本能で行動しているだけだから」

武田晶が水を差す。

「いえ、そんなことないです。というか、本能でいってるだけなら、なおさら凄いです。……山野先輩のいるフットサル部に、入部してみたくなりました」

「分かった。入部希望者がいるってことは顧問のゴリ、高村先生に伝えてあるから、明日までに届を書いてきてね」

裕子は机の上に座ったまま、足の裏をぱしぱしと打ち付け合っている。ふざけているのか自然体なのか、裕子と初対面の久慈要にはさっぱり分からない（果たして自然体だったわけだが）。

「はい。……でも、いつまでもは、いないかも知れません」

なんでわざわざこのようなことをいったのか、自身、分かっていなかった。

「そっか。うん、それでもいいよ。ナオから、凄い上手って聞いているから、惜しいといえば惜しいけど」

「そんなたいしたことありません。それじゃあ、明日から、よろし

くお願いします」
久慈要は、改めて裕子たちに頭を下げた。
こうしてさらに一人、佐原南高校女子フットサル部に、仲間が加わることになった。

第三章　いや、基本は不真面目なんですけど

1

「ルビふっとけ畜生！」

裕子は、本を放り投げた。背後、ベッドの上にどさりどさりと落ちた。

脳の障害について、知的障害者との付き合いかたについて、佐原駅北口の本屋でそのような書籍を二冊ばかり購入したはいいが、普通の人にも難しいような専門用語漢字にしかルビがふられておらず、当然ながら裕子においそれと読める代物ではなかった。

辞書を片手に何時間もかけて、なんとか十ページほども読み進めてきたが、ここで裕子の脳は疲労困憊にギブアップ。思わず放り投げてしまったというわけだ。

いまになって思えば、なんで自分に読めるかどうかを事前にしっかりチェックしなかったのかと思う。とりあえず買う前にぱらぱらとめくって確認はしたが、本屋で難しい本を手にすると自分が賢くなったような気がするの法則で、余裕で読めると思ってしまったのだ。少し難しい漢字があったって、辞書引けばいいだろう、と。少しどころではなかったのだが。

晶に読んでもらうかな。でもあいつもバカだからな。それに、あのふてぶてしい声にムカムカきて、聞くどころじゃないかも。

そうだ、葉月にお願いしてルビふっといて貰おう。

なんでもいいから難癖つけて、罰ゲームのコマネチ免除のかわりに、って。喜んでやるべ。

……葉月がかわいそうな気がしてきたな。ちょっとだけ。

「葉月ってば、すぐ涙目になるからな。だったら我慢してないで、嫌なら嫌って最初からはっきりいやいいんだ。はあ、仕方ない、もうちょっと自分で頑張ってみるか」

ぶつぶつといいながら、ベッドの上に落ちた本と辞書を拾……お

うとし、重なっていたちょっとエッチな雑誌を手に取り、広げた。
「……やっぱり初めてって、痛いのかなあ……って、バカかあたしは！　こっちはあと！　夜！　いまは真面目な本！」
改めて、今日買った書籍を拾うと、机に戻った。
裕子が――結局読めなかったにせよ――そのような本を買ったのは、もちろんフットサル部に入部した知的障害者、西村奈々との交流を考えてのものである。
難しい話や理屈は分からないが、とにかく裕子は、自分自身には知的障害者に対する偏見の気持ちはないと考えている。フットサル部内での奈々の扱い難さにしたって、上手な子もいれば下手な子もいる、と、その程度にしか思っていない。技術が秀逸だって、里子なんか他が最悪だったじゃないか。
しかし、奈々と付き合うみんなのことを見ているうちに、それではいけないのかも知れない、と考えるようになったのだ。
かも知れないではない。そうなのだ。「自分は知的障害者でも気にしないから」ではいけないのだ。気にして、改善をしていかなければならないのだ。
もし奈々になにかあったらどうする？　もし奈々のために、他の者がどうにかなってしまったらどうする？
山田秀美のヤニ事件、あのようなことが、フットサル部全体を巻き込んで起こらないとも限らない。
なにがよくて、なにが悪いのか、感覚的なものではなく、理屈で、言葉で、説明出来るようにならなければならない。
それと実際問題として自分たちや周囲の人間に、物理的具体的なこととして、なにが出来てなにが出来ないのか。それを探していかなければならない。それにはまず障害のことを知らなければならない。
そのために、なけなしのお小遣い全部使って、専門書を買ったのだから。
それなのに……

「なんで、あたしは、こんなに、バカ、なんだ！　ほんとに、この頭ん中に、脳みそ、入ってんのか！」
裕子は机に伏せて、自分の頭を両側からポカポカと何回も殴った。
音からして、とりあえず何らか詰まっているようではあるが。
気分転換にと、自室を出た。
居間で、兄の孝がソファに座ってテレビを見てくつろいでいる。
「なんの悩みもない大学生は気楽だよな。どうせ、彼女出来ねえなんて、そんなことくらいが悩みなんだろうな。一生出来ないと決まっているんだから悩むだけ無駄だってのに」
裕子は冷たい眼差しを孝に送った。
「人の顔見るなり、いきなりなんだよ！」
「兄貴にゃ、頭ん中に脳みそが入ってないかも知れない乙女の気持ちなんて分からんのじゃい」
「わけ分かんね」
「ふーんだ」
裕子は、何故か大股カニ歩きで横移動しながら冷蔵庫の方へと移動した。
冷蔵庫の扉に手をかけ、開け、手を突っ込み、顔まで突っ込み、探す。そして、叫んだ。
「極上たまごのふるふるプリンがない！」
「あ、おれ食っちゃった。お前のだったの？　なかなか美味いね、あれ」
裕子は身体をぴんと硬直させたまま、ぎゃあああと三回叫んだ。
「なんて恨めしいことをしでかしてくれた我が兄貴……もう買えないかも知れないのに。あたしまだ、食べたことないのに」
裕子は俯いたまま、孝を睨みつけた。以前のスポーツ刈りみたいな頭と違い、髪の毛伸びてきているので、そうして睨まれると目が隠れてちょっと怖い。
不気味な摺り足で、孝へと近付いて行く。
「気持ちの悪い歩き方して。そんな、悪いことしちゃった？　そう

だ、なんか悩んでんだろ。かわりにさ、相談に乗ってやっから」
「そんなの当たり前だよ。そのためにここに来たんだから」
裕子はソファに近づくと、孝のすぐ隣に腰を下ろした。
「あのさあ」
「密着してくんなよ」
「いいじゃん。それでね」
裕子は、語り始めた。
孝は、リモコンを手に取り、テレビのスイッチを切った。
裕子の考えている悩みの内容自体は、伝えるのに難しいものではない。
西村奈々という発達障害のある子を部に招き入れたはいいが、ふと、その重責に気付き、どうすればよいのか悩んでいる。ということだ。
「なんで考えなしに、そういうことするかなあ。個人で友達になるならまだしも、集団というのは色々だから好意的なのばかりじゃないぞ」
「だってえ、バスケのプレー見てて、ひょっとしてこの子凄いかもって思ったんだもの。……大活躍してくれなんていわないけど、とにかく部に馴染んで、楽しいと思って貰いたくて。そのためには、他の部員が奈々に馴染んで、一緒に練習して楽しいって思えなきゃならないわけで。それには、まずあたしが奈々を理解するとこから始めないと」
「はいはい。それじゃあ、裕子に聞くけど、そもそも、障害って、なんだろうな」
兄の問いに、裕子は十秒ほど考え込み、そして口を開いた。
「障害は、障害物っていうくらいだから、邪魔なもの、余計なもの」
「そうだな。通常ではない、行動を困難にさせる余計な重荷だから、障害なわけだ」
「そうだね」
「ということは、ここでいう障害というのは、ちょっと劣っている

ということ？　なら裕子は、勉強障害？」
裕子は、また十秒ほど難しい顔で考え込んでいたかと思うと、唐突に叫んだ。
「そう！　あたし、勉強障害だ！　障害者だ。重度の。それ、間違いない」
「真面目な回路のすっかりぶっ壊れた真面目障害、上品に出来ない上品障害。なんでも障害になっちゃう。で、裕子は幾つの障害を抱えてるんだろうか」
「なんかカチンとくるな。人のプリン食っといて畜生。どうせあたしはバカだし不真面目だし下品だよ。でもまあ、あたしは、それって個性だと思ってそんなに気にしてないけどね。……あ、そっか……全部が個性か。障害であっても」
偏見はない、という漠然とした思いのあるだけだった裕子だが、ようやくここで一つの具体的な言葉が生まれた。
「まあ、実際そう簡単なものじゃあないんだろうけど。一人で社会生活を送れるのかどうか、など色々とあるわけだから」
「そうだけど、でもそれは、ちょっと一人で生活障害だ。いい年齢してヒモになってる男だの、なんにも出来ない女だの、そんなの世の中にいくらでもいる。あたしもそうかも」
「裕子はそれどころじゃないよ。非野蛮障害。几帳面障害。約束守る障害。トイレ独占しない障害。いきなり叫ばない障害」
孝は指を折って数え始めた。
「絶対やりかえさないでくれるなら、兄貴のことぼこぼこに殴りたいんですけどお」
「どうだろう。かわいい妹を殴りたくはないけど、反射的に動いちゃうからなあ」
大学でボクシングをやっている兄貴である。
さて、この話し合いだが、結局、結論は出なかった。
出なかったけれど、でも、焦る必要はないのかなとも思った。
パスが出来るようになって、今日の奈々の顔、とても楽しそうだ

ったから。
とりあえず、それでいいのではないか。
もちろん、買った本での勉強は続けるつもりだけど。葉月にルビふってもらって。
それと、いずれ奈々が世話になっていた障害者施設にも行ってみたいな。
まあ、じっくりと、やっていこうか。

2

「すみません、遅れましたあ！」
体育館の中を、武田直子の抜けるような高い声が反響した。
「遅れっしたあああ！」
直子に手を引っ張られて入って来た西村奈々が、張り裂けんばかりの元気のよさで叫んだ。
「……遅れました。ナオ、これなんかの儀式？」
奈々に手を引っ張られている久慈要。幼児の電車ごっこみたいで、なんだか恥ずかしい。
「到着う」
フットサル部員のみんなのところへたどり着くと、奈々は小さくジャンプして着地。両手にそれぞれ二人の手を握りしめたまま、ぶんぶんと振り回す。
「カナちん、ありがとね、付き合ってくれて」
直子は、奈々に腕をぶるんぶるん振り回されたまま、久慈要へと視線をやった。
「いいよ、このくらい」
久慈要も同様に、激しくぶるんぶるんされている。
授業終了の十分後に北校舎裏出口に集合。のはずだったのだが、奈々が来ず。二人で探していたため、練習開始時間に遅れてしまったのだ。
結局奈々はどこにいたのかというと、校庭の花壇。間違って別の

出入り口に行ってしまっていたならまだしも、そもそもフットサルのことなどすっかり忘れ、花壇の脇にしゃがみ込んで、ずっと蟻の行列を眺めていたのだ。
「お疲れさん。じゃ、すぐ練習に入って。落ち着いたら、あたしが奈々を見るから、それまでよろしく」
裕子は、直子の肩を叩いた。
「分かりました。奈々、いこ」
「おほー」
喉の奥から呻いているような妙な声を出す奈々。
直子は奈々の手を引いて、みんなの中へ入って行こうとする。
「ナオさあ」
裕子に背後から声をかけられ、直子は振り向いた。
「なんか、嬉しそうだね」
直子は、二秒ほどきょとんとした表情を浮かべていたが、すぐその顔に、にんまりとした笑みが浮かんだ。
「そりゃあ。カナちん、ええと要（かなめ）、中学の時にずっと一緒にやっていた要と、また一緒になれたんですもん」
カナちん、この部にいつまでもいないかもなんていっていたけど、でも、この部活が面白ければ、いてくれるだろう。雰囲気が良ければ、クラブで味わったような嫌なことというのがなければ、きっといつまでもいてくれるだろう。直子は、そう思っていた。
みんながいま行なっているのは、三人一組でのパス練習。
遅れてきた直子たち三人も、みんなに加わって練習を開始した。
「いくよ！」
直子はインサイドで小さくボールを蹴った。
久慈要が受け、奈々へとパス。
奈々は思い切り蹴り上げ、ホームラン。
いや、どちらかといえばファールフライか。レフト梨本咲、予期せず飛んで来たボールに咄嗟に手が出たのはゴレイロとしてさすがであったが、受け損ね、頭部強打。首を思い切りやってしまったよ

うで、両手で頭を抱えてうずくまってしまった。武田晶に肩を叩かれ、慰められている。しばらくして、よろよろと立ち上がったと思うと、直子たちへと仁王立ち、
「ナオ！　ぼけっとしてんな！　しっかり見てろって王子先輩からいわれてんだろ！」
　そんなことといわれたって……
　普段からなんだか怖そうな咲先輩の顔だが、やばい、本当に怒ってるようだ。遠目からだが、少なくとも激怒していることは分かる。
　自己防衛反応か、直子は無意識に叫んでいた。
「お姉ちゃん、花柄の乙女な日記帳に丸文字でメルヘンな日記書いてたことある！　一週間で自分には無理だと諦めて捨ててたけど、あたしこっそり拾って持ってる！」
　それを聞いた咲は、指でＯＫサインを作った。沸点に達しかけていた温度が、一瞬にして常温に戻ってしまったようだ。「後で聞かせて」というと、永田三水らとゴレイロの練習に戻った。
「ういい、セェーフ」
　直子、胸をおさえて安堵の一声。
「セーフじゃない！　ナオ、なんで日記のこと知ってんだよ。だいたい、拾うなよ！　帰ったら捨てろ！　いや、燃やせ！　咲なんかに絶対に見せるなよな！」
　今度は晶が沸点に達してしまった。ボールとグローブを床に叩き付けたかと思うと、足を激しく踏み鳴らしながら直子の方へと一直線に近付いて来る。
「お姉ちゃあん、すぐ怒るう」
　泣きべそをかく直子。
「別に怒ったわけじゃ……ちょっと注意というか、咲なんかに見せないように念を押しただけだろ。怒らないから、帰ったら姉ちゃんに渡せよ、日記」
　晶は、釈然としない口調ではあるものの、それ以上直子にきつくいうことが出来ず、元の場所へと戻って行った。

さて、練習メニューは進み、続いては、ゴレイロも一緒になって全員でのパス練習だ。
これはちょっとしたゲーム形式で、みんなで大きな輪を作り、三人だけ輪の中に入る。その三人は鬼役で、輪の中を走り回ってパス交換を阻止するのだ。
パスはグラウンダーのみ。
鬼がボールカットに成功したら、その鬼とパスの出し手とが入れ替わる。
去年までは、新入生は入部後しばらくの間は体力作りの基礎トレーニングのみで、ボールを使ったプレーは一切禁止だった。触ることが許可されているのは、準備や後片付け、練習中のボール拾いといった雑用のみ。裕子の独断で、今年からそのルールは廃止した。前部長同様に、そのような無意味なしきたりに疑問を持っていたし、それに今年は、フットサル経験のある者がたくさん入って来たためだ。経験者ならば基礎的なスキル、スタミナや筋力も問題ないだろうし、むしろボールに触らないことで感覚の鈍ってしまうことのほうがよほど問題だ。このことは事後ながら前部長にも伝えてあり、いいんじゃないのといわれている。
新入部員の中では、辻美香菜と村上史子が、なかなか上手にパスを出す。あと、永田三水が、ゴレイロにしては上手だ。
さて、どんな練習であろうと、やはり周囲に迷惑をかけまくっているのが西村奈々である。
「もっと奈々にもパス出して」
と、部長にいわれるものだから、とりあえず出し手は奈々へパスを出す。
しかし奈々は、ルールを全く理解しておらず、思い切り打ち上げてしまったり、ドリブルで輪の中に入って来てしまったり。
反則をしたわけだから当然、奈々が新しい鬼になるわけだが、鬼のルールも全く理解してくれず、輪の外を走り回ったりするなど、とんちんかんなことばかりしてしまっている。

鬼が三人で連係を取るからなんとかボールを奪えるわけで、これではどれだけ時間をかけても奪えっこない。と、他の鬼からの苦情により、特例で鬼を免除されて輪に戻るものの、また同じことの繰り返し。

ますます奈々にパスを出すのが嫌になってしまうという悪循環。

「山野先輩」

と、新入部員の一人、村上史子がついに痺れを切らせ、抗議の声を上げた。ただ裕子の名を呼んだだけであるが、表情を見ればなにをいいたいのか考えるまでもない。

「まだ奈々には早いのかな。でも、だからこそ、こういうのをどんどんやらせたいんだけどな」

裕子は呟いた。

奈々だけは反則しても鬼にならないという特別ルールを設けてゲームを続けたが、それからそこそこで、裕子は、奈々だけを切り上げさせた。

ここから奈々は、裕子先生による個人レッスンだ。

まずは基本中の基本。一対一での、パスの練習。これが出来なければフットサルは成り立たない。反対に、これさえ上手になればそこそこのことは出来る。

相手からのパスを受け、相手にパスを出す。ただそれだけなのことではあるのだが、奈々はそれもまともに出来なかった。

そもそもの、意思の疎通がまるでうまくいっていないのだ。

裕子が言葉で色々と伝えようとしても、感覚的なものをなかなか理解してもらえない。奈々はどうやら抽象的な言葉が苦手なようだ。

もう少し強く、といったら、とてつもなく強く蹴ってきた。

「そんな強くなくていいよ」

裕子がそういうと、奈々は難しそうな顔で、

「『少し強く』って『少し』なの？　『強く』なの？」

「いや、どっちということじゃなくて」

あれこれいうよりも、ただ黙々とボールを蹴らせるだけのほうが

いいのだろうか。
バスケだってそこそこやれていたんだ。黙ってさえいれば、経験し、学習し、ある程度は自分で加減を調整して蹴るようになってくれるだろう。そこに「もうちょっとだけ強く」などと余計な因子を挟み込もうとするものだから、宇宙開発してしまうのかも知れない。
でも言葉を全く使わないのでは、なにも出来ないからな。なにを喋り、なにを黙るのか、自分も少しずつ学習していかないとな。裕子はそう思った。
奈々は不意に両手でボールを掴み上げると、地面へと落とした。弾むのを待ち構えて上から叩こうという仕草をするが、しかしボールはほとんど弾まず、床を転がってしまった。フットサル用のボールはローバウンド球、当然だ。
奈々はボールを拾い、同じことをするが、結果は変わらなかった。
「これ、ドリウル出来ないい！」
憮然とする奈々だが、しかし、名案を思い付いたとばかり、すぐに雲が晴れたように明るい表情になった。
「こうすればいい」
子犬を撫でるかのようにしゃがみ込むと、手を細かに上下させてボールを弾ませようとする。
「これでも難しいな」
といいつつも、ほとんど弾まないボールで器用にまりつきをしている。
裕子も、奈々と向かい合うように、床に尻をつき、開脚して座った。
「奈々、チェストパス！」
「あいよ」
奈々は、いわれるがままに、しかし至近距離であるというのに、全力を込めて胸からボールを打ち出して来た。
遠いと強く投げないと相手に届かない、近いと緩く投げないと相手が受け取れない、という基本的なことがよく理解出来ていないの

だ。自分がドリブルすることは出来るが、相手とのやりとりが出来ない。
普通ならとても取れそうにない至近距離からの速球。しかし裕子は持ち前の運動能力で、素早く両足を持ち上げてその剛速球を挟み込むようにキャッチしていた。
「お猿さんだ」
奈々は指をさして笑った。
「奈々もやってみる？　お猿さん」
「やるー」
奈々も、裕子のように床に尻をついて足を大きく広げた。
「はい、パス」
裕子は、両足に挟んでいたボールを奈々へと投げるが、奈々はどう足を動かしていいのか分からず、思い切り蹴り飛ばしてしまった。
何度かチャレンジするものの、何度やっても同じ結果。
「お猿さん、なかなか難しいぞ」
奈々は腕を組み、あうう、と喉の奥から唸り声をあげた。
「ま、最初から上手に出来るわけないよ。それじゃあ、こういうのからやってみようか」
裕子は、座った姿勢のまま、右足でちょんとボールを蹴って転がした。
「足で受け取る」
奈々は、ボールの軌道上に足を出し、ボールを止めた。
「そうそう、蹴るとボールどっか行っちゃうからさ。受け取るときは、そうやって足を止めてな。いまの、よかったよ」
「そう？」
というと、ぐふふと笑った。
裕子も自然に微笑んでいた。
教えるのは大変だけど、成功して、褒めて、喜ぶ奈々の顔、これを見るだけで、なんだか自分まで幸せな気持ちになる。
時間が経つにつれて奈々も慣れて来たのか、四回、五回とラリー

が続くようになって来た。最終的には、奈々が遠くどこかへ蹴飛ばしてしまうのだが。
「奈々、上手になってきたな」
お世辞でなく、本心からそう思っていた。
「奈々、上手になってきたあ」
奈々、ほとんどおうむ返し。
「あのさあ、奈々はバスケ、どのくらいやってたの？」
「一クオーター十分で、計四十分」
「そうじゃなくて……それじゃ、初めてバスケットボールに触ったのは？」
「小学三年生の八月二十四日。時計は見てないから時間は知らない。体育館に入る時は太陽さんすっごーく暑かったんだけど、体育館出たらでっかい雨がとってもとっても降ってて寒かった」
「よく覚えてんな、そんなことまで。あたしなんか昨日の天気も忘れちゃうよ」
新学期早々のこと、裕子は、奈々がバスケ部の練習に参加しているのを目撃した。ルールはあまり理解していなかったようだけれど、でもそこそこ技術は身についているように思えた。それは小学生の頃から、何年も何年もかけて覚えたものだったのだ。
「フットサルよりバスケのほうがよかった？」
「うん」
大きく、はっきりと頷いた。
「でもね、えんちょ先生は学校のぶかつ入りなさいっていうんだ。だから入れてくださいっていったんだけど、でもね、ここの先生もぶっちょ先輩も嫌だよっていっていたから、学校のはもう行かないでねってしていたんだ」
なにをいっているのか、さっぱり分からなかったので、何度か聞き直したところ、要するに次のようなことらしい。
奈々が世話になっていた知的障害者の受け入れ施設には、教育の一環としてのバスケットボールチームがある。奈々は小学三年生の

時から、そこでプレーをしていた。身内で練習をしたり、他の知的障害者または健常者のチームと対戦したり。

受け入れ制度で普通の高校へ呼ばれたということもあり、校長や施設の園長からは、なるべく部活動を行なうようにすすめられた。

いわれるままに、バスケットボール部に体験入部してみた。しかし顧問の先生や、先輩からは、障害者を歓迎していない旨を言葉ではっきりといわれたらしい。

「ひでえなそれ。そんなんで部活にいるのも辛いもんなあ。でも、バスケが一番好きなんだよな。部活入らないで、施設でバスケやってるだけのほうがよかった？　フットサル部に誘っちゃって迷惑じゃなかった？」

「めえあくてえゆことないよ。いつもと違うこと出来て面白いし。って全然出来てないか。ブトッサル難ちい」

わははと大口開けて笑う奈々。

「その、面白いってのが一番大切なんだよ。奈々に、そう思ってもらえてよかったよ」

裕子は立ち上がった。

「そろそろ練習メニュー変えるか。はい、そんじゃ終了して！　次、四人一組でパス練習、続けてボール奪取！　ナオと要はこっち来て！」

部員たちは四人組になり四角形を作ると、パス練習を開始した。

裕子も、直子、奈々、久慈要と四人組を作り、ボールを蹴り始めた。

足の内側を使って柔らかく蹴るのが基本なのだが、奈々にはどうしてもそれが出来ないでいる。何回やっても、何度説明しても、爪先で強く真っ直ぐに蹴飛ばしてしまう。

しかしそれは、久慈要の提案によりある程度解消された。なにをしたかというと、なんのことはなく、奈々の背中を体育館の壁に密着させただけだ。無意識に助走してしまっていた奈々だが、背中が壁と密着したことにより、助走をつけることも蹴り足を上げること

も出来なくなった。そのため、ボールを高く打ち上げてしまうことも異常な強さで蹴ってしまうこともなくなった。
出し手側が的確に出しているから、というのもあるが、奈々の受け手としての技術は全く問題ない。問題は、ボールを持った後の処理の仕方だ。
起きていることにある程度的確な対処は出来ても、自分からなにかするとなると、どうすればいいのかが分からないようだ。自分がどう動くかというのは出来ても、相手に対してどうすればいいのか、それを考えるのが苦手なようだ。
裕子は、ふと奈々がバスケのドリブルで二人をぶち抜いたときのことを思い出した。
フットサルでもああいうプレーを出せるようにするには、やっぱり徹底的に反復練習するしかないよな。
出来るまで。何度も。
「奈々、上手い！」
久慈要が、拍手して奈々のパスを褒めた。
「いまみたいに蹴ってくれると、あたしたちも受け取りやすいから。何度もやって、体に覚えさせよう」
「はーい」
奈々は嬉しそうに笑った。
さすがは久慈要、経験長いだけある。裕子は感心した。一見おとなしいが、しっかりとリードすることも出来るようだ。能力のある選手ほど、教えるのは苦手だったりもするのに、ましてや相手が奈々ともなれば出来る者ほどイラついても不思議ではないのに。
つい先ほどまで爪先で豪快に蹴ることしか出来なかった奈々、とてもパスとは呼べないパスであったが、それが少しずつ変化してきた。
足の内側で蹴ることが、多少は、出来るようになってきたのだ。
少し勢いを殺したパスを、多少は、出せるようになってきたのだ。
それは単なる偶然でしかないのか、大半は、やっぱり爪先で強く

蹴ってしまうのだが。
　それでも、前述したように壁効果でそれほど強くは蹴れないのと、そんな奈々のキックに三人の方が慣れてきたのとで、パスを受け損なうことはほとんどなくなってきた。傍から見れば、一人初心者がいるとは分からないくらいの、それは奇麗なパス回しに見えたことだろう。

3

「目撃証言によると、浜田貴之（はまだたかゆき）と辻江希（つじえのぞみ）は悪びれることなく、交際を認めているかのように腕を組んで、笑いながら買い物を続けていたという。しかし、事務所は交際を完全否定。仲の良い友達の一人と聞いております。……うっそだあ、絶対付き合ってるよ。子供じゃないんだから、仲のいい異性の友達と腕組んで買い物なんて、するわけないじゃん」
　先程から、武田晶の寝ている下から、このような大声小声が絶えることなく引っ切りなし、湯煙のごとく次々沸き上がって来ている。
　二段ベッドの上には晶、下に直子、それぞれ寝そべって読書をしているのだが、晶の黙読に対して、まあ直子のうるさいこと。
「ナオ、声に出さずに読めないのかよ」
　たぶん、これまでの人生でもう二千回くらいはこの台詞をいっているのではないか。
　直子は女性週刊誌が好きなのだが、ほとんどといってもいいほど毎度のように記事を声に出して読み上げるし、それに対して自分で文句をつけたりして、とにかく鬱陶しい。
　しかも、際どい記事であろうとも平気で読み上げるから、その都度、晶は恥ずかしくなってしまう。
「読めるけどお、でも、自分の部屋なんだからいいじゃん」
「あたしの部屋でもあるんだよ」
「ぷぷーんだ」
　直子はなんだかよく分からないことを口にした。

そして、いわれた通りに口を閉じた。とりあえず。
だが、その沈黙は一分と持たず、また声に出して記事を読み始めていた。
晶は諦めた。
今日は日曜日である。
隔週の、朝練のない、完全な日曜日。完全な休日。
とはいえ二人で早朝ジョギングには出掛けたが、強制されてトレーニングするのとそうでないのとでは気持ちのゆとりに大きな違いがあるというものだ。
二人とも、長期に渡り愛用し続けてボロボロの部屋着を着ている。特に晶のスエットは酷い。色褪せていたり、油汚れがあったり、いたるところに継ぎ接ぎがあったり、ほつれたまま、穴だらけのままの箇所があったり。
とても外になど出られない、近所のコンビニにすら行かれない、みすぼらしくだらしのない服装だ。
でも、二人とも、これが一番リラックス出来る格好なのだ。この服で外に出なければいいだけのことだ。
しばらく、晶の黙読に直子の朗読というか独り言というかが続いたが、ふと机の上のデジタル時計を見た直子は、慌てたようにベッドから起き上がった。着ている物を素早く脱ぎ捨てたかと思うと、下着姿のままクローゼットを開いてがさごそとあさり始めた。
「どっか行くの？」
晶はベッドに俯せのまま、少し首を持ち上げた。枕元に置いてある、小さな固焼き煎餅をかじった。
「友達と遊ぶ約束しててさ」
「ふーん」
晶は興味なさそうに、雑誌に視線を戻す。
玄関のチャイムの音が聞こえて来た。
「やば。来たかな」
直子は薄いピンクのブラウスを手に取ると、素早く袖を通す。次

いでかわいらしいスカートを穿いた。
玄関の方から母親の声。直子を呼んでいる。
「こっちに上がってもらって！」
直子は叫んだ。
それを聞いて、びっくりして跳ね起きたのは晶である。
「え、ちょっと、上がるなんて聞いてない。あたしこんな格好だよ、せめて居間を使えよ居間、なんでこの部屋なんだよ」
「だって、もうすぐお母さんもお客さんが来るからって」
「それならそれで、早くいえよそういうことは、なにお前だけお洒落な服に着替えてんだよ！　とりあえずあたしが他の部屋に逃げるから時間稼ぎしてよ。見ろよあたしのこのかっこ、あたしだけこんなダサイ……」
晶は、継ぎ接ぎだらけのスエットの裾を広げ、そして、その姿勢のまま硬直していた。
いつの間にか、母親によって部屋のドアが開けられていて、直子の友達らがその姿を見ていたのである。
直子の友達が三人。晶もよく知った顔だ。久慈要、深山ほのか、星田育美。全員、フットサル部の一年生だ。
「ナオ、こんちは～」
ほのかが、ひらひらと自分の手のひらを振った。
「晶先輩、お邪魔します。久しぶりに、遊びに来ちゃいました」
久慈要が、小さく頭を下げた
「ゆっくりしていってね」
晶たちの母親はそういうと、部屋を出て行った。ドアを閉じた。
まったくの余談であるが、母親も二人の娘同様に顔の輪郭が真ん丸である。
「はーい、ありがとうございまーす」
星田育美が低く大きな声を張り上げた。まるで体育会系男子。
「お母さん、もういきなり開けないでよね！」
ばつ悪そうに、晶が怒鳴る。

狭いとも広いともいえない洋間に、晶、直子、ほのか、要、育美の五人。物理的な広狭よりも、精神的な領域において晶は窮屈さを感じずにいられなかった。

三人の客人は直子に促され、床のクッションに腰を下ろして、小さなガラステーブルを囲んだ。

「あの、あたし、邪魔ならどっか行ってようか？」

ベッド二階から、ミイラみたいにすっぽり毛布をかぶった晶が、顔をちょこっとのぞかせた。

「いや、そんな、邪魔だなんて滅相もない。たくさんいたほうが楽しいですし。むしろ、あたしらが邪魔だったらそういって下さい。あたし、この通り身体がバカでかいんで、物理的に凄く空間消費しますから」

星田育美は、そういうと何故だか自分のお腹をばんと叩いた。細かいこと気にしないで豪快にやりましょうやという意思表示かも知れないが、晶には、腹減ったいくらでも入るぞという仕草に思えてならなかった。

「こっちこそ、邪魔だなんて、思うわけないだろ」

でも妹には、友達の来ることをもう少し早く教えてもらいたかったけど。

たくさんいたほうが楽しい、か。星田育美の言葉を、心の中で反芻した。

多分、本心からいっている。

きっと、そういう性格の子が直子の周囲には集まるんだろうな。

自分は、といえば、やっぱり一人が気楽でいい。ずっと黙っててもいい気心知れた仲だとしても、やっぱり、たくさんの人間に囲まれていたら、もうそれだけで窮屈でしょうがない。

しかし、ナオは遊び友達が多いよなあ。

すぐに、誰とでも打ち解けるもんなあ。

直子のそういう点に関しては、本心から凄いと思う。

晶には、友達、親友の類はまったくいない。ほとんどではなく、

皆無だ。学校で繋がりがある間は、必然的になんらかの交流はすることもあるが、それすら必要最低限、学校外で私的に会って遊ぶことなど決してないし、だからクラスや部活が変わってしまえば顔も見なくなる、口もきかなくなる

たぶんこれからも、ずっとそうだ。

誰に文句をいわれる筋合いもないだろう。それで、誰も困らないし、それで、自分が楽なんだから。

直子の性格は間違いのない長所であり、素晴らしいことだと思うけども、でも見習うつもりは毛頭ない。

ナオはナオ、姉ちゃんは姉ちゃんだ。

晶はまた、深く毛布をかぶった。

「あ、ナオ、なにそれ？」

深山ほのかが、妙に甲高い声をあげた。まあ普段から甲高いのだが。

「食器棚の上に置いてあった。食べちゃお」

直子の笑い声。

……食器棚の、上？

「いいの？」

「ありがとー」

「いただきまーす」

紙の包みを開けるぱりぱりとした音。

「美味しいね、これ」

ベッドの上の仙人様は、下界から聞こえてくる村人どもの会話に、いぶかしげな表情を浮かべたかと思うと、慌てて毛布を跳ね上げて下をのぞきこんだ。

「あ！　やっぱり……」

シャロン鈴木堂のハニーマロンクッキー……ちょっとづつ食べていたのに……

「え、これお姉ちゃんのだったの？　ごめん。前々からあそこに置いてあったし、お母さんこそこそして頭来ちゃうからこっそり食べ

ちゃえなんて思ったんだけど。お母さんのじゃなかったんだ」
「あ……いや、いいんだよ、別に」
一人で全部食べようとしてたのになんて、みっともなくていえるか。
こそこそして頭来ちゃう、という台詞にちょっと、いやかなり傷ついた晶であった。
深山ほのかはベッドの上の晶を見上げて、
「先輩、これ美味しいですねえ。ごちそうさまでした。あたしも、お土産持って来たんですよ。お礼に先輩もどうぞ。じゃじゃーん！
ハナキヤのケーキでーす」
……ハナキヤのって……超高級ケーキじゃんかよ。
「おおー」
直子と育美が同時に声を上げた。
「晶先輩、あたしも手土産持ってきたのでどうぞ」
星田育美がお菓子らしい箱を高く掲げた。村越風年堂、佐原駅近くのちょっと高級な和菓子店だ。
「あたしも、持って来たので、よければ食べて下さい」
久慈要も、成田のお店の洋風焼き菓子をバッグから取り出した。
よく分からないが、なんだか高級そうな気がする。この流れからして。
元よりも、遥かに高級豪華になってしまった……
「ありがと」
ちょこっと顔を出してお礼をいうと、また頭まですっぽりと毛布をかぶってしまった。
だから人付き合いなんて面倒なんだよ。たかがお菓子で、こんな気分にさせられて。なんだか、あたし一人、最低なやつになっちゃったじゃんかよ。
「お姉ちゃん、降りてきなよ」
晶は、毛布を剥ぐとベッド二階から下りて、直子の横に腰を下ろした。一人だけボロボロの部屋着だが、もう、わざわざ着替えよう

とは思わない。そんなことをしようものなら、かえって服装のことが三人の記憶に強烈に残る。
「そういえばあ、先輩とナオのお母さんって、すっごく顔が似てますよね。優しそうな感じで」
深山ほのかが、唐突にそんなことをいった。
「優しくもないけどね。あたしが小学生の頃、授業参観に来たことがあるんだけど、男の子が『絶対あれがダンゴの親だ』なんて叫んでさ、お母さん、他人の子だってのに思い切り引っ叩いてんの。しかも往復ビンタ」
晶は、なんら表情を変えずに淡々といった。
「ひゃあ、こっわー。そうしたとこは晶先輩に遺伝したのかな。そうそう、お父さんはどんな感じの顔なんですか」
顔にこだわる深山ほのか。まあ母娘でここまで輪郭が似ていれば、仕方がない。
「ホームベースみたいな顔」
「ええ、想像つかないなあ。……大工さんかなんかですか？」
「中学校の先生。確か、佐原南のすぐ近くにある中学だよ。顔の輪郭通りの、ガチガチの真面目人間」
「そんな二人の子供が育つと、こんな感じの姉妹になるのかあ」
ほのかは、腕組みをしてうんうんと頷いた。
「あの、なにに感心してんだか、さっぱり分からないんだけど」
「いや、なににってわけじゃないんですけどね」
ほのかは笑った。
「晶先輩！　でもあたしはね、先輩のことかっこよくて素敵だと思いますよ」
星田育美が大声を張り上げた。彼女にとっては単なる地声のようなのだが、急に喋られるとびっくりする。
「なんだよ、突然に」
熱い紅茶のカップ落としそうになった。
そもそも、でもってなんだ、でもって。

「だって、あたしたちがこの部屋に入ってきたとき、切羽詰った顔で両手広げて、『あたしこんなにダサイ！』って叫んでたじゃないですか。ダサくなんてないですよ。そんな卑下せず、もっと自信を持ってかっこよく生きてください」
「え、違う、あれは……いいや、どうでも。うん。どうでもいい。もう」
説明する気力も失せ、口を閉ざした。どう思われようと、実際、ダサイことに間違いはないし。
服装も、性格も。
お菓子ひとつで声荒らげたり萎縮したり。
マロンハニークッキーがこの辺では一番美味いと、なんの疑いも持っていなかったし。
井の中の蛙大海を知らず、
空の青さを知ったことのみが収穫とは、いと悲し。

4

「ちょっとこれ、どういうこと？」
女子バレーボール部の小野佐智子。そのすぐ横には、キャスター付きの大きなボールカゴ。たったいま彼女自身が押して転がしてきたものだ。
彼女と相対する武田晶だけでなく、フットサル部の全員が、動作をとめて事の様子を見守っている。
どうもこうも一目瞭然、尋ねるまでもない。バレーボール用のカゴの中に、フットサルのボールが大量に混じっているのだ。佐原南にサッカー部はないので、フットサル部以外には有り得ない。
「ごめん。間違って入れちゃったみたいだ。片付けをした者には注意しておくから」
晶は軽く頭を下げた。
「まさか注意で済む問題だと本気で思ってないよね？　このサッカーボールだかなんだか入れるために、バレーボールが掻き出されて、

用具室中に散らばってたんだよ。どうしたら、間違いでそんなことが起こるの？　常識的に考えて嫌がらせとしか受け取れないよね。そうじゃないというのなら、ちゃんと説明してくれなきゃ、うちの部員だって納得しない」
「分かった。それに関しては、そっちの部員が納得出来るよう文書で提出するようにするから」
「それならいいよ。じゃ、さっさと、ここから余計なボールどけてよ。本当は、用具室で散らばっているのも片付けてもらいたかったところだけど、もうみんなで持ち出して練習始めちゃってるから、そっちは許してあげるよ」
「そりゃどうも」
晶は、生山里子を手招きで呼んで、二人でフットサルのボールを取り分け始めた。
腕組みしていた小野佐智子であるが、作業が終了するとようやく満足したのか、カゴを押しながら去って行った。
「嫌な感じ。あたしより性格悪いんじゃないの。いちいち、もったりもったりとカゴを押して来たかと思ったらさあ。晶先輩一人を用具室に呼び出して、そこで苦情いうなり片付けさせればいいことなのに、わざわざ大勢いるところで」
小野佐智子の背中を見ながら、里子が毒づいている。フットサルボールを投げ付ける仕草までしている。
「まあ、いいじゃんか。こちらとしても、なくなったボールが出て来たんだし。あ、手伝ってくれて有り難うね」
「でも文書提出だなんて面倒ですね」
「まあね。でもあたしが咄嗟に独断で提案したことだし。王子の汚い字じゃ相手をますます怒らせるから、やっぱりあたしが書くしかない」
「別に王子先輩が汚い字で相手を激怒させたって、あたしはいっこうに構わないですけどね。むしろ面白い」
「そうはいくか」

などと二人が軽口を飛ばし合っていると、向こうから、一年生たちがいい争う声が聞こえて来た。
「なんで確認しなかったの！」
「ここから持ち出すところまでは確認したけど……でも、バレーボールのカゴに入れてやしないかなんて、そんなのあたしの役目じゃないよ」
「でも、奈々と組んで片付けてたんだから、だったら、そこまでチェックしなきゃ」
「なんでそんな余計なことしなけりゃならないの！　練習終わったんなら早く帰りたいよ。学校の宿題だってあるんだし」
そう、ことの発端は西村奈々。
彼女が、先日の練習終了後の用具片付けの際に、バレーボールを掻き出してフットサルのボールを詰め込んでしまった張本人である。
一年生の口論はなおも続き、ついには、奈々の擁護派と糾弾派とに分かれて、火花の散るような口論が勃発してしまった。
「いや～、遅れてごめん。英語の時間にちょこっと居眠りしたくらいで、モアイのやつぐちぐちと説教してきやがってさあ。こんな遅くなっちゃったよ。あれ、一年どもなにやってんだ？」
部長の山野裕子が、小一時間ほど遅れてようやくお出ましである。
「王子先輩、聞いてくださいよ！」
「先輩、いまバレー部の部長が！」
「奈々が用具片付けでえ」
岸田森、佐奈夏樹、辻美香菜ら一年生たちが、不満気な思いを訴えるべく我が部の部長を取り囲んだ。参加していない一年生は、当事者の西村奈々と、武田直子、久慈要の三人だけだ。
「うるせえ、順々にいえよ、あたしは小野妹子じゃねえぞ！」
裕子は怒鳴った。
「ひょっとして聖徳太子の間違いですか？　どうでもいいや。それより、聞いてくださいよ」
「分かった。じゃ、夏樹からな」

十人の声聞くのって、小野妹子とかいう男だか女だかよく分からん名前の奴じゃなかったっけ。聖徳太子なんかじゃないよなあ。あれ、どうだっけ。

「……い……先輩、聞いてますか？」

佐奈夏樹が口を尖らせている。

「あ、聞いてる聞いてる。うん、練習すればいつか魔球蹴れるよ」

「全然聞いてない！」

などとやっていると、今度は陸上部の部長である藤田瞳が怒ったような顔で近付いて来た。

ような、ではなく、彼女は本当に怒っていた。

用具室の中で、高飛びのバーがへし折られて床に落ちていたというのである。

「昨日片付けた時は、間違いなく折れてなんかいなかった。決め付けるつもりはないけど、違っていたら本当に申し訳ないとは思うけど、でも、昨日、まだ残っていたのはフットサル部だけ」

藤田瞳のその言葉に、フットサル部員ほとんど全員の視線が、西村奈々に集中した。

だがしかし……

「やべ、それあたし」

裕子はそういうと、頭をかいて、ごまかし笑いをその顔に浮かべた。

「この前までそこ椅子が置いてあったじゃん。よく見ずによいしょって座ろうとしたら、バキバキ音が鳴って、あたし転がっちゃって、気付いたら折れてた。いや、隠すつもりはなくて、ちゃんと伝えて、届けだって出そうと思っていたんだけど、まあなんだ、すっかり忘れちゃって」

かわいらしく舌などちろっと出してみる。全然かわいくないのだが。

「早く届けなさいよ！　あと、ちゃんと弁償してよね」

藤田瞳は体育館を後にした。

真犯人は判明したが、しかし、部員たちの間を既に流れてしまっているこの気まずい空気がどうなるものでもなかった。
みんな、奈々と視線を合わせることが出来なくなってしまっている。
佐奈夏樹、村上史子、辻美香菜、岸田森、一年生たちは、ばつが悪そうにお互いの顔を見やっている。
しんと静まり返った体育館に、突然、うおおお、という獣のような低い呻き声が聞こえた。
星田育美が呻いているのだ。
「アゴ、どうしたんだよ」
裕子は育美の前に立ってその表情を確認しようとしたが、しかし育美は自分のでっかい両手で顔を覆い隠してしまっている。
肩を掴もうとしたものの、しかしでけえなこいつ、強そう、などと躊躇していると、反対に、その長身から巨大な手が落ちてきて、裕子の両肩をがっちりと掴んだ。
星田育美の両目からは、涙が流れていた。
「おい、アゴ、なに泣いてんだよ。ぶっさいくな顔して」
「だって……だって、あたし、奈々のこと、疑っちゃって。陸上の方は、奈々じゃなかったのに」
「ごめん。それは、あたしが悪かった」
「違うんです！　あたしが罪のない奈々を疑ってしまったことは事実なんです。あたし、心が醜いんです！」
「はあ、純情な奴だなあ。たまーにいるよ、こういうの。うざってえ。でっかい図体のくせに、良い人過ぎるというか、まあ、これで悪人だったら無敵過ぎるけど。まあなんだ、悪いと思ってんだったらさ、奈々ちゃんに直接謝りゃいいだろ。奈々、おいで」
「はーい」
裕子が手招きすると、奈々がとてとてと近付いて来た。
「まず王子が奈々に謝るのが筋だろ！」
晶は裕子の背後に立つと、裕子の後頭部をわし掴みにして無理矢

理に頭を下げさせた。
「あいてて、髪の毛痛い髪の毛痛い！　こすれてるこすれてる！」
涙目で、逃れようと暴れる裕子。
その時、ふと、視界に入って来た、
体育館の窓から、
黒いスーツを着た男。
二人。
色のついた眼鏡をかけていて目元は分からないが、こちらを見ていることは間違いないだろう。
なんだろう。
と思ったのも一瞬、ごりごりと擦れる頭皮の激痛に、とても思考を働かせるどころではなかった。

部活も終了し、ただいまは夜、下校中である。狭い割りに交通量の激しい道路の歩道を、裕子と奈々は並んで歩いている。
晶や直子とは、たまたまタイミングが合えば一緒に帰るという程度だが、奈々とだけは、いつも一緒に下校するようにしている。
本当は、朝も一緒に登校してあげたいところだが、元々朝が苦手でただでさえ遅刻ばかりしている裕子、そこまで早起きは出来ない。反対に、奈々を遅刻に巻き込んでしまいそうだし。
その、一緒に下校する理由であるが、自分の中でもそれほど明確な理由があるわけではない。
通学に使う道路が、それなりに交通量が多いから。それと、学校の外で、どんな危険があるかが分からないし。フットサルの練習で遅くなるのだから、自分が責任を持って送ってあげたほうがいいのかな。と、その程度のものでしかない。
送ってあげるといっても、奈々の自宅は高校から徒歩圏内で、しかも駅に向かう途中にあるので、だから物理的にはなんの苦もない。
奈々の受け入れ先として佐原南高校が選ばれたのも、能力や障害のレベル云々ということでなく、単に近いからとりあえずではない

かといわれている。本人や先生から直接聞いたわけではないが、生徒の間ではそういう話が広まっている。
最近、裕子はバスの定期券を買うのを辞めた。
前述の理由により帰りは確実に徒歩であるし、朝だけのために定期券を買うのもばかばかしい。回数券はなんとなく好きではないので買いたくないし、毎日あの混雑の中で小銭をじゃらじゃらさせるのも……と、そのようなわけで、登下校はどちらも徒歩。朝は一人だし、駅から登りの山道を走って学校まで行っている。
そのため、一時期激減した遅刻が、去年なみに戻ってしまい、二日に一回はゴリ先生に怒られている始末。
「今日はねー、テスト返ってきたんだー」
奈々は、何故だか楽しそうに、そういった。何故もなにも、いつもこういう表情だからなのだが。晶と対極だ。
二人が勉強の話をするなど、初めてのことだ。
「そういえばさっき、ナオが落ち込んでたな。で、奈々は何点だったんだよ？」
デリカシーもへったくれもなく平気で点数を聞く裕子。
奈々は、むふふと楽しそうに笑うと、
「英語九点、世界史十二点、古文八点」
奈々は見もせずに、すらすらと答えた。
「うわあ、バカだあ」
点数のあまりの酷さに、思わず大笑い。健常者と同じテストなのだから、ハンデを考えれば当然のことなのに、だ。
奈々も、怒ることも悲しむこともなく、まるで他人事のように、はしゃぐように笑っている。
「でもねぇ、奈々、まだまだ甘いよ～」
裕子は自分のカバンを漁ると、使用後の鼻紙のようにくしゃくしゃになった英語の答案用紙を取り出して、奈々に突き付けた。
「英語六点」
「ぐあっ、あたひよか酷い」

「だろ。しかも、これでも前日に勉強してんだよな」
なにを自慢気にいっているのだか。
「あたし昨日の夜はずっとブトサルボル蹴ってた」
「バカ最高！」
裕子は叫び声をあげた。
笑い合う二人。なんだか妙にテンションが高まって、奇声を発しながら抱き合ってしまう。
道行く人が変な目で見ているが、二人とも全然気にしていない。
「王子あいがと」
「なにがよ？」
「バカっていってくれる。誰も黙っちゃって、思ってるのに黙っちゃって。王子とヤマダはバカバカいってくれるから好き」
普通、いえるわけがない。あきらかに知的障害者と分かっている者に、そんな言葉。
裕子は、自分がおかしいだけという自覚は持っている。確かに、下手したら相手は傷つくかもな、という思いはある。
でも、奈々にはこれでよかったんだ。奈々本人は、変に気をつかわず本音で接して欲しかったんだ。
ヤマダって、オムツマン山田の妹のことかな。この間のヤニ事件の。
きっと悪意を込めてバカっていっただけだろうに。奈々は純真過ぎて悪意を見抜く力がないから、単に心地の好い言葉と受け取ってしまったのだろう。
「あのな、奈々、バカだからバカなんて、普通は、気遣っていえないものなんだよ。いわないのが、当たり前なの。そういわれて傷ついちゃう人もいるし、その人が傷つくタイプの人かどうかなんて、分からないんだから。あたしは、バカも個性だって思っているけどね。だからあたしは、こんなバカなのに自分のことが好きだったりするし」
「コセイって？」

奈々は親指をしゃぶりながら、首を傾げている。
「勉強が出来る出来ない、上手に生活出来る出来ない、速く走れる、足が遅い、優しい、怒りっぽい、お喋り、無口、人って、こんなふうにたっくさんの人がいるよね」
「うん。あ、そういうのコセイなのか。いろんな人いるよってこと」
「そうそう。奈々は奈々だから奈々なのだ、ってこと」
「あう。奈々は奈々にゃから奈々ななのか。あれ、奈々だから奈々で奈々が」
そのいいまわしをたいそう気に入り、何度も反芻する奈々。全然いえていないけど。
「奈々だから奈々。だから奈々のままでいいんだよってこと。奈々が奈々じゃなかったら、奈々じゃなくなっちゃうだろ」
「そっか、なにゃは奈々だから奈々なのだなのか。裕子はブスだからサルなのだ」
「ブスじゃねえ！　バカだけどブスじゃねえ！」
これまでそんな単語、話のどこにも出てなかったのに、どこから引っ張って来た？

5

「お皿洗いにお片付け、完了」
西村奈々は、部活の王子先輩の真似をして、指をピッと立ててかっこつけようとしたが、思ったようにいかず、なんだかしまりのないふにゃふにゃしたポーズになってしまった。
「はい、ありがとう」
奈々の母親、史恵は片付けられた皿を見て、苦笑する。
全部、洗い直しだなあ。
汚れや洗剤の泡が、ろくに落ちていないのだ。
洗い物は汚れを落とすために行うもの、と教えても、意味を完全には理解出来ていないから仕方がない。そもそも、汚れているのが嫌という気持ちがないのだから。身体中に油がついていたらさすが

にぬるぬるして不快だろうが、泥で汚れている程度なら平気なのだから。
「それじゃ、こんどは歯磨き。終わったら、お母さんに見せるのよ」
これぱかりはしっかりチェックしてあげないと、虫歯になってしまったら大変だから。
「うあい」
また、指を立て、心にピッと実質ふにゃっ。
今日は土曜日。
父親は仕事の都合で土曜にはほとんど家にいない。今日もそうだ。
だから、奈々の土曜日の過ごし方というのは、母親と過ごすか、徒歩圏内に住む知的障害者の友達と遊ぶか、どちらかであることが多い。
ただ最近、もう一つ選択肢が加わった。受け入れ先の高校で入った部活で、隔週で行っている休日練習だ。
奈々は高校で初めて、学校の部活動というものに入ったのだが、それにより、生活にこれまでよりもいいリズムが生まれたようだ。放課後や休日の練習を終えて帰ってきた奈々の表情はとてもいきいきとしており、それを見ていると史恵まで嬉しくなってくる。
「はい、じゃ、あーん」
「あー」
奈々は大口を開いて、史恵に口の中を見せる。
「あ、ここ磨けてないぞ。下の奥歯のほう。鏡見て自分で確認しなきゃ。ちょっと歯ブラシ貸して。……はい、いいよ、ゆすいできて。飲んじゃだめだよ。バナナ味だけど食べ物じゃないからね」
「そんなことといわれなくても分かってるよ！　奈々はなにゃなんだぞ！」
バナナ味の飛沫が口から噴き出しまくる。
「ごめんごめん」
分かってないから、この前飲んじゃったんじゃないか。
玄関のチャイムが鳴った。

「王子だ！」
奈々は玄関へ向かって走り出した。
「お母さんが出るから、奈々は洗面所で口ゆすぐ！」
「はーい」
両手を広げて飛行機旋回、奈々は洗面所へと向かった。
史恵は玄関へ行き、ドアを開けた。
「こんにちは！　奈々、迎えに来ました」
門の前で、山野裕子が元気よく大きな声で挨拶した。
「こんにちは、裕子ちゃん。ごめんね、奈々のこと色々とかまってもらっちゃって」
ここ最近、裕子は毎日奈々を自宅まで送り届けているので、史恵とはもう知った顔なのだ。
「いやあ、そんなこと気にしないでくださいよ、あたしの好きで、勝手にやってることなんだから」
今日は、奈々が知的障害者の施設に行く日だ。以前は週に三回は行っていたが、現在は月に二回。前回、熱が出てしまって行かれなかったから、一ヶ月ぶりだ。
今回は裕子も一緒だ。下校中の雑談で、施設に興味を持っていることを話したところ、奈々に誘われたのである。
「ほんとうに、迷惑かけるけど、ありがとうね」
史恵は軽く頭を下げた。
「おばさん、そんなペコペコしないの！　奈々のなにがどう迷惑なの？」
「え、そういうつもりでいったわけじゃないんだけどなあ」
つもりがなくても、誰でもそうなっちゃうのかな。裕子は思う。
確かに、障害者の子がいたら、どこでなにをしてしまうか予想も出来ないところがあるし、はっきりいって誰かに迷惑かける可能性はおおいにあるわけで、だから親としても無意識に卑屈な態度になってしまうのかも知れない。でも、なんかそれ、違っている気がする。なにがどう違っているのか、ならばどういう態度を親は取ればいい

のか、そんなこと分からないけど、とにかくなんか違う気がする。
「やっぱり王子だ！　来てくれてあいがと～」
奈々が小さなカバン片手に、史恵の脇を抜け、外へと飛び出した。
「準備おーけー忘れものなし！」
奈々は自分のお尻をぺしぺしと二回叩いた。意味不明。多分、いま目の前にいる先輩様の影響だ。
「それじゃ、気をつけて行って来るんだよ。裕子ちゃん、よろしくね」
「了解っす。それじゃあ、行って参りまーす！」
裕子は元気よく天へ両手を突き上げた。
「そえじゃ、行って参りまーす！」
奈々も、両手を突き上げる。
「そのまま真似すんなよ」
「じゃあどう真似ふりゃいいのさ」
「自分で考えな。つうかそもそも真似すんな」
「考えても分からん、教えてくれよー」
「やだー」
二人は小突き合いをしながら、歩き出した。
裕子は振り返ると、あらためて奈々の母、史恵に手を振った。
少し歩くと、狭い割に車通りの激しい道路へと出る。佐原駅と佐原南高校とを結ぶ県道だ。二人は、その端の歩道を歩いて行く。
かなり傾斜のある道だ。
現在は駅に向かっているため、下り坂である。
バスケのことだの、施設のことだの、他愛のない雑談をしているうちに、いつしか坂を下り終えていた。
平坦になった道をもう少し歩くと、町並みがからりと変化した。単なる田舎っぽいだけの風景から、江戸情緒を感じさせる時代劇のセットのような眺めになった。
佐原を佐原たらしめる、町並みである。
「そこ、葉月のうちがやってるお店なんだよねー」

裕子は、九頭和菓子と看板の出ている明治大正を想像させる古びた建物を指差した。
「ふえ、そうなんだあ。あたしねえ、ここ、お父さんとお母さんと一緒に何回か来たことあるよ。おいしいよねー」
「毎度のごひいき、有り難うございます」
葉月のお父さんが、少し開いたガラス戸の間から頭を突き出して来た。店の中から、お辞儀をしているのだ。
「おじさん、こんにちは」
裕子は片手を上げた。
「こんにちは。葉月どう？」
お父さんはガラス戸を完全に開いて、外へ出て来た。恰幅のいい、頭髪の少し寂しい中年男性である。
「どうもこうも、毎日会ってるでしょうが」
「違うの！　学校の！　学校の、は　づ　き！」
お父さんは身もだえするようにぐねぐねと腰をくねらせた。面白がって奈々が真似する。
「相変わらず真面目だよ。この子、入り立ての一年生なんだけど、あたしなみに物覚えが悪くてさあ、でも全然焦れずに丁寧に教えてくれていて、ほんといい子だよ」
「ハヅキいい子いい子！」
奈々が右腕突き上げて叫ぶ。
「よかった。で、いい子なのは分かったけど、というかそんなこととっくに分かっているけど、他は？　いきなり駄洒落を叫んで一人で大笑いするようになったとか」
「たぶんねえ、そんな葉月になるには寿命が足りないね。あの堅苦しい真面目さは、百年やそこらじゃ、これっぽっちも変わりゃしないよ」
そもそも娘になにを期待してんだか。まあ友達が出来るようにもう少し明るくなったほうがいい、ってことなんだろうけど。
「電車に遅れちゃうから、もう行くね」

「今度お菓子買いに来てねー。後輩のお嬢ちゃんもね」
「はーい」
奈々は振り返り、ぶんぶんと手を振った。
電車に遅れてしまうといっても、まだまだ余裕はある。昼の成田線は一時間に一本しか来ないため、慎重に行動しているだけだ。
二人は電車到着予定の十五分前に、佐原駅に着いた。
白塗り壁の、これまた古臭い雰囲気の駅舎だ。その前のロータリーには、昭和時代に主流だった円柱郵便ポストが置かれている。
自動改札を抜け、ホームのベンチで雑談をしていると、やがてことんことんと静かに電車が入って来た。青とベージュのツートンという、なんだか古臭さを感じさせる車両だ。
二人は電車に乗り込んだ。
同じ車両には、他に四人ほどしか乗っていない。
ほどなくして、ドアが閉まり、電車は発車した。外から見ていた時の静かさと比べて、隙間が空いているためかガタゴトとうるさい。
奈々は電車移動が久しぶりらしく、窓に両手をつき顔を押し付けて、左から右へと流れて行く風景に夢中になっている。顔を離すとガラス窓がよだれでべったりだ。
五分後、隣の駅である大戸駅に到着した。
降車したのは裕子たちだけのようだ。
駅舎のない、ホームのみの淋しい無人駅を出た。
裕子は中学生の頃に香取からここまでサイクリングに来たことがあるが、その頃と全く変わらない風景だ。佐原駅は、駅周辺は多少は栄えており少し離れるとなんにもなくなるのだけど、ここは駅のある所からして既になんにもない。
でも、だからのどかで気持ちが良い。時間がのんびりと流れているようで。
裕子は昨日調べておいた住所と地図を頭に思い出し、歩き出す。
地図を見るのは苦手だけど、苦手苦手といつまでも逃げていても仕方ない。と、昨日は我慢してしっかりと地図を見たから大丈夫な

はずだ。
　しかし、五分、十分と歩いているうちに、なんだか、ちょっとだけ不安になってきた。
「奈々、道が違ってたら教えてね」
「うん。道、反対。駅の向こうだよ」
　裕子は昔のギャグ漫画のように、前のめりに転びそうになった。
「もっと先にいえや！」
　踵を返し、来た道を戻り始める。
「ユーターン！」
　ぶーん。飛行機旋回。奈々はいつも楽しそうだ。
　駅に戻り、線路の反対側へと渡った。
　それから十五分ほども歩くと、ようやく林の向こうにあれが施設かなと思える建物が見えて来た。
「あれ、あのとんがり屋根のとこ！」
　奈々が指を差し、叫んだ。
　さらに五分も歩き、ようやくたどり着いた。駅からそれほどの距離ではないが、行ったり来たりえらく時間がかかってしまった。
　田畑の中にぽつんと存在している狭い敷地、L字形の建物。庭には砂場もあり、なんだか幼稚園みたいな雰囲気だ。
　観音開きの門は、片方だけ開いている。
「らぃらっく学園」と年期に薄汚れたような表札には書かれている。
　このちいさな「ぃ」ってどう発音すんだろ。
　などと裕子が思っていると、
「邪魔だバカ！」
　裕子はどんと胸を強く押され、突き飛ばされた。
　門を通って敷地から出て来た、グレーのスーツ姿、無精髭の大柄な中年男、裕子には一瞥すらくれず、建物の方を振り返ると、
「おい、また来るかんな！」
　ドスのきいた声で叫ぶと、荒っぽい足取りで歩き出した。

しばし呆然とする裕子であったが、はっとしたように、
「なんだよ、あいつ！　頭来た！　文句いってやる」
「ダメ！」
奈々は、男を追おうとする裕子の、ズボンの腰に手を突っ込んで引っ張った。
「なんで？　あいつ知ってんのか？　つうかズボン引っ張んな、パンツ出ちゃうだろ！」
「よく知らない人だけど、何回も何回も来てる。えんちょ先生がよく、なにもしないでっていってた。ショウくんが殴ろうとするとダメだよって止めてた」
やっぱりそういう、殴りたくなるような人種なのか。
「奈々、いらっしゃい」
敷地に、柔和な微笑みを浮かべた女性が立っている。顔は一見すると若そうなのだが、よく見ると随所に小ジワがあるし、頭髪の八割方が白髪だし、それなりの年齢の女性なのだろう。
「あう、えんちょ先生！　あのね、お友達つれて来たんだ。王子！」
「というあだ名の、山野裕子といいます。学校でおんなじ部活です。奈々がどんなとこでお世話になったのか、つい興味があって来ちゃいましたけど、迷惑なら帰りますから」
「迷惑だなんてとんでもない。歓迎します。さ、中に入って」
園長先生はそそくさと歩み寄ると、裕子の手を両手で包み込むように握り、続いて裕子の腰へ手を回し、中へ入るよう促した。
「こっちだよ」
今度は奈々が裕子の腕を掴んで、ぐいぐいと引っ張り始めた。
L字の建物の、内側は簡素な屋根の付いた通路で、外側には幾つかの大きな部屋がある。裕子は先程、ここを幼稚園の建物のようだと思ったが、本当に、ここは元々幼稚園で、壁をぶち抜いたり逆に仕切りを作ったりなどの改装をおこなったものらしい。
奈々に引っ張られるままに、靴を脱ぎ、通路に上がり、大部屋へと入った。そこには十人ほどの子供たちがいる。年齢層は様々で、

小学低学年くらいから、大学生くらいにしか見えないような者までいる。女の子が三人いて、あとはみんな男の子だ。
子供たちは長机で、絵を描いたりなどそれぞれの作業をしていたが、奈々に気がつくと、一斉に立ち上がり、飛び掛かるかのような猛烈な勢いで集まって来た。
裕子たち二人は、ぐるりと取り囲まれてしまった。
奈々と同年代と思われる男の子が「奈々、久しぶりだねえ」と、声をかけてきたが、他の子らは、黙って笑みを浮かべているだけだったり、頭を左右に振っていたり、目を白黒回転させながら奈々の名を連呼していたり、様々な反応を見せている。脳の構造の、一体どういった理由でそういう反応になるのか、裕子にはよく分からない。分かるのは、奈々はこの子らにとても好かれているんだなということ。
「今日はねえ、お友達連れて来たんだよ」
いままでみんなの視線は完璧なまでに奈々にのみ集中していたのだが、その一言で、今度は一斉に裕子へと視線が移った。
「ともだち！」
「やったー！」
「ともだち！」
半分ほどの子が、大声で叫び出す。他の子は、黙ったままニコニコしていたり、むすっとしていたり、泣きそうに俯いていたり、でも、裕子の服の袖や裾を引っ張っていたり。みんな、友達の来訪、つまり自分が来たことを喜んでくれているようだ。それぞれ思い思いの表現方法で。これが本に書いてあった、プロトルコが狭いとか何とかいうやつか。あれ、プロトコルだっけ？
みんなの視線を受けた裕子は、これは挨拶しなきゃってことだよな、と思い、咳払いすると、おもむろに口を開く。
「ええと……山野」
「王子！」
奈々が、裕子の声を打ち消すような大きな声で叫んだ。

「王子です。よろしく」
まあ、いいか。
裕子は、にこりと笑みを浮かべた。
「おうじ！」
「おうじ様のおうじか？」
「おうじ！　あそぼ！」
七、八歳くらいに見える子から、大きな子まで、みんなで裕子を取り囲んで、腕や服の裾をぐいぐいと引っ張った。
「ちょっと、この子らに付き合ってみます？」
園長先生が、出入口のガラス戸のところで笑みを浮かべている。
「はい」
みんなで一緒に遊ぼう、ということになったのだが、遊ぶといっても内容は単純、トランプの神経衰弱や、婆抜き、裕子もルールを知っているものばかりだ。
最初は、ちょっと遊んでやりますか、という上から目線の裕子であったが、果たして過ぎてみれば、どのゲームもことごとく裕子がビリであった。
みんな、判断がやたらと素早く、しかも的確なのだ。何人か、どうしてもルールの特定部分を理解出来ない子がいて、それに対する救済措置はとっていないためそこは完全なハンデになるわけだが、裕子は、その子らにすら一度も勝つことが出来なかった。
「あのー、あたしバカなんで！　少しは手加減してくれないとお」
しまいには、裕子は本音で泣き言をもらし始めた。
その後しばらくして、裕子は園長に呼ばれて隣の事務室へ。
一番奥の壁際に園長先生の席があり、そこで園長先生と向かい合った。
「どうでしたか？　みんなは」
「どうって……みんな楽しそう。頭の回転が早い子が多いですね。ゲームやったんですけど、あたし誰にも勝てなかった。ルールをどんなに説明しても同じところだけ取り違えちゃう子や、上手く言葉

の出てこない子もいるけど……なんていやいいのかな、そう、慣れると単なる個性ですよね」
障害も個性。兄との会話の中で発見した、自分とあの子らを結ぶ言葉。
裕子のその言葉に、園長は優しく目を細めた。
「そう。町で擦れ違うだけでなく、同じ部屋で、輪に入ることでかなりの偏見はとけるんですよね。だからわたしは、なるべく色々な人にここの子らを見て貰いたくて、興味持った方をよく招待するんですよ。子供たちにも、知り合った人たちをどんどん呼んで貰うようにお願いしてるんですよ」
「はあ、それで奈々も、あたしのこと誘って来たのか」
「奈々は特にお利口さんだから、自分の気持ちとしても、仲良くしてくれる子に色々と見せたかったんでしょうね」
「でも本当に、いろんな子がいますね。あたし全然勉強できなくて、机にかじりついて頑張ろうとしたこともあったのだけど、どうしても頭に入って来なくて。机にいることが辛くて辛くて。この前、兄にいわれて、これも一種の脳の障害だよなあって思いましたよ」
晶にいわせれば、単なる勉強嫌いというところだろうが。
「実際は、そういうのとは違うんですけどね。あの子らはもっと先天的な脳の問題、医学的な問題だから。でもその考えは面白いですね。障害者との距離を縮めることが出来る貴重な考え方です。知的障害者といっても、障害の大小だけでなくタイプも色々とありましてね、他は完全に正常なのにどうしても漢字だけ読むことが出来ない者、記憶をそのまま絵に描けるくらい優れているのに一桁の足し算も出来ない者、情緒や能力の発達が著しく遅れている、またはこれ以上の成長の出来ない者。この施設にいるのは、主に知性面での発達の遅れている子たちです。要するに大人へと成長していく能力に異常のある子です。遅れている進んでいると、人間が判断するのはおこがましいかも知れないけれど、やっぱり遅れているんですよ。でもそれは、神様から授かった、そう、山野さんのいう個性という

ものだから仕方がないとして、実際に障害を持った身としてなにが出来るのか、難しいなりにも世の中からなにを学んでいかなければならないのか、そういうことをここであの子たちには学んで貰っているんです」

「こんなとこに、こんな施設があるなんて知りませんでした。まあ、あたし香取に住んでるんで、ここに来ることがほとんどないですけど」

「色々なところにありますよ。香取では、知り合いが、福祉施設『大人用の職業訓練場』を経営してます。よく佐原や成田で、園内で作ったきのこを売っていたりしていますよ」

「あ、それ、お祭りの時に見たことがある。お母さんがきのこ買ってて、袋にその名前が書いてあって、面白いなって思った記憶があります」

「面白い名前ですよね。本当は、あまり漢字は使わないものなんだけど。植物の名前をひらがなにしたり」

「そういえば、ここって、なんて発音するんですか？　小さい『い』が小さくなければ、らいらっく学園だけど」

「ああ、読む時はらいらっくです。見た目が綺麗な感じになると思って、わたしが考えたのだけど」

「ちょっとすっきりしました。気になってたんで。……あの、園長さんに聞きたいことがあるんですが。実はここに来たのって、それが目的でして。奈々に誘われるまでもなく、一度ここに来てみたいと思ってたんです」

裕子は、前々から疑問に思っていたことを、園長先生に質問した。

知的障害者への学校での接し方。特に、部活といった狭い空間での接し方。

障害者への接触を嫌がる者に、なんと説明すればいいのか。

裕子自身は感覚として問題なく奈々と付き合えても、その感覚を正しく言葉に表せなければ、周囲に迷惑かけてしまうかも知れない。逆にいえば、説得力のある言葉さえ持っていれば、色々な障害を円

滑に乗り越えられるのではないか。
具体的にどうすればいいのか。気持ちをどのように持てばいいのか。どうすれば、そうした感性や感覚を説得力のある言葉に出来るのか。
質問が少し漠然としているところはあるが、こういう仕事をしている人なら汲み取ってくれるのではないか、適切な答えをくれるのではないか、と裕子は思ったのだ。
「山野さんは真面目ですねえ」
「いや、基本は不真面目なんですけど」
裕子は頭をかいた。
「こういえば良い、という言葉は、残念ながらわたしも持っていません」
「そうですか。やっぱり」
裕子の表情から、ほんのちょっとだが元気が失われた。
「接する人が背中で表現するしかないでしょうね。でも山野さん、わたしは、あなたはもう気付いているんじゃないかと思うんですよね。だから、背中を見せるだけでいいんじゃないですか？」
「そういわれても、あたしの背中なんか見せてもなあ」
子供の頃に木から落ちた時の傷が、僅かに残っているくらいだぞ。
「王子まだあ？」
事務室のドアが勢いよく開き、奈々が顔をのぞかせた。
「行って来ていいですか？」
裕子は立ち上がった。

6

「で、最後にみんなで賛美歌を歌って、終わり」
長々と昼間の出来事を話し終えると、ようやく裕子は口を休めた。
ストローをくわえ、オレンジジュースを少し飲んだ。
「ふーん」
自宅マンション。兄の孝と肩を並べてソファーに座っている。

「とことん考えなきゃいけない問題のような気もするけど、でも、あの子らとあたしらと何がどう違うんだって思うと、考えること自体が失礼なことなのかな、とも思えてさあ。園長さんも、遅れてると人間が決めつけるのは本当はおこがましい、神の領分じゃないか、みたいなことといってたし。まあ、ああいう人たちは、仕事だから、そう決め付けないとやっていけないんだろうけど」

「いや、考えるのはいいんだよ。実際に、大多数の人が普通に送れるような生活を、上手に送ることが出来ない人がいて、だからそういう施設が存在しているんだから。おれだって、買い物出来ない、自分で食事も出来ない、計算もなにも出来ない、なんてなったら困るし、でも誰だってそうなって生まれてくる可能性ってのはあるんだから、じゃあ助け合わないと。一種、保険と同じ。こういう相互保険って、動物にはない人間社会の良いところじゃん。動物だったら、弱者はもう存在出来ないんだから。人間社会万歳。考えることおおいに結構。誰しもが満足ってわけにはいかないけど、だからって考えなきゃなにも始まらない。で、そういう人たちが少しでも快適な社会生活を送れるようにするにはどうすればいいんだろう、ってことを単純に考えると、物理的な面での技術の発達や工夫、それと精神的な面つまり本人の心のケアと我々の理解、というものが必要なわけだ。理解の例としては、そうだな、裕子はさっき、考えることが失礼なんじゃないかといったけど、一種の障害者である裕子に対して、『遅刻ばっかりして！』って怒ることは失礼じゃないわけだよ。『裕子は勉強が全然出来ないからな』って救いの手をさしのべてやろうというのは失礼なことじゃない」

孝は、スナック菓子を一つつまんで口に入れた。

「なんであたしをいちいち引き合いに出してくるのか意味不明なんですけどお。……それにしても、兄貴、この前から思ってたけど、この話にやけに乗ってくるよね」

「前々から、介護士の資格取ろうかと思っててね。なりたいわけじゃないけど、まあ資格だけ。知的障害者の介護なんかもあるから、

色々と勉強する機会や考える機会があるんだよ。我が家には勉強障害や上品障害の患者さんがいるから、観察していて凄く参考になるんだよな」

「お兄ちゃ～ん、絶対に殴り返さないでねえ」

裕子は、兄貴の足元に転がっているボクシンググローブを拾うと、自分の手にはめた。

第四章　幸せ勝負

1

「なんじゃこりゃあぁ」

問題文を見た山野裕子は、思わずシャープペンを持つ手に力を込めていた。アルミ製だというのに、いまにもへし折れてしまいそうだ。

英文を和訳する問題なのだが、文法的にもさっぱり分からない上に、見たこともないような単語が二つもある。

他に誰もいない静まり返った教室。裕子は窓際の自席に、一人ぽつんと座っている。

いまは放課後。居残りで、英語の勉強をさせられているのだ。

こんなことばかりさせられているものだから、部の長という身でありながらフットサルの練習には遅刻ばかりだ。

これはいじめかと思わずにはいられない難解英語の数々に、裕子の顔は青くなったり赤くなったり。普段ろくに勉強をしていないのが悪いのだが。

とはいえ、バカと分かってる生徒にここまで難しい問題を出すんじゃねえよ。

だんだん、イライラしてきた……

「というか、既に人類の、我慢の限界を超えている」

ぷるぷる手を震わせていた裕子であったが、力抜けたように机に伏せると、腕の中に顔を埋めた。

なんであたしって、こんなバカなの……

なんなの、この脳味噌。

早くフットサルしたあい。

したいようううう。

「おう、じゃあまた後でなあ」

廊下から、男子の楽しそうな声が聞こえて来た。

裕子は突然身を起こすと、勢いよく立ち上がった。
椅子が後ろに倒れるのも気にせず、うおおお、と雄叫びを上げながらドアへと走り寄り、開き、廊下へと飛び出した。
やはり遠藤孝一。
裕子は背後から走り寄り、彼のジャージのズボンに両手をかけると、なんの躊躇いもなく引きずり下ろしていた。一気にパンツまで脱げてしまい、お尻のほとんどがあらわになってしまった。
「なにすんだ、てめー！」
遠藤孝一は声を裏返らせて叫んだ。屈み腰になり、ズボンを上げながら裕子の顔を睨みつけた。
「あたしが居残りでこんな苦労してんのに、楽しそうにしやがって。あたしと同じくらいバカのくせに」
「じゃあお前のほうがよりバカってことだ。さっさと教室に戻れや、くそザルが。教科書熟読して脳細胞崩壊して死ね！」
「やかましいわい、きったねーケツ見せやがって！」
「お前がやったんだろうが！」
遠藤孝一はお尻を見られた恥ずかしさか、ちょっと涙目になって、逃げるようにそそくさと去って行った。
「あたしの方がちょっとだけ悪かったような、気がしないでもない、かも知れない」
裕子は腕組みして、走り去る遠藤孝一の悲しい後ろ姿をじっと見ている。
いやいや、敵に同情している暇などはない。早く問題を解いて、先生に見て貰って、ＯＫ貰って、部活に行かないと。フットサルボールが呼んでいる。
奈々、大丈夫かな。ナオやカナが面倒見ててくれてると思うけど。
しかし晶の奴、人の苦労も知らないで、遅刻するな遅刻するなって文句ばっかりで頭来るよな。だったらお前もテストでクラス最低点取って居残ってみろってのの。
教室に入り、自分の席へと戻る裕子。

倒れた椅子を直し、腰を下ろす。
ふう。と、一息。
勉強、再開だ。
シャープペンを握りしめる。
問題文に目をやった瞬間、額にどっと汗が吹き出した。
拒否反応に、うぎゃーと絶叫すると問題用紙をぐちゃぐちゃに丸めてしまった。
一瞬の後に我に返った裕子は、今度は大慌てで問題用紙を広げ始める。筆箱を押し当ててアイロンのように水平に動かし、紙のシワを伸ばした。
今度こそ、真面目にやるぞ！
シャープペンの先端を用紙に押し当てた。
「一球入魂！」
丸めて伸ばして紙が弱くなっていたためか、ペン先で突き刺して、その勢いでびりびりと破ってしまった。
「わおおおおお！」
シャープペンを投げ捨てると、なにを思ったのか両手で机をばんばんと叩き始めた。
「うるさいぞ！　なにがわおおおじゃバカ」
教室の、前のドアが開いて、英語担当の滝沢先生が入って来た。
「だって、難しいんだもの」
泣きべそをかいた。
武田直子と違って嘘バレバレの猿芝居だ。
「難しいから、勉強するんだろ」
「難しすぎるから勉強出来ないんですよ。もっと簡単にしてくれないと」
「分かった分かった、今度は問題を全部ひらがなで書いてやるから」
「そういう問題じゃないでしょ！　それで難しい問題でもなんでも解けるってんなら、あたし天才とバカの混じった奇跡の生命体ですよ」

そんなので社会や英語や数学や古文の問題が解けるなら、世話はない。
「おう、じゃあ奇跡を起こしてくれや。お前な、真面目な話、このままふざけた成績取り続けてると、本当に卒業出来んぞ」
「分かってますよ」
そんなこと。いわれなくたって。
「あと十分したらまた来るからな」
「はーい」
滝沢先生は教室を出て行った。
裕子は気をとりなおして、改めて真っすぐ机に向き直る。
しかし、どうにも集中出来ず、気持ちは完全に上の空。
窓に頬杖をついて、ぼんやりと校庭などを眺めてしまう。その向こう、山の下に広がっている田んぼや利根川などの眺めにも目をやってしまう。もう見飽きた風景だが、英文なんか見ているよりよほどましだ。
校庭に、西村奈々の姿を発見した。
まだ、部活に行っていないんだ。
花壇のそばでしゃがんで、地面を覗き込んでいる。
また、蟻の行列を見ているのだろうか。
あれ、あいつら……
黒いスーツを着た男が二人、建物の陰に隠れてコソコソと奈々の様子を伺っている。いや、本当に隠れてコソコソ奈々を見ているのかは分からないが、裕子にはそう思えた。
この前、体育館で窓から覗き込んでいた二人だ。あの時は里子に頭をゴリゴリやられてて痛くてそれどころじゃなくて、あまり注意していなかったけど、でも、間違いない。あの時の二人だ。
なんなんだ、あいつら。そもそも、部外者が入り込んで、不法侵入じゃないのか。
裕子は立ち上がった。
あの男たちに、何者なのか尋ねないと。居残り勉強どころじゃな

い。
だが、男たちは、誰かの接近に気付いたようで、足早に立ち去ってしまった。
それからすぐ、反対方向から、武田直子と久慈要の二人が姿を見せた。
奈々のところへ近付いて行く。
直子は奈々のそばにしゃがんで、しばらく二人で地面を眺め続けていた。おそらく蟻の観察だ。
二、三分ほどすると、直子と奈々は立ち上がった。久慈要と三人、校庭から姿を消した。部活に行ったのだろう。
「蟻が好きだなあ、奈々は」
裕子はぼそりと呟いた。
それにしても、さっきの黒スーツ二人組、なんなんだ、あいつら。
気味が悪い。
というよりも……面白くない。
なんだか分からないけど、こそこそ、探りやがって。

2

信じられないものを見た時に、誰もがそういう顔になるのではないだろうか。
肯定と否定、常識と非常識、様々なものがごっちゃになった、まさにそんな表情で、生山里子は西村奈々の背中を見ていた。
「ね、いまの、いまのいい感じ？」
西村奈々は振り返った。右足で、ボールを踏み付けている。
二人は、一対一の練習を行なっているところだ。
「奈々、結構いいもの持ってるよ」王子先輩は、そういっていた。
でも里子は信じていなかった。
仮に素質があろうと、始めたばかりだ。
それに、奈々は……

ウォーミングアップに、軽く面倒見てやるくらいのつもりだった。
初めのうちは、確かにそうだった。
どう手加減してあげればいいのか、かえって悩むほどに、力の差があった。
手加減はしても、負けてあげるつもりは、里子には毛頭なかった。
事実、里子の動きは奈々を翻弄し続けた。
奈々は予測をせず、見てから動く。つまりフェイントに簡単に引っかかるのだ。
そう分かっていて、手加減をすることのいかに難しいことか。
ところが、里子の油断したほんの一瞬の隙を突いて、奈々は見るも簡単にボールを奪ってしまったのである。
里子は、取り戻そうと奈々へと詰め寄った。
奈々は、爪先を器用に使ってボールを背後へと転がすと、自身も反転させてボールを守った。
里子の頭に血が上った。相手が誰なのかなど、完全に頭から消し飛んでいた。本気で、襲いかかった。
だが、奈々も身体を巧みに利用して、簡単には渡さない。
「奈々は、先の行動を考えるのは苦手だけど、なにかに対してのリアクションはとても素早く的確。使い方によっては相当いけるかもよ。ま、まずはボールに慣れて貰わなきゃだけど」と、裕子がいっていたことがある。里子は真面目に聞いていなかったが、その通りなのかも知れない。
しかし素人は素人。バカにされてたまるか。
果たしてまた、里子の、悪い虫が出てしまった。
勝手に相手をみくびっておいて、そのみくびっていた相手にやり返されると、バカにされたと我を失ってしまうところがあるのだ。
奈々の楽しげな顔が、ますます里子の怒りに拍車をかける。
本来ならば里子の方が、遥かに実力が上のはずなのに、奈々から全くボールを奪うことが出来なかった。里子は余計に焦り、悪循環

に陥っていた。
「能力をどう戦力として伸ばしてくのか。部長の腕の見せ所でもあんだから、まあ、頑張って奈々を鍛えてみな」分かってんだよ、いわれなくてもそんなこと。でもあたしまだ部長じゃない。とにかく誰にも、負けたくないんだ！
里子は奈々に強く体を当て、ボールを奪おうとした。ゲーム中なら間違いなくファールを取られるプレーだ。
奈々は体当たりを受け止めつつ、身体をねじって勢いを逃がした。
負荷が突然消失したことに、里子はバランスを崩して、前へ大きく片足をついた。
信じられないものを見た時に、誰もがそういう顔になるのではないだろうか。
肯定と否定、常識と非常識、様々なものがごっちゃになった、まさにそんな表情で、生山里子は西村奈々の背中を見ていた。
「ね、いまの、いまのいい感じ？」
西村奈々は振り返った。右足で、ボールを踏み付けている。
「んで、ここでシュウト！」
やっぱりルールを理解していなかったか、遠くへと蹴飛ばしてしまった。
ボールがなくなってしまったことで勝負が中断され、第二沸点に達しかけていた里子の温度は、急速に冷めることになった。
二人は、しばし見つめ合った。
奈々はいつもどおりにこにこした顔で。里子は、怒ったような、気まずいような、そんな複雑な表情で。
「さとちん、すっごい真剣だなあ。王子いってた。好きで楽しいと真剣になるって。さとちん、フトサル、好きなんだね」
「まあね」
里子は、小さく深呼吸した。二回。
「……あの、ごめん」
謝った。

「にゃにがごめんなの？」
にこにこ顔の奈々。
「なんでもない。だいたい、そもそもなんだよ、さとちんて。先輩に向かって」
自分も王子先輩にぞんざいな口のききかたしているくせに。
「まあまあ、大人気ないぞ」
梶尾花香がいつの間にか里子の後ろに立っていて、肩を揉んできた。
「大人気ないのがあたしのキャラだもん」
などと軽口を叩く里子だが、その鋭い眼光は別の方向、窓の方へと向けられていた。
窓から、二人の男がこっそりとこちらを覗いている。
「誰だ、あいつら」
里子は小声を出して、花香に目配せをした。
花香も、身体の向きはそのままで、目だけを動かして窓の方を見た。
「分からない。多分、この前、王子先輩がいっていた、怪しい人達だよ」
「だよね。隠れて探ってるようで、気持ち悪いな」
里子は、男たちのいる窓に近い出入口に向かって、ゆっくりと歩き出した。
それに気付いたのか、男たちの姿がふっと消えた。
里子は持ち前の瞬発力を発揮し、全速力で走った。
出入口から通路へと飛び出した。
しかし、すでに通路には、誰もいなかった。
いや……一人、いる。
「お、里子じゃん。いやあ、参った参った。この間、英語で最低点を取ったせいで居残り勉強させられてさあ」
山野裕子だ。今日も相変わらず遅刻の弁明をしている。
「王子先輩、あたし、見ましたよ」

里子はぎらりとした鋭い眼光を裕子にぶつけた。
「え？　見てた？　いや、ちがうんだ！　あれは、ズボンだけのつもりだったんだけど」
「なにいってんですか？」
「遠藤孝一のパンツおろしたことじゃないの？」
「バカなことばかりやってんだから！　そうじゃなくて、前に先輩のいっていた怪しい二人組の男を見たっていってんですよ」

3

「ねえ、知ってます？　回転寿司の穴子って本当は穴子じゃないんですよ」
全員車座になっての戦術ミーティング真っ最中。ちょっと空気の緩んで来た時間帯に、一年生の深山ほのかが唐突にそんな話題を持ち出してきた。
「え？　穴子じゃなかったらなんなのさ」
三年生の篠亜由美が、ほのかの話に乗っかってきた。
「百円寿司みたいな安いのは、大抵の場合がアンギャーだかアンゴラだか怪獣みたいな名前の海蛇なんだって。穴子じゃないのに何故か日本名ではなんとかアナゴってついていて、だからアナゴといっていても間違いじゃあなくて、だからお寿司屋さんもアナゴとして出すんですって。本当は海蛇というよりウナギの仲間らしいんですけど、その姿が、昨日テレビでやっていて、まあグロテスクなこと。お父さんが出張から帰って来て、たまたま穴子寿司買って来てくれたんですけど、多分本物の穴子に間違いないというのに、あたし鳥肌立っちゃって、吐き気もしてきて、食べられませんでした。テレビで真実を知るまでは、回転寿司って、大好きな穴子があんなに安くて人生の幸せっ、て思っていたのに……」
「海蛇だろうがアンギラスだろうが安くて美味いなら食えばいいじゃん。いままで気付いてなかったんだろ。じゃ、美味しいんだよ」
なにをくだらないことといってんだ、という顔の山野裕子。

彼女なら海蛇どころか怪獣も食べてしまいそうだが。
「でも、本当に凄く気持ち悪いんだから。顔がぐちょぐちょーっとしててね、ぐおーっと、うぎゃーって感じで」
伝わりようもない妙な擬音の連発で力説する。
「王子に説明したって無駄だよ。蝉が鳴いてるの聞いてて、食べたら美味いのかな、なんていってたことあるんだから」
晶が、ぼそりといった。
「うわ、王子先輩変態！」
「うるさいな。食べたわけじゃないし。だいたい、穴子が安くて人生の幸せなんて、どんだけ小さいんだよ」
「じゃあ、先輩の幸せとか夢ってなんですか？」
ほのかは唇を尖らせた。
「お嫁さん」
なんの迷いもなく即答する裕子。
それを聞いたほのかは、ぷっと吹き出した。
「素敵なお嫁さんになることの、なにがおかしいんだよ。純白のドレス着てさ、乙女の夢だろうが！　普通だろうが！」
「だってえ」
返答に困りつつも、ほのかは口を隠して、笑いを抑えようとするのに必死だ。
「そもそも『素敵な』にはなれないでしょ。夢見るのは自由だけど」
生山里子が、的確な横槍をぶすりと裕子の心臓に突き刺して来た。
「くそー。好き勝手抜かしやがって。ならばお前の幸せはなんじゃい！」
人差し指を、ぴっと里子に突き付ける。
「あたしは、そうだなあ。知ってると思うけど、自分をステップアップさせて誰かを抜いて行くこと。ステップアップを実感している時が、幸せだな。だから、いまは王子先輩以上の部長になることが目標。まあ、部長になりさえすれば『王子先輩以上の』ってのは勝手にくっついて来ますけど。ハナは？」

隣の、梶尾花香に尋ねた。
「なにが？」
「だから、なにが幸せかって話だよ」
里子と花香は中学に入った時からの親友だというのに、こうした話を一度もしたことがなかった。良い機会だとばかり、里子は尋ねた。
花香は、ちょっと考えた後、おもむろに口を開いた。
「中学生の頃ね、駅のホームで向こうから来る男の人を避けようとしてお互い同じ方向に動いちゃって、ぶつかりそうになって、そしたらその人がチッって舌打ちしてきたのね。それだけなんだけど、でも、なんか、知らない人にいきなり怒鳴られて罵倒されたかのような、ショックというか、胸がどきどきする感じで、落ち込んだ気持ちになっちゃって。アパート帰ってもまだおさまらなくて。頭も痛くなってきちゃって。そしたら、お隣りの夫婦、仲が悪いんだけど、その日も、壁の向こうからいつものように激しい夫婦喧嘩が聞こえて来て、物を投げ合う音が聞こえて来て。それであたし、ああ、あんな程度のことで辛い気持ちになって落ち込んでて、それって、幸せだからなんだな。って思った。そんだけです」
「優等生な発言しやがって」
里子は花香の背中をひっぱたいた。
「そんなんじゃないって。……でも、里子がまたなんていうか分からないけど、一番の幸せは、可愛い弟たちがいるってことかな」
花香には啓太（けいた）、亮太（りょうた）、健（たける）という、小学中学年から幼稚園までの三人の弟たちがいる。父親はおらず、母親と安アパートに五人暮らしだ。母親は仕事に忙しいため、子供たちの世話はすべて花香がやっている。だから花香にとって弟たちは、我が子のようでもあり、とても可愛いのだ。
「さすがに、喉枯れちゃうからもうなんにもいわない」
と、里子。いっているようなものだが。
「あたしは、仲のよさそうなカップルを見ているのが幸せ～」

星田育美が割り込んできた。ごつい顔に、ちょっぴり乙女な笑みを浮かべている。
「アゴ、柄にもないことといってっと顎が加熱するぞ。幸せっつーか、単に羨ましくて妬ましいだけじゃないの？」
育美の乙女心を完全否定するような台詞を、ずけずけという裕子のこの無神経さ。
「全然羨ましくなんかないですよ。あたしなんかが、普通のカップルみたくしててもきっと傍から見ておかしいだけですもの。だから、こうなりたいなんて興味もわかない。誰かと付き合いたいなんて、これっぽっちも思わない。もしあたしがもっと小さくて可愛かったら別でしょうけど、現実としてこんなバカでかくて顎も異様に長い顔してますからね。そんなことより、他人の幸せを見ているだけのほうが自分も幸せです」
「なんか歪んでいるような純真なような。あたしなんかは、幸せそうなカップル見てるとぶち壊したくなるけどなあ。あたし今いないのに畜生って」
裕子は腕組みをした。
「今もなにも、いたことないだろ」
晶がさりげなく突っ込みを入れる。猛烈な速度でボールが飛んできたが、楽々キャッチ。ゴレイロを舐めてもらっちゃ困る。
真砂茂美の隣に座っていた篠亜由美は、勢いよく立ち上がったかと思うと、茂美の前に立って、裕子からの視界を塞いだ。
「茂美の恋は、壊させやしないよ」
恋路を守る紅の騎士、その名は篠亜由美。
「別に、もう興味ないし」
裕子は頭をかいた。
そもそも何君だっけ、茂美の彼氏。
どんな声かも忘れてしまうくらい究極に無口なあの茂美になんと彼氏が、と最初聞いたときはなんだかショックだったけど。自分に彼氏が出来なかろうとも茂美がいるから大丈夫だ、と思っていたの

に、その最後の塞を崩されたようで。でも、もうどうでもいい。
「あたしは、美味しいカレーのお店を見つけた時かなあ」
佐奈夏樹。星田育美の隣にいたことから、なんとなく、彼女が語る番になったのだ。エスニックな雰囲気の顔立ちを突っ込んで欲しくて自虐ネタに走ったつもりなのだが、誰も突っ込んでくれなかった。
「タモリは？」
夏樹は、隣の岸田森に振った。
「なにタモリって？　勝手にあだ名つけないでよ！　そうだな、あたしは、買い物が安かった時ですかねえ」
「ほんっと、感覚がおばさんだな」
裕子は、声には出さずに、そういう口の動きをした。
「買い物っていっても下北の古着なんかですよ！　王子先輩、勝手にスーパーでお肉が特売とか想像したでしょ」
「読唇術が使えるのかお前は！　そりゃスーパーの買い物だと思うだろ。お一人一点の品物を何度もレジに並び直したり、って思うだろ。だって森だもん。……はい、じゃあ次、葉月」
いつの間に強制制度になっていたのか。九頭葉月は、いきなり自分に振られて、びっくりして顔を上げた。
「特には……。一日、何事もなく過ぎた日は幸せです。……この間、お店番していて、お客さんからここのお菓子美味しいっていって貰えた時、とても嬉しかった」
「ささやかだなあ。お父さんはきっと、駄洒落が大受けした時が幸せ、ってなって欲しいと思ってるぞ」
「あたしにただ友達が出来るだけでなく、王子先輩みたいに明るく元気になって欲しいんですよ。それがお父さんにとって幸せなんです」
だから、今のお父さんは不幸なんです。そう思ったかは分からないが、とにかく葉月はちょっと沈んだ表情になった。
「大丈夫、おじさん今でも充分に幸せそうだから」

裕子のフォローも虚しく、葉月はまた膝に顔を埋めてしまった。
「お姉ちゃんがねえ」
ちょっと淋しくなりかけた場の空気を、武田直子の抜けるような元気な声が吹き飛ばした。
「またあたしのことかよ」
武田晶が、うんざりした表情を浮かべている。普段の顔と比べて、ほんの微かな表情筋の変化でしかないが。
「お姉ちゃんが小六の頃、クラスメートから暗いといわれたのを気にしていたらしく、漫才やろうと誘われたことがあるんです」
「そんな古い話。だいたいそれ、いまみんなで話していることと関係ないじゃんか」
武田晶が、また表情筋を微かに変化させた。
「晶先輩が、漫才？」
食いついて来たのは、やはりというべきか梨本咲だ。
「はい」
直子は頷いた。
ぷっと吹き出す咲の脇腹を、晶は肘で小突いた。咲は全く構う様子もなく、
「どうせ小学生なんかじゃさあ、それは何とかやがな、ってレベルの低い駄洒落とツッコミひたすら繰り返すだけだろ。こってこての言葉遣いで、しかもなにいってるのかよく分からないような内容で、王子先輩が一人でよくやってるような」
「はい。まったくその通りです」
直子の言葉を聞いて、しょげてしまったのは裕子である。
「晶ごときと、同じレベルになっちまったとは」
「なっちまったじゃなくて、高三のいま現在、小六の頃のあたしと同じレベルなんだろ」
裕子は、ぷんぷんぷーんなどといいながらむくれ顔になった。
直子は続ける。
「とにかく、お姉ちゃんの考えたその漫才、センスが最悪で、さっ

き咲先輩がいっていた通り、いやもうそれ以上で、もう練習が嫌で嫌でたまらなかったけれど、でも、いま考えてみると、とってもぽかぽかとした、幸せな時間だったのかなあ、って。結局、発表することなく終わちゃったんですけどね」
「はあ、うまくまとめやがって。ますますお姉ちゃん、妹のことが可愛くなっちゃうよ。ねー」
裕子は、晶に身体を擦り寄せた。
「まあ……確かに」
晶は小さい声で、珍しく裕子の発言を肯定すると、照れ隠しなのか自分の膝小僧をこつこつと叩いている。
「晶はさあ、台所の粘着シートにゴキブリがかかっていると幸せだってさ」
「思ったことないよ、そんなこと！」
勝手に人の幸せを決めるな、バカ王子。
でも、自分の幸せってなんだろう。
フットサルは好きだけど、でも、それだけで人生幸せってわけじゃあないし。
ナオと違って友達もいないし。
王子ほどじゃないけど勉強も出来ないし、だから、将来仕事で成功するなんて無理だろうし。
ま、十代のうちにそんなこと気にしてもしょうがないか。
「あたしはさあ」
篠亜由美が口を開いた。
「はい、分かった分かった。奈々は？」
裕子は強制キャンセルで、次へ進めた。どうせこのまま喋らせたって、茂美のことを延々話すだけなんだから。
「にゃにが？」
もやもや憮然とした表情の亜由美の隣で、奈々は楽しげな、でもきょとんとしたような表情を浮かべている。
「奈々は、何が幸せ？」

「シャーセって、嬉しいこと？」
「そうそう。どうなったら嬉しい？」
「いっぱいあるよ。カレーのお肉にちょっとぶよっとしたとこあると、やったーって思う。歯磨きした後、お母さんに見て貰って磨き残しがなかった時。パイナップルの缶をちょっとずつちょっとずつ開けて、ほとんどギザギザにならなかった時。筆箱に指を入れて、黄色い鉛筆取れって思って本当に黄色い鉛筆取った時。あとね、ここでこんなふうに喋ってる時」
「なんでもかんでも幸せじゃんか。じゃ、逆に、幸せじゃないことって？」
「ない」
奈々はきっぱりといい切った。
「一つも？」
「あるかも知えないけど、でも、そうでないことがあるとしても、こして生きてて嬉しいから、そうでない時に、そうでないって思うわけだから」
不幸を感じるのも幸福の証である、そういうことか。その考え方に、裕子はなんだか心地のよい衝撃を受けた。
「はあ。奈々は、えらいなあ」
裕子に褒められ、奈々は破顔した。
戦術ミーティングの内容をもとに紅白戦をする予定だったのだが、この後も順繰りに幸せトークが続き、気付けばもう部活の終了時間になっていた。
結局、この幸せ勝負に、勝者は存在しなかった。
陳腐な表現をするならば、誰もが勝者であるということ。
だって幸せは、本人が自分に対して決めるものなのだから。

4

山野裕子と武田晶は、セカンドキッチンに来ている。
佐原駅南口の雑居ビルにある、ファーストフード店である。

客のほとんどは、裕子たちと同じく中高生。夕方はいつも混雑しており、賑やかを通り越して非常に騒々しい。
佐原南高校女子フットサル部は、来月に行われるフットサル大会に参加予定。ようやく予選リーグの対戦相手が分かったので、その対策を練ろうということで、二人はここに来ている。
このような騒々しい場所よりも、いくらでも話し合いに適した場所がありそうなものだが（そもそも学校ならお金もかからないのだし）佐原南フットサル部は何故か代々、男子女子問わず、大事な話し合いの場所としてこの店を利用するのが慣習になっている。
女子フットサル部顧問であるゴリ先生が、その対策会議に自分も参加させろといっていたのだが、裕子が「奢ってくれるなら来てもいいよ」というと即答で辞退された。
「少しくらい、スポンサーになってくれてもいいのにねえ」
ぼやく裕子。
「意味不明。なんのスポンサーだよ」
晶がささやかな突っ込みを入れる。
ドアが開き、制服を着た男女が入ってきた。手を繋いでいるところから、カップルであろう。
「あいつらさあ」
裕子は、カップルの方をちらりと見た。
「ん？」
烏龍茶をストローで飲んでいる晶。
「やってんのかな？」
裕子のその言葉に、晶は口に含んだ烏龍茶を全て吹き出してしまった。
激しくむせ込んでいる。
「知らないよ、そんなの！」
なんなんだよ、こいつはいきなり。
晶は、ハンカチを出して、テーブルの上を拭いた。
「茂美もさあ、やっぱりさあ、彼氏とやってんのかなあ。つうか、

うちの部って、経験者どれだけいるんだろ。意外とさ、ほのかみたいの、経験人数多そうだよね。あとさ、カナみたいなのも、経験年齢だけはやたらと早そう。で、それきり興味なくすタイプ」
「だから、知らないって。というか、具体的な名前を出すな！」
「なんだよ、いい子ぶって。ほんとはすっげースケベなくせに！」
「なんで決め付けるんだよ。そんなの、全然興味ないよ」
「ほんとだな」
「まぁ、人並みくらいにしか……」
「ほらみろー。夜な夜な想像してんだろ、男の子のあれのこととかさあ」
「うん。……あ、いや、夜な夜なんて、想像してないよ！　一緒にするな」
「射〇のこととかさあ」
「わーーーー！」
晶は大声を張り上げ、裕子の声を掻き消した。
「なんなんだお前は。アホか！　そんなこと、楽しそうに語るな！
まあ……想像したことないわけじゃ……ないけど」
わたしだって、その、なんだ、一応、年頃の、女子だ。
しかしこいつ、よく恥ずかしげもなく堂々とそんな話が出来るよ。隣のテーブルにも客いるんだぞ。ひょっとして烏龍茶で酔う体質か。それとも、聞いただけで照れるわたしの方がおかしいのだろうか。
というか、わたしが全然そういう経験がないなどと、なんで勝手に決め付けるんだ。まあ、その通りなのだけど。
そもそも、興味もなにも、お前、付いてるだろ。絶対。
一瞬そんな冗談の台詞が脳裏に浮かんだ晶であるが、恥ずかしくてとてもいえなかった。
「晶、今日ここに来た目的を忘れてるよ。びしっとしろ、びしっと」
裕子は手元のノートを開いた。
「どの口がいってんだよ……」
晶は、長いため息をついた。

くっだらない雑談も終了。作戦会議再開だ。
会議の主旨は簡単で、対戦相手の、注目選手の特徴やチームの特徴から、佐原南としてどう挑むのかを考える。それだけだ。
誰に誰を当てるか。どんなフォーメーションにするか。守備的にいくのか攻撃的にいくのか。予想外のことが起きた場合に、どう対処するのか。
本当は、そういう知的な話し合いには衣笠春奈も交えたかったのだが、今日はちょっと用事があるとのことで、部活が終わったら急いで帰宅してしまった。二人で話だけまとめて、後でチェックしてもらえばいいだろう。
どれだけ時間が過ぎたのか分からないが、個人的趣向も交えて二人が熱く討論をしていると、お店に武田直子が入って来た。
「やっぱりここか。あ、お姉ちゃん、ポークスティックフライ残してる。冷えちゃってんじゃん」
と、席に着くや、晶の皿からつまんで食べてしまった。
「それ最後に残しておいたのに！」
「え、そうだったんだ、ごめんね」
「いや……いいんだよ、気にしないで」
晶の脳裏には、先日のシャロン鈴木堂お菓子事件のことが浮かんでいた。
「楽しみにしてたポークスティック食われちゃって、きっとショックでやる気なくして大会はヘマばっかりだな。一発レッドで退場すんじゃないの？」
裕子がからかう。
「どんだけいやしんぼだよ。そんなことくらいでやる気なくすわけないだろ。バカ王子」
「あ、そうだナオ、おしっこちびりの山田君の妹、最近どう？」
裕子は話題を変えた。
何日か前、同じ中学出身の山田君と、高校の廊下でばったり出くわして話をしたことがあって、ちょっと彼の妹のことが気になって

いたのだ。
「はい。この間、そのお兄さんのほうを見かけたんですが、王子先輩のいう通り、なんか気の弱そうな普通の人ですねえ。山田さん、お兄さんが学校では強い、というか凄い不良だと本当に思っていたみたいで、その反動なのかお兄さん並みに小さくなっちゃいましたよ。でもやっぱり、あたしや奈々が近くを通るとじろりと睨んでくるので、不安はありますけどね。そうだ、あたしもなんか食べよーっと。お姉ちゃんにも、さっきの分、一口あげるよ」
直子は席を立ち、行列の出来ている注文カウンターへと小走りだ。
晶は手にしていた烏龍茶の紙コップを置くと、裕子に視線を向けた。
「その、なんとかちびりの山田君ってさあ」
「おしっこちびり！」
「でかい声でいうなよバカ！　わざと伏せてんのに気づけ。恥ずかしいな！」
「恥ずかしいのはジャガイモみたいな顔してるくせにムッツリ根暗な顔で自分をクールと思ってカッコつけてるお前のほうだ。そういう顔はせめて愛嬌なきゃあ、かわいくないんだよ」
「カッコなんかつけてないし、かわいいなんて一度も思われたいと思ったことない。あたしの顔のことなんか、どうでもいいだろ」
「はいはい。ほんっとどうでもいい。で、山田がなんだよ」
思われたいと思ったことなかったら妹の服着て鏡見て一日過ごしたりするかよ。裕子はそう思ったが、さすがにそこまでいうのはかわいそうなので、やめておいた。ジャガイモにも五分の魂だ。
「中学の頃は、本当に不良生徒だったんだよね？」
晶にとって本来どうでもいい話題だが、妹が被害にあっているので関心を持たざるをえない。
「ポーズを取っていただけ。虚言癖があってさ、逮捕されたことがあるだの、ヤクザがバックに付いてるだの、女を三百人食っただの。そしたら本当の不良グループに目をつけられちゃって、学校の裏に

呼び出されて土下座して平謝りしているところをあたしが助けてやったんだけど、それからキャラが変わってしまったみたいで」
「え、ちょっと、不良グループから助けたって簡単にいうけど、どんな助け方したんだよ」
「それは企業秘密」
「なんだそりゃ」
吹けば飛ぶ零細企業には違いないだろうけど、それにしても不気味な企業だな。

5

薄暗くて狭い空間に、汗とカビの臭いが充満している。
ここは、女子フットサル部の部室である。
十年ほど前までは男子サッカー部の部室だったらしいので、その頃の汗の臭いなのかも知れない。
若干香水の香りも漂っている。代々女子たちが頑張って対策をしてきた証であるが、しかし汗臭さを中和するどころか絡み合って妙な香りになってしまっている。
端にはロッカー。真ん中には小さな机が二つ。それと幾つかの椅子が散乱している。
小さな窓から差し込む淡い陽光。その照らす道筋に、舞い踊る大量の埃が浮かび上がって見えている。
山野裕子は、机の上に乗っかってあぐらをかいている。
椅子は、ところどころ皮が破れてスポンジが剥き出してしまっており、座り心地が悪いのだ。
でも裕子は、その座り心地の悪い椅子に、後輩の村上史子を平気で座らせているのだが。
裕子と違って育ちがいいのか、酷い椅子であろうとも非常にが姿勢が良い。
彼女は、西村奈々の様々なことに対し、苦情をいいにきたのだ。
「せっかく試合内容に惚れて、この高校、この部に入ったというの

に、あんなたびたび邪魔されるんじゃ練習もまともに出来ないですよ。あたしたち一年生でまだまだだから、余計に頑張らなきゃならないのに。……人間として、酷いことといっているのは、良く分かってますけど」

史子は新入部員挨拶でもいっていたが、中学生時代に近所の体育館で行なわれた大会で佐原南の試合を見て、このフットサル部に入りたくて、この高校を受験したのである。部への思い入れは、新入部員の中では一番強い。

「いやまあ、酷いこととも思わないけどね」

裕子は鼻の頭を人差し指でかいた。

「あたしね、佐原南の試合を見て入りたいと思った、っていいましたけど、正直にいうと……王子先輩の姿を見て、その、惚れたというか」

意を決して顔を赤らめながらも口にしたはいいが、途中でためらってしどろもどろになってしまった。

「そんな趣味は……」

机から降りた裕子は、村上史子の前に立つと彼女の額にフットサル四号球を押し当てた。

「ねえ！」

そのボールに思い切り頭突きをかました。どう、と鈍い音がして、史子はのけぞった。

「あいた！　分かってますよ、そんなこと。かっこいいなって、憧れたってことですよ。先輩、いまと違って髪も短くて男の子みたいだったし。佐原南に入学したくなったものの、でもあの人がもし三年生だったら、あたしと入れ違いだよな、って思いつつも一か八かで受験して、運良くせっかく一緒になったというのに、王子先輩は奈々にかかりっきりで、ろくに自分の練習が出来てないじゃないですか」

「ちょっと、なにいってんのか、よく分からないんだけど、あたしのこと気遣ってくれてんの？」

「憧れの先輩が、どんどんレベル落ちていって、そうでなくなっちゃうのが嫌なんですよ」
「あたしは大丈夫。こうしている間にも、どんどんパワーアップしているんだから。史子は、自分のことだけ考えていればいい。奈々のことは、みんなから不満が出ないようにちゃんと考えるよ」
「お願いします。それじゃ、あたしは練習に戻りますから」
村上史子は立ち上がり、裕子に一礼した。
「服にサイン書いてやろか？」
「だから、そういうのと違うんですってば！」
史子は顔を赤らめた。本当は、違っていないのかも知れない。
ノブを掴み、部室のドアを開ける。
と、そこには辻美香菜が立っていた。
史子と入れ違いに、美香菜が部室へと入って来た。
「あたしもさ、部長にいいたいことがあって」
「奈々のことでしょ」
史子の問いに、美香菜は頷いた。
史子は出ていった。
美香菜は、裕子があぐらをかいている机に、自分もお尻を乗せた。古い机は、二人の重みでぎしぎしと悲鳴を上げた。
「なんだよ、デン。奈々のことって」
デンというのは辻美香菜のあだ名である。
「あのですね」
美香菜が話したのは、奈々の練習態度、後片付けについてなど。まあ、村上史子と同じだ。史子と違って、裕子個人でなく部全体を考えてのことだが。
「……それとですね、この間、用具室に行ったら、またバレーボールがたくさん転がっていて。カゴへ近付いたら、中から奈々ちゃんが、ばーってボール吹き上げながら飛び出してきて。本人は楽しいからやってるだけなんでしょうけど、あたしもう血の気が引いちゃって。じゃじゃーん、じゃないよ！　って怒っちゃいました。すぐ

に奈々ちゃんをどかして、ボールを片付けたんですよ」
「そうなんだ。ありがとうね」
「こういっては奈々ちゃんに申し訳ない気もするんですけど、あの子、ここにいるには無理があるんじゃないでしょうか。練習でも、いうことは聞かないし、ルールは覚えてくれないし」
「でも、だいぶ覚えてきたろ？」
「それは、確かにそうですけど。でも相変わらず酷いですよ」
「練習でのことは史子にもいわれた。考えとくよ。用具のことは、奈々だけ免除にはしたくないから、あたしか晶が一緒に行動するようにするから。あとね、あたしは、奈々がここにいるべきじゃないとは思っていない」
「えー、最後のそれ、ズルイですよ。なんだか、あたしが悪者みたいじゃないですか。あたしだって、色々考えて発言しているのに。奈々ちゃんのこと、嫌いじゃないんですよ」
「いやいや、デンのそういう気持ちは分かるんだよ。全然間違ってないし、悪者でもなんでもない。でもさ、部活って部活のためだけの部活じゃないじゃん。こういう色々な経験が奈々にとってだけでなく、みんなにとっても大切なものになると思うな」
偉そうなことを、とりあえずいってみたけど、自分もバスケでのプレーを見て興味でフットサルやらせたいと思っただけなんだよな。裕子は心の中で苦笑した。
「王子、そろそろ紅白戦やるぞ！　って、お姉ちゃんからの伝言です」
ドアの向こうから、武田直子の声が聞こえて来た。
低い声で姉の真似をしているが、全然似ていない。
晶の声って別に低くないけど、物真似するとみんな低い声出すんだよな。根暗っぽさが出るから。
「コネやらなにやら色気やら色々と駆使して、予選リーグ対戦相手のデータを集めた。一日一回づつ、相手との対戦を考えた練習試合

していくから。身体に叩き込むように」
裕子は部員全員を自分の前に集め、向き合っている。
手にしていたノートを開いた。
裕子が部長ノートと呼んでいる、部長としての様々なことを書き込んだメモ帳だ。暗号文でもなんでもないのだが、字があまりに下手で汚く、書き込んだ本人以外の誰も読むことが出来ず、まさに部長ノートの名に相応しい、情報保護時代に相応しい、セキュリティ対策万全な代物である。
「まず今日は、どうしようかな、白浜高校、我孫子東高校、柏船堀女子。……じゃ、柏船堀で行くか。私立柏船堀女子高等学校、通称柏女。ここが、一番勝つの簡単そう。とかいってると足元すくわれるか。創設三年目なんだけど、まだまだ弱小。まだまだもなにも、この辺に住んでるフットサルやりたいって子はお隣の我孫子東に行っちゃうらしいから。特に柏女と我孫子東って学力レベルもアクセスもそんな変わらないらしいからね、私立と公立だけど。なんかね、弱小は弱小なんだけど、ムクドリだかなんだかいうのが五月になってから遅れて入部したらしくて、これが一年生だというのに相当に上手らしい。予選はリーグ形式だけどたった三試合しかないから、絶対に取りこぼせない相手。それには、このムクドリをどう抑えるかが大事になってくる。こいつの個人技で運悪く先制でもされたら、死に物狂いで守り切られてしまうかも知れないし」
「すみません先輩、それもしかして、ムクドリじゃなくて、椋島、じゃないですか？」
久慈要が右手を上げ、尋ねた。
「ああ、そうかも。そんな気がしてきた。ムクは絶対、いや多分間違いないんだけど」
「そうですか」
「なに、有名人？」
「いえ。ただなんとなく」
久慈要の表情が微妙に変化していた。もともと陽気なほうではな

いが、なんだか胸を締め付けられているような、どんよりと雲のかかったような、そんな表情になっていた。

6

大声を上げて走り回る男子たち。
アイドルの話題や、おしゃれなお店、憧れの先輩などの話に花を咲かせている女子たち。
もちろん寡黙なまま輪に加わらない生徒もいるが、全体として、教室はそんな喧騒の中に包まれている。
四時限を目前とした、休み時間中である。
後ろのドアから、武田直子が入って来た。中学からの友達である隣のクラスの田中陽子に、貸していたノートを返して貰い、戻ってきたところだ。
山田秀美と仲間たちが群がって喋っていたが、直子が近付いて来るのに気が付くと、みないきなり口を閉ざし、静かになった。
直子は、ちょっと身を縮こまらせて、彼女らの横を通り過ぎる。
だん、と山田秀美は机を叩いた。
直子は、びくりと肩を震わせた。
そーっと、通り過ぎた。
そんなに根に持たなくてもいいのになあ。直子は心の中で文句をいう。
自席に戻り、返してもらったノートを机の下にしまうと、すぐに立ち上がり、西村奈々の席へと向かった。
この高校に入り、このクラスになり、もう三ヶ月。教室内には、大小様々な仲良しグループが出来ている。
奈々にも、好意的に接してくれる何人かのクラスメートが出来た。彼女らは他の子とも交流があるので、常にべったりというわけではないが、それでもよく休み時間などに奈々を囲んで話をしている。
ちょうどいまもそうだ。
「なあに、なんの話してんの？」

直子は輪の中に入った。
「ＨＲの宿題のこと。あたし、すっかり忘れてて、さっきの英語の時間に慌てて書いたから、支離滅裂な感じになっちゃってさあ」
高田佐智子が答えた。
「ね、オシリメツレツってなに？」
そういうと、奈々は首を傾げながら、どういう思考回路によるものか餌をたっぷり詰め込んだハムスターのようにほっぺたを膨らませた。
「オシリじゃない。シリメツレツ。オはつかない。それだけで意味全く違う。支離滅裂ってのは、目茶苦茶ってこと」
高田佐智子が答えた。目茶苦茶の意味は通じるだろうか。
「それあたしだあ。バカだから」
と、奈々は大声で笑い出した。
通じたようだ。
「思う通り正直に書けばいいだけなんだから、目茶苦茶もなにもないって」
フォローする直子。もともと奈々は、なにも気にしていないというのに。
チャイムが鳴った。
四時限目の開始時刻だ。
前のドアから、クラス担任の森岡先生が入って来た。
ＨＲの時間が始まった。
四月からこれまでは、この時間を用いて、主に学校生活についての話し合いをしてきたのだが、本日と来週は特別授業で、内容は「夢を語る」である。
宿題として書かせた、夢について語った作文を、一人一人に読んで貰うのだ。
廊下側一番前の席、佐藤吉弘からスタートだ。
「僕の夢。一年四組、佐藤吉弘。僕の夢は、ラーメン屋さんになることです。なぜなら僕は、ラーメンを食べることが大好きだからで

す。朝からラーメンでも平気です」
どっと笑いが起きた。
世界に自分のラーメンを広めたい、生きてるうちに宇宙旅行が出来る時代が来たならば宇宙で最初のラーメン屋さんになりたい、と壮大な夢を語り終えると、次は後ろの席の小松崎直也の番になった。
一人、また一人、順々に夢を語っていく。
山田秀美の番になった。
しかし、彼女は宿題をやってきていなかった。
それどころか、来週も続きをやるからそれまでに書いてこいという先生の命令も拒否。「夢ないから」、というのが理由だそうだ。
「夢がないことはないだろう」「趣味はないのか」「将来どうするつもりなんだ」など、作文を読むかわりに、先生からの質問に答えることだけで彼女の番は終ってしまった。答えるもなにも「別に」と「ない」しか口にしなかったが。
さらに順番が進んで、武田直子の番が来た。
立ち上がり、両手に原稿用紙を広げ、読みはじめた。
「わたしの夢。一年四組。武田直子。夢を語るというと、なりたい職業をいうことが多いと思うけれど、わたしには、特になりたい職業というのはない。大人になって、どんな職につくか分からないけど、または社会に出る前に結婚してしまって職にはつかないかも知れないけど、どんな場合であれ必ずなにかしらの出会いというものはあるわけで、友達やら、なにかしらの付き合いは必ずあるわけで、そうして、人生で付き合っていくことになる人たちとの出会いを大切に、一年、一日、一分、一秒を生きていられたらいいと思う。そんな一生を送りたいということが、わたしの夢です。なんか、他の人よりずっと短くなってしまいましたけど、以上です」
直子は腰を下ろした。
さらに順番は進み、そして、西村奈々の番になった。
奈々は原稿用紙を広げた。
「わたしの夢！　一年四組、にしむあなな！」

隣の教室にも聞こえそうな、大きな声を出した。
「立って読みなさい」
先生の注意を受け、奈々は立ち上がった。
「どこまで読んだっけ。そうだ、名前を読んだとこだ。ええと、夢についてということなので、わたしはさいしょ、夜みる夢のことかと思い、なんてかいたらいいのか分からず、お母さんに聞いちゃいました。お母さんは、その学校の宿題の夢というのは夜の夢のことじゃないよといいました。わたしは、じゃあどういう夢なのさと聞きました。ぷんぷーんといいました。昼みる夢のことなのか朝みる夢のことなのか分からなかったからです。お母さんはいうのです。奈々がこうなれたらいいなと思って頑張りたくなるゆうな、それが夢だよと。それが夢なら夜みていたのはなんなのかと思いましたが、むずかしいこと考えるのやめました。むずかしいこと考えて気お失ってしまったこともあるからです。頭の中の、なんとかちゅうすうやがおかしいんだそうです。だから、なんになりたいかだけ考えるのが簡単なのです。でも、わたしは、なんになりたいというのがありません。バカだからだと思います。普通のことすゆのもできなくて変なことぶっかりしてしまうので、なにになりたいというのはわたしに関係ないことなのです。お母さんにそう話したら、そんなことゆってはいけないといわれました。なにになりたいか考えてごらんといわれました。でも考えるしつようないです。なんにもあるわけないです。施設の卒業生たちみたく、きっと工場で働くだけです。そう思いましたが、でもそおゆうとお母さんはとっても悲しそうな顔をするに決まっているので、ゆいませんでした。なにになりたいかだけしか夢はないの、わたひは聞きました。お母さんは、それじゃあ、なにが幸せか考えてみなさいといいました。幸せっていう言葉はむずかしいことなんですけど、この前、ブトサル部で幸せの話をしていて、どうなったら嬉しいことなのか、ということなんだと知りました。なら、夢というのは、わたしがどうなら嬉しいかということなんだです。わたしは思いました。ブトサルでわたしがいっ

たのは、『カレーのお肉にちょっとぶよっとしたとこあると、やったーって思う。歯磨きした後、お母さんに見て貰って磨き残しがなかった時。パイナップルの缶をちょっとずつちょっとずつ開けて、ほとんどギザギザにならなかった時。筆箱に指を入れて、黄色い鉛筆取れって思って本当に黄色い鉛筆取った時。あとね、ここでこんなふうに喋ってる時』。とゆうことなので、カレーにぶよっと肉入ってて欲しいのが夢です、お母さんに迷惑かけず歯磨きするの夢です、ブトサルでしゃべったりボル蹴ったりしていたいのも夢です。こうなりたいというのが夢とゆうなら、わたしの夢はありません。全部がもう、そうなっているからです。全部がシャーセで、だからわたしは嬉しいからです。こわでおしまりです」

いつもニコニコとしている奈々であるが、読み終えた後、普段以上に唇の両端をつり上げて、実に満足気な、にんまりとした表情を作った。こんなに一杯の文章を自分で書いて、自分で読み上げたのなんて、初めてだったから。

廊下の窓が突然、勢いよく開いた。

「奈々、いい内容じゃん。凄い凄い」

拍手の音。山野裕子だ。体操着姿。体育の帰りにたまたま通りかかり、奈々の声が聞こえてきたのでつい耳を傾けて聞き入ってしまったのだ。

「山野、お前三年生だろ、一年生の授業に割り込んでくるなよ」

森岡先生は、去年は裕子の担任だったので、よく知った仲なのだ。

「先生、人類にね、一年も三年もないんですよ」

裕子は立てた人差し指を左右に振った。

「というかお前、生涯一年生だよな。小学生の」

どっと笑いが起きた。

「笑うな一年ども！」

裕子は顔を真っ赤にして声を裏返らせて叫ぶと、ぴしゃりと窓を閉めた。結局のところ、人類には一年も三年もあるようである。

ほどなくして、授業終了を告げるチャイムが鳴った。

第五章　雨ざーざー

1

「奈々、ふにゃふにゃしないの！」
武田晶の怒声が飛ぶ。
「じゃあさじゃあさカチコチ走りゃいいのかな」
西村奈々は、ふにゃふにゃとふざけたような走り方を、固い動きでやり始めた。
佐原南高校女子フットサル部の練習風景である。まだ開始したばかりで、ウオーミングアップで体育館の中を壁沿いにジョギングしているところだ。
普段は、ジョギングだけは屋外、学校を出て公道を走るのだが、今日は雨天のため室内だ。おそらく明日も。
季節はすっかり梅雨である。週間天気予報もそれにふさわしく、しばらく傘マークが続いている。
「あたし梅雨きらーい」
梶尾花香が唐突にぼやき始めた。副部長様の雷を浴びないようにジョギングの姿勢自体はしっかりととっているが、顔だけみると、見るからに不快そうなちょっとだらけた表情だ。
「そう？　あたしは嫌いじゃあないな。相手をイラつかせるには最適だし」
花香と並走する生山里子。
「そんなこといって、いつも自分が相手にイライラさせられているくせに」
「いつあたしがイライラさせられたよ！」
「いま」
「……」
二人は顔を見合わせ、笑った。
「でもまあ、室内競技でよかった。こんな天気の時はさ」

「そうだね」
里子は頷いた。
ほどなくしてジョギングは終了、続いてストレッチだ。
しっかりと身体を中から温めて、筋肉をほぐすと、いよいよボールを使った練習の開始だ。
全体の指揮をとっているのは、武田晶。
本来は、部長である山野裕子の役割なのだが、今日はというべきか今日もというべきか、おそらくこれからもというべきか、とにかくこの時間にまだ来ていないのだから副部長がやるしかない。なんでも今日は教室に残されて、忘れてきた宿題をやらされているらしい。明日はテストの点数で呼び出されるのか、はたまた生活態度で小言を受けるのか。
「グラビティボンバぁ」
「ギャラクティカパンチぃ。おりゃあ」
佐奈夏樹と辻美香菜が、小突き合っている。爆弾戦士ゲキの必殺技の名前だ。入部から数ヶ月しか経っていないというのに、裕子イズムのこの浸透ぶり。本人来てないってのに。晶はため息をついた。
「夏樹、デン、ふざけてないでちゃんとやりな！」
「はいっ！　すんません！」
佐奈夏樹は背筋をぴんと伸ばし、謝った。演技でもとりあえずしっかり謝っておけばあのジャガイモ顔はなにもいってこないから、という某先輩からの入れ知恵だ。
「いたっ！」
鋭い悲鳴の声が上がった。久慈要の顔面に、至近距離からのボールが直撃したのだ。
「大丈夫？　ごめんね」
頭を下げて謝る九頭葉月。別に彼女が当てたわけではないのだが。
「はい。大丈夫です」
久慈要は、ほっぺたをさすった。ちょっと赤くなっている。
「ごめんねカナちん」

謝る西村奈々。彼女が、張本人である。
「気にしないで。なんでもないから」
久慈要は反省した。うっかり「もう少し強く」といってしまったことを。そのいいかただと、奈々は強く蹴ればいいのか弱く蹴ればいいのかが分からない。結果、本人に気持ちの良い方を選ぶ。つまり全力で、強く蹴ってしまう。
それが久慈要の顔面を直撃したというわけだ。
「奈々、分からなかったら弱く蹴って。弱すぎて相手に届かなくても、自分で追いかけてもう一度弱く蹴ればいいんだから。何回でも。試しに、やってみようか」
九頭葉月が、そう提案を出し、奈々と、弱くボールを蹴る練習を始めた。
ぱっと見それはドリブルとしか思えないのだが、奈々にとっては弱いパスなのだ。
「ぱすぱすぱすぱす」
と、楽しげにボールを追う奈々。
久慈要は、あらためて葉月先輩に感心した。
自分も短気ではないものの、それほど根気がある方ではない。だが葉月はとにかく根気があるし、自分の感情で怒ることは絶対にない。それに、これ以上の見本はないというくらいに、練習態度はとても真面目だ。技術力は他の部員と比較して決して高いわけではないが、周囲を活かす、周囲に溶け込むという能力では一番かも知れない。
久慈要が以前に所属していたクラブでは、自己を主張することばかり教わってきたが、この部に入って、自己主張しないことでチームに貢献する選手もいるのだということを知った。自分自身が自己主張がとにかく苦手であったため、葉月のそういう点を発見した時には、なんともいえない安心感を得て嬉しくなったものである。
「奈々、危ない！」
晶の叫び声。

天井からボールが落ちてくる。ゴレイロ練習で投げたボールがすっぽ抜けたか、はたまた蹴り損ねたのか、高く遠く飛ばしてしまったようだ。
久慈要は、西村奈々を守るようにボールの軌道上に身体を入れると、胸でトラップ、落ちたところを足の甲で一度浮かすと、逆の足で強く蹴った。
孤を描いて、来た時と同じような弾道で戻っていくボール。ゴレイロ練習している永田三水が両腕を上げてキャッチした。
「うお、すっげー」
三水の隣で、梨本咲が感嘆の声を上げた。
久慈要が蹴ってから、三水はボールを受けるまでその場を寸分も動いていない。もしも狙い通りに三水へと飛ばしたのであれば、久慈要のキック精度は恐ろしいほどに質が高いということになる。
「すっげーじゃないですよ。そもそも、あんなとこへボール蹴っ飛ばさないでくださいよ、咲先輩。コントロールミスどこの話じゃないですよ」
などといいながら、三水はなんとなくリフティングを始めていた。足の甲で右、左、右、と落とさず上手に蹴り上げている。
「いいんだよ。ゴレイロなんて、要は失点しなきゃいいんだから。手を使っていいんだし」
と、三水にというよりも、自分の胸へと、いい聞かせた。
しかし自己暗示の効果などは完全皆無。目の前で、こんなものを見せられては。
なんでこいつ、暇さえあればリフティングすんだよ。ゴレイロのくせに。
咲は、ちょっとイライラしてきた。
ゴレイロだって足は使うし、前線へ攻め上がることだってあるのだから、足元の技術が上手にこしたことはない。それはよく分かっている。要するに上手な下級生が入ってきたことに、自分は焦っているのだ。それもよく分かっている。

だから、練習するしかないわけだけど、
とにかく、すぐリフティングするのだけ、やめて欲しい。こんなところでいちいちそんなのやらなくたって、三水は充分に上手なんだからさあ。
「咲、ぼけっとしてんな！」
晶に叱られてしまった。
「はい」
武田晶、梨本咲、永田三水、三人はゴレイロの練習メニューを行なっているところである。
瞬発力を鍛えるための筋トレ。至近距離で蹴られたボールをキャッチする練習。そして咲の大大、大嫌いな、ＦＰとしてのドリブルやボール奪取、パスの練習。
咲が嫌おうとボールを蹴る練習をしないわけにはいかない。フットサルはサッカーと比較して遥かに、ＧＫが前へ出てプレーする割合が高い。人数が少なく、コートも狭いため、ＦＰがひとり増えることで得点チャンスが倍加するからだ。
三年生の武田晶も、一年生の永田三水も、最初からＦＰとして試合に出ても違和感のないくらいに上手だ。だが梨本咲は、ボールを蹴るのは苦手である。だからこそゴレイロになったわけだが、先輩も後輩もドリブルやリフティングが上手だと、挟まれている自分としては少し、いやかなり惨めに思えてくる。
フットサルにリフティング能力なんぞ関係ないんだから。と自分を誤魔化してきたが、やはり惨めは惨めだ。
まあ、自己憐憫に浸っていても仕方ない。やらねばならないことはもうはっきりと決まっているのだから。
長所を伸ばし、短所を少しでも克服する、それにはひたすら努力、練習あるのみだ。葉月ほど真面目に一生懸命にはなれないけど、頑張ろう。三水もジャガイモも関係ない。自分は自分だ！
そう決意しては、ドン底まで落ち込んで、最近の咲はこんなことを毎日のように繰り返している。

「はい、じゃあ次のメニューに進んで」
晶はゴレイロ以外の部員たちに対し、手を打ちながら叫んだ。
「奈々は、里子見てやって」
「はい」
生山里子は、西村奈々、それと村上史子、星田育美と、四人組を作った。
と、ここで早速余談であるが、ここ最近、奈々と仲良くなってきたのが村上史子である。以前の史子は色々と不満を抱え、部長に苦情をいったこともあるが、奈々が奈々なりに部に慣れてきたのと、史子自身の慣れ、奈々がいてもほとんど問題のない練習メニューを部長が構築したこと、等により奈々へのわだかまりがだいぶほぐれ、一度ほぐれさえすれば、元来史子は優しい性格なので奈々と打ち解けるのにそれほど時間はかからなかった。
まずは単純な、四人で四角を作ってパス回しの練習。続いて、一人がボールの奪い役になって、それに奪われないようにパスを出す練習。
「カナ、しっかり見てパスしな！」
「はい」
久慈要は抜群に上手な技術を持った一年生であるが、生山里子はまったく構わうことなく思うところがあれば注意する。とうとうと技術論を並べたてて指導したこともあるくらいだ。そうした知識は久慈要のほうが遥かにあり、経験も久慈要のほうが遥かに長いのだが、それは里子の知ったことではない。自分は年上だから、なにをいっても構わないのだ。
因みに里子がヘマした時は、それは相手のせいである。相手が受け損ね蹴り損ねするのが悪いのだ。異論は受けない。
里子は、奈々の打ち上げてしまったボールを、素晴らしい反射神経で両手でキャッチ。
そのまま、立ち止まった。
また、来てる……

里子は、窓から黒服の男が二人、こちらを覗き見ていることに気付いた。以前に追い掛けようとして逃げられたことがあったが、そのためか、今日はより目立たないように、小さく顔を覗かせている。
「ちょっと、三人で練習してて」
史子たちにそういうと里子は、男たちのいる通路側ではなく反対側の壁へと向かい、剣道部、バスケットボール部の練習している中を通り抜けていく。遠い側のドアから、通路に出ようという算段だ。
しかし里子の目論見は、気付かれてしまったようだ。横目で見ていたところ、男らの姿が窓からすっと消えたのだ。
結局、以前のようにまた慌てて走り出す里子。男子がバスケットボールのゲームをしているコートのど真ん中を、苦情もものともせずに突き抜けた。
通路に出た。
左を向くと、男らが、走って角を曲がるのが見えた。
後を追った。
角を曲がった。
しかし、男らの姿はなかった。
弱い雨の降る中、室内履きのまま通路を外れて地面へと降りて、しばらく周辺を探したが、男たちの姿はどこにも見当たらなかった。
「また逃げられた、畜生」
足元の小石を蹴飛ばした。
清掃用具のロッカーが開いており、石はガンと音を立ててその扉に当たった。
里子は諦め、戻っていった。
ロッカーの扉が動いた。
開いた扉と体育館の壁の間に、先ほどの二人の男が立っていた。
ロッカーに隠れたら絶対に怪しまれ、開けられる。そう考え、わざと扉を開けてその裏に隠れたのだろう。
二人とも、息を切らせ、肩を大きく上下させている。
「乱暴だな、あの娘。石なんか蹴って。頭に当たるとこだったよ」

「なんでこんなことしなきゃならないのか。ねえ花岡さん、ばかばかしいねえ」
大きな呼吸の合間に、そんな愚痴をこぼしている。
ロッカーの扉を閉め、服の埃を払い、二人は歩き出そうとした。
彼等の前に、山野裕子が立っていた。
「あのさあ、なんなの、おっさんたち？」

2

つい先ほどまでしとしとと降っていた雨が、いつの間にか梅雨とは思えないほどの大粒になっていた。
山野裕子は、職員用玄関の前で立ち尽くしている。
ほんの十歩で屋根の下だというのに、雨に打たれるがままになっている。
すっかり伸びてきて女の子らしくなっている前髪だが、額にびっちりと張り付いてしまっている。目が片方完全に覆われてしまっているのに、かきあげようともしない。
雨粒を避けようと思うことも、視界を塞ぐ前髪をどけようと思うことも、なんの思考すらも働かない、そんな精神状態なのだ。
どれくらいの時間、立っていただろうか。
ガラス戸が開き、二人の黒スーツの男が出てきた。
「報告、してきたんだ」
裕子は、小さく口を開き、力ない声を出した。
「それが、仕事だからね」
ひとりが、手にした傘を広げながら、答えた。
彼らは、文部科学省から派遣されている、いわゆる監査係だ。
佐原南高校は試験的に知的障害者の受け入れをおこなっている。
彼らは、受け入れられた障害者を観察し、報告するのが仕事だ。
その、受け入れられた障害者の一人というのが、西村奈々である。
対象者の本来の様子を知るために、隠れるように調査をしていたのだ。絶対そうしなければならないということはないが、おおっぴ

らにやらないほうが望ましいだろう、と彼らの上司の判断で。
学校側への報告内容がある程度まとまったため、校長へ話をしてきたのである。
なんのための観察なのか、単純に説明するならば、その受け入れ先で学ぶのが適切か否かということである。監査員の調査による採点、教師による採点、テストの結果などを基にした文部科学省による採点、主にこの三点により決定される。
そのようなことを、先ほど、この監査係の男たちからは聞いた。しかし、どんな饒舌に語られようと裕子にとって納得出来るものではなかった。
ずぶ濡れの裕子は、一人に歩み寄ると、肩を掴んだ。
「ふざけんなよ。なにが、採点だよ。色々なのがいるから、人間なんだろ」
「痛いよ、離しなさい」
振りほどこうとするが、裕子が細い腕によらず怪力なのかそれとも男が非力なのか分からないが、なかなか振りほどくことが出来ない。
だが、横から伸びてきた大きな手が、裕子の腕を掴み、男の肩から引き離した。
それはゴリ先生こと、フットサル部顧問の高村広大先生の手であった。
黒スーツの男たちは、小さく頭を下げると、足早に去っていった。
「先生も、知ってんだよね。あいつら、奈々のこと調べて、学校を辞めさせようとしているって」
ゴリ先生は頷いた。
「酷いよ、そんなの」
裕子はきっと睨みつけた。
「学校に簡単に入れておいて、辞めさせるための調査をこそこそとするなんて」
「辞めさせる調査というわけじゃない。辞めると決まったわけじゃ

ない」
「でも結局、そういうことじゃんか。色んな点数つけでダメならポイなんだろ。あたしだって勉強ついてけなくて卒業出来るかどうか分からないんだ。奈々は近くだからとりあえずここに入っただけだし、学力で考えるなら厳しいでしょ」
「知的障害を考えれば普通科のどんな学校だって厳しいだろ。それに、お前のいう通りだとしてもだ、試験的にこういうことを行なっていくのは、今後、知的障害を持つ多くの人が幸せになるために、役立つことなんだ」
「奈々を、ひとりを、幸せに出来ないくせに」
「ひとりを幸せにするためだ。それに、西村が不幸かどうかを決めるのは、お前じゃない。何様だ、お前は」
「分かってるよ、そんなこと。でも、あたしには我慢出来ない。だって奈々、どんなときだって幸せだって思うよ。どんな辛い目にあっても、幸せだって笑ってるよ。それ凄い、偉いと思う。この前だってさ、幸せじゃないって感じるのも生きていて幸せだからそう感じることが出来るんだから、だから幸せじゃないことなんかない。そんなこと、いったんだよ。でもさあ、なんで高校生の女の子がさ、そんな自分を押し殺すような思考して幸せを感じなきゃならないんだよ。そんなの、おかしいじゃんか。見ていて辛いじゃんか」

3

「話があります」
裕子はノックもなしに校長室のドアを勢いよく開いた。
校長は、自分の席で書類に目を通しているところだった。
バケツの水を何杯もかぶったかのような、裕子のずぶ濡れ具合に、校長は唖然としてしまってなにもいえないでいる。
裕子は許可も得ず、中に入った。
「三年二組、山野裕子です。西村奈々のいるフットサル部の、部長です」

「ああ、よく知ってるよ」
校長は、気を持ち直して、低い声で威厳を取り繕った。
山野裕子は、この学校の教員ならば誰でも知っている。不良生徒ではないのだが、成績のことや遅刻のこと、うるさいくらいに元気なことから、非常に目立つ存在であるから。ましてや、裕子本人がいった通り西村奈々の所属している部活の部長ともなれば、なおのこと校長が知らないはずがない。
「奈々、ここを辞めさせるんですか？」
回り道をせず、直接的に疑問を口にした。
「現状では、そうなる。別の学校のほうが、相応しいとの判断が出た」
校長は、隠さなかった。
「どういう判断だよ」
校長相手に、タメ口になっている。
「成績だけではない。いろいろな面を検討した上での、学校生活を送れるかどうかの総合的な判断だ」
「あのさ、転校、辞めさせたいんだけど。どうすればいいかな」
「わたしの一存では、どうしようもない」
いさせ続けることで学校の平均学力下がるのが嫌なだけだろ。裕子は、心の中でそう吐き捨てた。
「本当に、どうしようもないの？」
「一介の校長などに、ああいった特殊な生徒をどうこうする権利なんかあるわけないだろう」
確かにその通りなのだろう。
裕子は、少し沈黙した。
数秒後、また口を開いた。
「転校って、いつ？」
「今月いっぱいまでここにいて、七月からだ」
「ほんと奈々のこと考えてないよな。バカじゃねーの？　友達できる前に夏休みになってリセットされちまう」

「わたしにいわれても困る」
「せめて、もう少し転校を待ってもらうこと、出来ないかな？　来月にね、フットサルの大会があるんだよ。そこで、思い出を作ってあげたいんだ」
学校に入りました辞めましたでは、そもそもなんのために入ったのか。先生たちは試験的になどとかっこつけたことをいうけど、生徒側には関係のない話だ。
「入学したからにはなにか残したい、残させてあげたい、とそういう気持ちは分かるよ。しかし、君個人の要望としては、聞くことは出来ない。保護者がそう考えているのであれば、委員会にかけあってみることは可能だが」
その最後の言葉に裕子は反応し、校長の胸元につかみ掛かった。
「ほんと？　絶対だな？　絶対、かけあえよ！　嘘付いたらぶっ飛ばすかんな」
裕子は怒鳴るように声を張り上げた。
「あくまで、かけあうだけだ。結果は知らん。苦しいよ」
「いいよ、それでも。ありがと、校長先生」
裕子は手を離し、踵を返し、校長室を飛び出した。
床一面、浸水したかのような酷い有様に、校長は、またも唖然とするしかなかった。
校長室だけではない。玄関まで続く廊下、まるで台風が大暴れしたかのようであった。
その小さな台風は北々西へ進路を変え、フットサル部の練習している、奈々の待っている体育館へと向かっていた。
しかし、部活ももう終了時間を過ぎてしまっている。もう、誰もいないかも知れない。
奈々、もう晶か直子と一緒に帰ってしまったかな。それならそれで、こちらから奈々の家に行くだけだ。奈々のお母さんに、転校のこと、相談しないと。
裕子は水飛沫を撒き散らしながら全力で走る。

今日、裕子はフットサル部の練習を完全に休んでしまうことになった。一年生の頃にＯ１５７にやられて寝込んで以来だ。
部のみんなに迷惑をかけてしまったよな。みんな、心配したかな。それとも、居残りが長引いてとうとう来なかったくらいにしか思ってないかな。
などと心の中に呟く裕子だが、まさにいま現在、フットサル部、いや奈々たちに、それどころではない危機が迫っていたのである。

4

「王子先輩、結局最後まで来なかったね」
武田直子は、北校舎の裏玄関そばの煉瓦の花壇に腰を下ろしている。膝の上に肘を乗せ、両の手のひらの上にあごを乗せている。
制服姿。もう部活練習の後片付けもとっくに終わり、解散している。
直子の隣には、西村奈々が座っている。
ここにいるのは、この二人だけだ。
少し離れたところにプレハブがあり、その中にあるフットサル部の部室には、まだ直子の姉、武田晶が残って何か作業をしているはずだ。
時折奈々がふらりと立ち上がっては、蟻の巣を探し始める。すぐ、屋根のないところに行ってしまうため、その都度直子が引き戻している。
「雨に濡れちゃうでしょ。こんな時に、外に蟻さんなんかいないよ」
何度目かの、同じ台詞。
「でも、逃げ遅れちゃってたらかわいそう。雨であっぷあっぷしちゃう」
奈々も、その都度同じ言葉を返す。
いつもは、山野裕子が奈々を連れて一緒に帰っている。今日は直子が送っていってあげてもいいのだが、王子先輩の行方が分からないので、勝手なことをしていいのか決断しかねているところだ。い

つまでも来ないようなら、王子先輩は放っておいて姉と一緒に奈々を連れて帰るつもりだけど。
「なにやってんだろうねえ、先輩」
居残り勉強はとっくに終わったって話だし。カバン置いて帰っちゃうこともないだろうし。
「にゃにやってんだろねえ、先輩」
奈々は額にシワを寄せながら、直子の言葉を真似した。
「え、あたしそんなシワの寄った渋い顔してる？　やだ、やっぱりなんか化粧品塗ったほうがいいのかな。まだ高校生なんていってられない」
一、二、と顔面体操を始める直子。
面白がって奈々も真似をする。
「こんなとこにいやがったよ」
聞き覚えのある声に、直子は振り向いた。
山田秀美。それと、小出恵子と安東正江だ。
それに、見たことのない制服を着た、知らない顔の男子が二人。
直子と奈々は、その五人に囲まれた。
「ちょっとさ、来てくんない？」
山田秀美は、顔を直子の眼前へと近付けた。
直子は、唾を飲んだ。
小出恵子の手元から、なにかカチカチという音が聞こえる。多分、カッターナイフを伸び縮みさせている音だ。
「人、待ってるんで」
直子は、胸の奥から、なんとか言葉を絞り出した。
「うん。それそっちの事情でしょ。あたしらにはさあ、そんなことどうでもいいことだからさ。ちょっとさ、来なよ。話したいことがあるんだ。大丈夫。そんな、たいしたことじゃないからさ」
山田秀美が、より顔を近づけてきた。おでこがぶつかりそうなくらいに。
「たいしたことないのなら、ここで、聞きます」

「お前ふざけたこといってると殺すぞ。秀美が話があるっていってるだけなんだから、来りゃいいだろ！」
男子の一人が、山田秀美を押しのけて、直子の胸倉を掴んだ。
直子は、怖くて逆らうことが出来なかった。
「叫んだら殺すぞ」
男子に掴まれたまま、引きずられるように歩いていく。
「お前も来い」
小出恵子に手招きされ、後を追うように歩き出す奈々。
奈々の顔にはまったく恐怖の色はなく、むしろなにが起こるのか興味しんしんといった様子だ。
二人が連れて来られたのは、運動部の用具室だ。
「話って、なんですか」
直子は、すっかり敬語になってしまっている。同じクラス同士だというのに。
「うん。簡単なことなんだけどね。……お前さ、あれからずっと、調子に乗ってたろ」
あれから、というのは、二ヶ月前、直子と奈々が、山田秀美らに追い掛けられた時のことだ。
「そんな、調子になんて、乗ってない」
直子は誤魔化すような曖昧な笑みを浮かべようとした。
これまで嫌なこと、大変なこと、すべてそうしてうやむやにしてきた。逃げてきた。
今回も、それでなんとかなる。
しかし、容赦のない平手打ちが、すべてを吹き飛ばした。
直子は、打たれた自分の頬を押さえた。
反対側の頬に、もう一発、受けた。
山田秀美は殴りつけた姿勢のままで、にっと笑った。
「あたしさあ、お前みたいなの大嫌いなんだよね」
直子は、なにもいえなくなってしまっていた。演技で微笑むことすら、出来なくなっていた。

「ねえ、ねえ、なんで殴るの？　なんで殴るの？　バカといってくれるのうれしいけどナオちん殴ったらダメだよ！」
西村奈々が山田秀美に詰め寄った。
「うるせえんだよ、脳なしの激バカ！　死ね！」
山田秀美はそう叫ぶと、西村奈々の頬も張り、さらに胸を激しく突き飛ばした。
奈々は後ろによろけて、壁に背中を強打した。
直子は、無意識のうちに手が動いていた。
ぱん、と音が鳴り響いた。
山田秀美は、呆然とした顔で自分の頬を押さえている。
直子は、自分自身の手のひらを見つめていた。
生まれて初めてだ。
人を、殴ってしまったこと。
殴ろうとして殴ったわけじゃない。
奈々が殴られたのを見て、反射的に手が動いてしまったのだ。
直子は、ゆっくりと手を下ろし、ゆっくりと顔を上げると、山田秀美の顔を見た。
山田秀美の顔が、呆然とした表情から、喜悦の笑みへと変わっていく。
「調子に、乗っちゃったねえ」
「だって、そっちが」
山田秀美は奇声を上げて素早く踏み込むと、なんの躊躇も見せず直子の顔面を正面から拳で殴りつけていた。
直子の腹に、山田秀美の膝がめり込んだ。瞬時に込み上げる嘔吐感に前のめりになったところ、再び顔面を殴られた。
床に膝をつく直子を、山田秀美はなおも執拗に蹴り続けた。
直子は床に転がった。
抵抗する力もなくして、ただ倒れている直子を、山田秀美はなおも蹴り続けた。胸を、脇腹を、顔を、腿を、蹴り続けた。
相手が完全に抵抗出来なくなっていることを確認すると、山田秀

美は嬉しそうに叫んだ。
「お待たせしました！　レイプショーの始まりでーす！」
男子がひとり、直子の上に馬乗りになった。
「お前、下から脱がせ」
もうひとりの男子に命令する。
いわれた方は早速スカートの中に手を入れようとする。
朦朧とした意識から我に返った直子は、甲高い悲鳴を上げて、必死に暴れた。
「うるせえんだよ、バカ」
馬乗りになった男子が、直子の顔を拳で殴りつけた。
なおも暴れ続ける直子。
小出恵子と安東正江も、直子の両足をそれぞれ押さえ付けた。そして、それぞれ横から引っ張って、広げようとする。げらげらと、楽しげに笑いながら。
男子はもう一度直子の顔面を殴ると、手で口をふさいだ。
「おい、開かせんのは後だ！　パンツ下ろせねえだろ」
直子は身をよじらせて必死の抵抗を続けるが、四対一、しかも二人は男子、限界があった。
まだ直子の下着は下ろされてはいない。彼らは、獲物がじわじわと絶望感を味わうのを楽しんでいるのだ。
うわわあああん、と奈々が泣き出した。鼓膜をばりばりと震わせる大きな声が、用具室内を反響した。
「うるせえな！　秀美、そいつの口おさえとけ！　こいつの後で、やってやっから」
山田秀美は、西村奈々の身体を押さえ付け、片手で口をふさごうとする。
「いてっ」
奈々は、山田秀美の指に噛み付いた。
山田秀美は、奈々の身体を激しく押して、壁に叩きつけた。平手打ちで、頬を殴った。

「黙ってろ！」
奈々は黙らなかった。狂ったような、より大きな声で叫び続けた。
その時である。
扉を、どんどんと叩く音が聞こえた。
ここにいる全員が、扉を見ていた。
「奈々！　ナオ！　どうした？」
山野裕子の声だ。
扉を激しく叩き、ノブを回している。
しかし、扉は開かない。
内側から鍵をかけられる扉ではないが、その代わりにしんばり棒をしてあるのだ。
「続けなよ、森田。つうか、とっととぶち込んじまいな」
山田秀美は、すぐに落ち着きを取り戻した。
「あいつが扉をぶち破って入ってきたって構わないよ。こいつが、大好きな先輩に恥ずかしいところ見られるだけのことなんだから。まあ、これからぶち破られんのはドアじゃなくて別んとこだけどさ。絶対処女だよ、こいつ」
山田秀美が下品な笑みを浮かべたその瞬間、窓ガラスが割れた。くだけちった破片が、室内へと落ちた。
細い腕が、ガラスの砕け落ちた空間から伸びてきて、素早く鍵を開けた。
窓が開いた。
山野裕子の顔が見えた。どれだけ雨に打たれていたのか、全身はずぶ濡れ、髪の毛も頭皮にぴっちり張り付いている状態だ。
男に馬乗りになられている直子、山田秀美に押さえ付けられている奈々。裕子は一瞬で状況を理解した。
「ブッ殺すぞ、てめえら！」
叫ぶと同時に、窓枠に手をかけ、驚くべき身軽さで、一瞬のうちに室内へと入り込んでいた。
直子に馬乗りになっている男子の頭を本気で蹴飛ばした。フット

サルで鍛えた脚力、男子はぎゃっと悲鳴をあげて、直子の上から転がり落ちた。
「秀美！　このバカたれ！」
窓枠から、裕子に続いてこの高校の制服姿、坊主頭の大柄な男子が入ってきた。山田秀美の兄、則夫である。
「晶、誰か先生呼んできて！」
裕子は窓の外を見て叫んだ。
「分かった」
武田晶の声。走り去る足音。
「ナオ、奈々、大丈夫？」
裕子は呼びかけるが、しかし、返事はない。
奈々は相変わらず狂ったように叫び続けている。
直子は、完全に放心状態。呆然と天井を見上げているが、視線がうつろだ。
「あたしの可愛い後輩たちに、よくもやってくれたな」
裕子は両手を組み、指を鳴らした。
「うるせえバカ！」
先ほど直子の下着を下ろそうとしていた方の男子が、立ち上がると、裕子に殴りかかってきた。
裕子はその拳を紙一重で避け、左ジャブ、右ストレート。兄から教えてもらったボクシングのコンビネーションだ。
顔面に強烈な打撃を受けてぐらりとよろける男子の、首根っこを掴むと軽々と持ち上げた。
男子はじたばたともがこうとするが、裕子が細い腕によらず怪力なのか男子が非力なのか、まったく抵抗することが出来なかった。
「この、ヘナチン野郎！」
あっさり投げ飛ばされ、先に倒れていたもうひとりの男子の上に崩れた。
「てめえは、ひとりでエロビデオでも見て粗末なもんぶっかいて処理してりゃいいんだよ！」

下品な台詞を叫びながら、陸上競技用のハードルを蹴飛ばした。幾つにも重なったうちの、一番先頭のハードルが、べきりと音がして板が割れてしまった。

二人の男子は、「ひっ」と声を喉に詰まらせ、大慌てで起き上がると、扉のしんばりを外し、ほうほうの体で逃げ出してしまった。

「なにやってんだよ、お前は！」

山田則夫は妹を睨みつけ、怒鳴った。

妹は、まったくひるむことなく、兄を睨み返した。

「お前がダサイから、あたしが舐められて恥かかされたんだよ！」

兄は学校中が震え上がる不良である。山田秀美はそう思っていたのだから。

「くっだらねええ！」

裕子は絶叫した。

すぐ横にある、カゴに入っているハンドボールを手に取り、床に叩きつけた。

ばん、と音がして、ボールが破裂していた。

もともと脆くなっていたのかも知れないが、とにかく化け物じみた怪力に、山田秀美は唾を飲んだ。安東正江は、腰を抜かしてしまった。

裕子はさらに、ハンドボールの入っているカゴを蹴飛ばした。ガン、という音とともに、たったひと蹴りで金属製のカゴは大きく歪んでしまった。

「だせえのは、てめえの方だ！」

裕子は、山田秀美を睨みつけた。

山田秀美は舌打ちした。

「関係ないだろ！　お前には」

それは単なる捨て台詞になった。山田秀美たちは、なにも出来ず、逃げ出すしかなかった。

室内に残っているのは四人。山野裕子、山田則夫、武田直子、西村奈々。加害者の一人もいなくなった空間には、簡単にぬぐい切れ

るはずのないどんよりとした空気が残っていた。それは冷たく、粘液質な。
直子はまだ、仰向けになったまま、うつろな視線で天井を眺めている。その目には、何も映っていないように見える。脳が自己防衛のため、己の意識を心の奥へと封じ込めているのだろう。
奈々は、直立不動、硬直したままで叫び声を張り上げ続けている。
まもなくして、晶がゴリ先生を連れて戻ってきた。
「ナオ、大丈夫？」
用具室に入るなり、晶は真っ先に妹へと近寄った。
乱れたスカートを直してやる。
顔を何度も殴られたのだろう。頬や目の周りが、赤黒くなっている。
晶は、ぎゅっと唇を噛んだ。
「……ナオ」
妹の名を呼んだ。
反応がない。
それでも晶は、何度も、何度も呼びかけ続けた。
どれくらい呼び続けたろうか。直子の目に、少しづつ光が戻ってきた。
「お姉ちゃん」
晶の、顔を見た。
直子の目に、どんどん涙が溢れてくる。
「ナオ……」
直子はゆっくりと上体を起こすと、激しい勢いで姉へと抱きついた。
「お姉ちゃあん、怖かったよう」
ぼろぼろと、涙がこぼれている。
「もう、大丈夫だから」
晶は、改めて妹の顔を見た。
一体、どれだけ容赦なく殴られたのか。

なんで、ナオがこんな目にあわないとならないんだ。
「大丈夫、だから」
晶は、理不尽な目にあっている妹に対して、そんな言葉をかけてやるくらいしかできなかった。あとはただ、抱きしめていてあげることしかできなかった。そんな自分の無力さが、たまらなく焦れったく、悔しかった。
西村奈々は、まだ、叫び続けている。身体をぴんと真っ直ぐに硬直させたまま、意味の分からない言葉を叫び続けている。
脳がパニックを起こして、わけが分からない状態になっているのだ。
裕子は、奈々の正面に立って、ゆっくり、背中に両腕を回した。
ぎゅっと、抱きしめた。
「ごめん」
山田秀美、注意していたのに。
裕子は自分の迂闊さを悔いた。
奈々にも、直子にも、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

5

体育用具室に閉じ込められた直子と奈々を、裕子たちが間一髪で助けに入ったわけだが、これには次のような経緯がある。
奈々の転校の件で校長室から出て、走っていた裕子は、山田則夫と廊下で出会った。偶然ではない。山田則夫が、裕子を探していたのだ。
妹の秀美がよからぬことを計画しているらしい。先ほど、他の学校の男友達らしいのと一緒にいるのを目撃した者がいる。則夫には思い当たる節というのがあった。先日の家での発言、「兄貴、あたし、この学校辞めっからさあ。つうか、退学になる。絶対」
胸騒ぎどころの話ではない。裕子は、フットサル部の部室へと急いだ。
そこにいるのは武田晶ひとりだけだった。

直子たちは、北校舎裏口で裕子を待っているはずとのことで、すぐにそこに向かったが、しかし、誰もいなかった。
ただ、地面にハンカチが落ちていた。
雨に濡れ、泥まみれになって汚れているが、晶曰く、これは間違いなく直子の物だ。
これがただならぬ事態を表しているものかどうかは分からない。だが、裕子は、ぞくりとする不快感に鳥肌が立った。山田則夫に、事前に不吉なことを吹き込まれていたから、ただそれだけのことかも知れないが。
とにかく急いで、直子と奈々を探さなければならない。なにもないなら、それはそれでいいのだから。
裕子と晶、そして山田則夫、三人で手分けして直子と奈々を探しているうち、裕子は用具室の方から、西村奈々の叫び声を聞いたのである。

奈々と直子を救出した後、裕子たちは職員室に呼ばれ、ゴリ先生と、直子たちのクラス担任である森岡先生、そして校長の三人に囲まれ、ことの詳細を尋ねられることになった。
発端から話すとなると、先々月に、山田秀美らがトイレでタバコを吸っていたことから説明する必要がある。不良行為の逐一までをも報告する必要があるものか否か、と、直子は、このような目にあってもまだ、先生へ全てを話すことをためらっていたが、裕子は構わず、知っている限りのあらゆることをぶちまけた。それほど、山田秀美という人物に対して頭に来ていたのだ。
会議を行なった上で、山田秀美らにはしかるべき処分を下すことになる。そう伝えられ、裕子たちは解放された。
もしもあのハンカチが落ちてなかったら、もしも奈々が恐怖から叫び声を上げることも出来なかったら、などと想像するだけで恐ろしい。想像するだけで、裕子には山田秀美への激しい怒りが込み上げてくる。

この手でぼこぼこに殴ってやりたいところだ。直子たちが味わった苦痛を千倍にして返してやりたいところだ。だが、学校がしかるべき処分をするといっているのだから、任せようと思う。どんな酷い処罰だとしても、残念ながら八つ裂きにするようなことはないだろうが。

山野裕子、武田晶、武田直子、西村奈々、すっかり暗くなった道路の歩道を、足取りも重く歩いている。

ひとりだけ元気なのが奈々だ。鼻歌を歌っている。

一番元気がないのが直子である。それはそうだろう。未遂に終わったとはいえ、監禁され、顔面を何度も殴られ、全身を蹴られ、暴行されかけたことに変わりなく、痛みも恐怖もそれは耐え難い凄まじいものであっただろうから。

帰り道の途中で、裕子と奈々の二人は、晶たちと別れて道を折れた。

奈々を自宅まで送るためだ。

通学路を折れて少し進んだところに、奈々の家があるのだ。

山田秀美らに用具室に閉じ込められて殴られた時には狂ったように喚き続けていた奈々だが、現在はすっかり回復しており、普段通りの元気な笑顔に戻っている。事実の記憶はしっかりと残っているようだが、嫌な感情の記憶はすっかり忘却したように思える。もしかしたら内面では辛い気持ちと戦っているのかも知れないが、それは裕子には分からない。

現在の、楽しそうに笑っている奈々を、不幸と思うのは、それは余計なことなのだろうか。

裕子は、考えた。

幸せは自分の脳が決める。当たり前のことと思っていたけど、ならば、なにが起きても幸せだと本人が思い込んでいたとしたら？　殴られても幸せと本人が思っていたら？　それで幸せなんだから放っておけばいいのか？　いや、そんなわけがない。奈々は、本人だ

けでなく、他人から見ても幸せになるべきではないのか。
当事者でない赤の他人が、そんなことまで考えるのは、楽しそうに笑っている奈々を、不幸と思うのは、それは余計なことなのだろうか。
県道から折れた狭い道を、少し歩いたところに、小さな住宅街がある。奈々の家は、その住宅街の中にある。
自宅に到着すると、奈々は門を開け、玄関のドアを開け、飛び込むように中へ消えていった。
さほどたたないうち、ドアが開き、奈々の母親が顔を出した。
裕子はまず遅くなったことを謝った。そして、二言三言、言葉をかわした。
奈々のお母さん、明るくて、とてもいい人だよな。裕子は思った。色々と、大変なこともあるだろうに。
今日の学校での出来事、本当は、話さないといけないのだろう。直子ほどではないにせよ顔を殴られたのだし、やはり危うく強姦されるところだったのだから。
でも、どうしても切り出すことが出来なかった。
何度も、口に出そうとしたが、どうしても話すことが出来なかった。
どうせ、今日明日のうちに学校か警察から連絡がいき、知ることになるというのに。
裕子は、当たり障りない言葉を喋るだけで、本当にいわなければならない大事なことを、どうしても口に出すことが出来なかった。
自分だけそれではずるいから、今日奈々のお母さんに聞こうと思っていたことも、聞かなかった。校長からいわれた、転校延期の件だ。
これも、どうせ学校から話が行くのだろうから。
転校の話を、自分から切り出すのも辛かったし。
自分が辛いから黙っている。相手が辛いだろうから、と自分に思い込ませて黙っている。結局、自分には勇気がなくて、逃げている

だけなんだ。　以前直子に、あんなに偉そうなことといっていたくせに。

6

「じゃあさ、ウナギでもいい！」
裕子は指を二本立てた。その「二」ってどういう意味だ。直子は思ったが、口にしたのは別の言葉。
「そんな、本当にいらないですってば。だいたい、でもいいってアイスよりウナギのほうがよっぽど高いじゃないですか。あたし、本当に大丈夫ですから」
佐原駅北口近くの、川沿いの狭い道を、山野裕子と西村奈々と武田直子が並んで歩いている。
体操着姿に、スポーツバッグ。土曜練習の帰りである。
先日の件のお詫びと、元気が出るようにという目的で、裕子が二人にソフトクリームを奢るといいだしたのが、この会話が始まったきっかけだ。
直子は頑なに拒み続けている。
出来たばかりのジェラートショップのソフトクリームなので、直子は興味がなくはなかったが、奢られる理由が理由なので断った。そしたら、今度はウナギを奢るなどという。まったく意味不明だ。まあ、この辺は鰻屋が多いので、それでつい口をついて出て来ただけなのだろうが。
だいたい、この件で王子先輩が責任を感じているというのが気に入らない。山田秀美との一件は、自分のクラスで起きたことであって、フットサル部はなにも関係ないのに。部活が終って王子先輩を待っていて遅い時間だったからとはいえ、相手がその気ならどんな時間だってどんな場所でだって狙えるわけだし。
「そんなあたしを元気付けたいなら、王子先輩が元気でいて下さい。それだけでいいです。というか、あたしはもうとっくに元気ですから」

「そういわれても、その姿を見ているとなあ」
裕子は弱った表情を浮かべた。
両手で頭をがりがりと掻いた。
直子は、右目に眼帯をしている。拳で何度も殴られたことで、後から腫れ上がってしまったのだ。目の周りだけではない。顔中、青黒くなっていたり、黄色くなっていたり、と痣だらけだ。
「じゃ、奢らない。奢らないから、みんなでソフトクリーム食べにいこか」
「それなら……実はあのお店、ちょっと興味あったんですよね。亜由美先輩から美味しいよって聞かされてて」
直子は痛々しいそうな顔で、ちょっと照れたように笑った。
「なんだ亜由美、もういってんのか。でも、まあウナギでもいいよ」
「いえ、ソフトクリームで」
なんでウナギにこだわるんだ、この先輩は。
「わーい、ソフトクリーム！」
奈々が嬉しそうに、両腕を上げて叫ぶ。
川沿いの、小さな居酒屋から、一人の男が出てきた。
一般的なグレーのスーツを着てはいるものの、見るからにガラの悪そうな顔の、身体の大きな中年の男だ。
真っ昼間だというのに相当に酔っ払っているようだ。
「あれ、あいつ」
裕子は小さく声に出した。
奈々の世話になっている障害者施設の門の前で、出合ったことのある男だ。
男の方も裕子らに気付いたようで、千鳥足で近寄ってきた。
「おめえんとこのくそ園長、なにが不服なんだよ。金はたんまり出すっていってんだからよ。足りねえってんじゃ、どこまでごうつくなんだよ。ババアめ」
挨拶もなにもなく、呂律の回らない口調でいきなりまくし立てた。
「はあ、おっさん、地上げ屋か」

そういうことだったのか。ガラの悪いのも納得だ。
「人聞きの悪いことといってんじゃねえよ。ビジネスだよ、普通の。あんな好条件だってのにだんまりしやがって、ババアめ。おめえみたいなキチガイ相手にあんなの経営してると自分もキチガイになっちまうみてえだな」
男は、奈々を見て侮蔑の笑みを浮かべた。
友人を貶められ、一瞬で沸騰しかけた裕子の理性だが、自分の身体になんとかブレーキをかけ、自制した。どれだけブレーキパッドが磨り減ってしまったか分からないが。
果たして自制出来ずに激怒してしまったのは、男の方であった。奈々が、
「しああせなのかな」
と何気なく呟いたことに、からかわれたと思ったのだ。
奈々は単に、以前に園長から聞いたこの男の職が、面白いのかという純粋な疑問を口にしただけだというのに。
「ふざけんなよ、このクソチビ」
男は奈々に掴みかかった。
「やめろよ」
裕子は男の手を奈々から引きはがすと、そのまま二人の間に入った。
以前にこの男に会った時、奈々から逆らってはいけないといわれたが、その理由が分かった。この男はきっとその筋の人間で、迂闊な真似をしようものなら、どのような難癖をつけられるか分かったものではないからだ。下手をすれば、施設の存続にもかかわるというものだ。
裕子は、奈々の代わりに胸倉を掴まれ、揺さぶられた。
屈辱に、耐えるしかなかった。
売られた喧嘩、個人的には別に買ってやったっていいのだ。男は大柄で強そうだが、ぐっと堪えるくらいなら殴り合って何発もやられるほうがずっといい。

そうしないのは、奈々のいた施設に迷惑をかけたくないということと、フットサル部員の不祥事ということで部員に迷惑をかけたくないということ。その二つだ。
先日の山田秀美たちによる事件の際にも、裕子は相手の男子を蹴飛ばしたり顔面にパンチを浴びせたりしているが、運良く正当防衛が認められただけで、あれだって処分を受けていてもおかしくなかったのだから。
しかし、
相手が無抵抗なのを良いことに、男の行動がどんどんエスカレートしていく。
裕子はこづかれ、髪の毛を引っ張られ、殴られ、すねや腿を思い切り蹴飛ばされた。
何度も、蹴られた。
激痛に思わずしゃがみこんだところを押し倒され、馬乗りされ、殴られた。
「てめえ、いい加減にしないと怒るぞ！」
下から、裕子は睨み付けたが、男は不気味な笑みを浮かべただけだった。
「ああ、怒れ怒れ。殴ってこいってんだよ」
笑みを浮かべながら、裕子を挑発している。
「そういうことしちゃダメだよ」
奈々が、裕子の上に乗った男をどかそうとするが、大柄な身体はびくともしない。
「うるせえな」
奈々は、突き飛ばされ、後ろに転がった。
武田直子の甲高い悲鳴が、空気を引き裂いた。
直子は、両手で頭を抱えると、再び、金切り声のような凄まじい絶叫を上げた。
馬乗りされ顔を殴られている裕子の姿が、自分自身の記憶と同調してしまったのだ。

直子の脳内では、直子が馬乗りされ、直子が殴られ、制服を引きちぎられ、そして……
発狂したように叫んだ。
ガリガリと、自分の髪の毛をかきむしった。
「なんだ、こっちの女もキチガイかよ」
男は鼻で笑った。
「どけ！」
裕子は身体を捻って男を振り落として自由になると、素早く立ち上がった。
「ナオ！」
直子に近寄ろうとするが、しかし、
「いてえじゃねえか、おい！」
男は、裕子の服の襟を掴んだ。
「しつこいな！」
さすがに裕子も切れてしまい、どんと男の胸を突き飛ばした。
男は酔っていたのもあり、簡単に地面へと転がった。
男は罵詈雑言を叫びながらよろよろと立ち上がると、怒りの形相で裕子に殴りかかってきた。その拳の勢いから、渾身の力を込めていることが分かる。
裕子は紙一重で避けたが、男はなおも右、左と拳を突き出してくる。
兄からボクシングを教えて貰っているし、なにより相手は酔っ払い、そう簡単には当たることはない。しかし、こちらから攻撃は出来ないし、二人を見捨ててこの場から逃げてしまうわけにもいかない。そうである以上、避けて回ることにも限界があり、結局、また男に胸倉を掴まれてしまった。
酔っているとはいえ、大きな身体をしているだけあって、凄い腕力だ。
裕子は、容赦ない平手打ちを受けた。
何度も、何度も、殴られた。

裕子は歯を食いしばり、男を睨みつけた。
また、直子が絶叫した。
そして、奈々までもが泣き出してしまった。
殴られ続ける裕子の心の中に、だんだんと、いままでに感じたことのない凄まじい怒りがこみあげてきた。
自分のことではない。
なんで、ナオや奈々がこんな目にあわないとならないんだ。
地上げだかなんだか知らないけど、それって、人を泣かせなけりゃいけないものか。
純粋で何も知らない奈々を、泣かせる必要があるのか。
学校だって、奈々のことを……
「どいつもこいつも、なんで奈々をそっとしといてやらない！」
裕子は、男の腕を掴むと恐ろしい力で締め上げた。
男はたまらず、裕子を掴んでいた手を離した。
裕子は立ち上がると、男の顔を目掛け、真っ直ぐ拳を突き出した。
男の鼻先数ミリというところで、拳はとまった。
「ひっ」
悲鳴を上げた。
男は逃げようとして、足をもつれさせ、転んだ。
「いてえ！」
酔っているためか、受け身に失敗したようで、どこか強打してしまったようだ。
男は立ち上がった。
左腕を押さえている。
「訴えてやる！　くそ、いてえ！　お前、訴えてやるからな！」
引きつった笑みを浮かべながら、泣き喚き始めた。
「なにいってんだ、てめえ！」
逃げ去る男の背中に、裕子は全身から出る怒気をぶつけ、怒鳴り声を上げた。
奈々の泣き声が、ますます大きくなった。

直子は、いつの間にか地面に座り込み、膝の間に頭を埋め、まるで幼子のように、嗚咽の声を漏らしていた。
裕子は舌打ちし、激しく足を踏み鳴らした。
脱力。
裕子も、座り込んだ。
長く、息を吐いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7377v/

新ブストサル　第二巻

2011年12月3日00時47分発行